

文話歌話



60

65

70

75



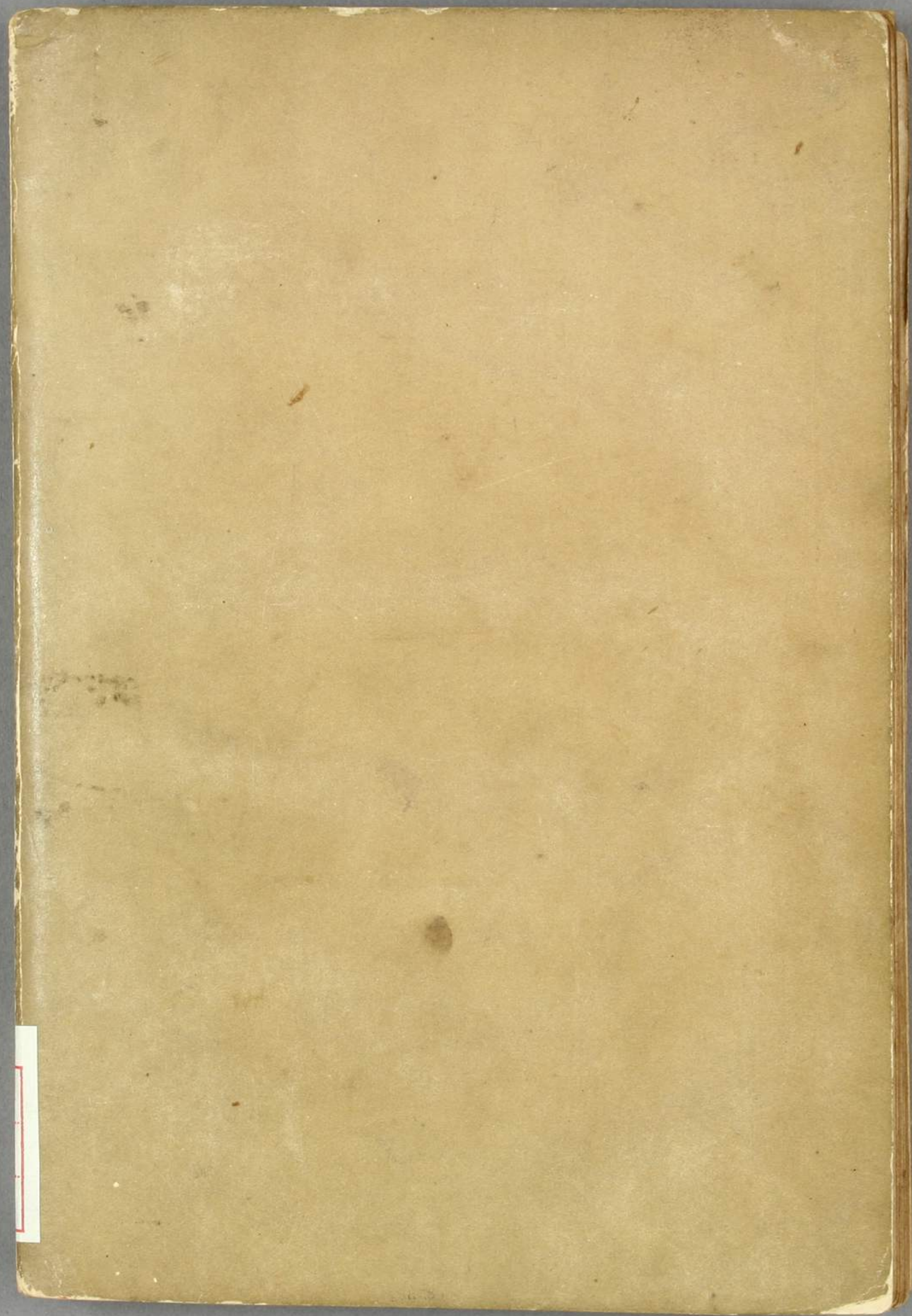
文話歌話

金子

本問文庫

文庫 14

D 68



謹之

力也系其

景



文話歌話

金子薰園著

大正同館藏版

文庫14  
D68

今年初秋、出て、京都の風光に親しむこと十數日、  
其の間屢々竹内栖鳳氏を訪うて、談り交はせし畫  
話、文話、歌話のたぐひいと多かり。書中、予が談りし  
二三を収録せし故を以て、當時の記念に、此の一卷  
を氏の几右に呈す。

本書は予が文章と和歌の上に於ける、折々の感想を編述せるものなるが、もと初期の研究者に示すべき目的にて書き綴りし類ひ其の多きを占めたるれば、他も之れに倣ひて、努めて叙述の平易卑近なるを期したり。なほ別に添ふる所の「文章月令」は、月々に起れる特殊の自然と人事とに就き、多少の新意を注げるもの、かねて又文章の資料たらむことを欲せり。

明治四十四年九月

著者

## 文話歌話 目次

(一)	自己の爲めの文章	一
(二)	新しい歌	八
(三)	いゝ文章	一二
(四)	自覺と云ふこと	一七
(五)	短歌と繪畫と	二一
(六)	圓みのある作品	二二
(七)	作の上の自由	二五
(八)	叙景の歌の眞意義	二八
(九)	新緑の森の觀方描き方	三四
(一〇)	西行の歌	四一

(一一)	『倫敦塔』の一節	五
(一二)	黄葉の「觀方」描き方	六〇
(一三)	二種の感興	六七
(一四)	短歌に於ける配合	七〇
(一五)	今の眼で觀た古人の春と夏の歌	七八
(一六)	迷ふと云ふこと	九六
(一七)	歌の出来る時	一〇九
(一八)	生きた會話	一一〇
(一九)	景色の纏め方	一一七
(二〇)	歌を詠む二人の態度	一二四
(二一)	力のある文章	一三〇
(二二)	興味から作ること	一三八

(二三)	今の人々の秋の歌	一四五
(二四)	『寒月照梅花』に對する聯想	一五六
(二五)	徹底と云ふこと	一六三
(二六)	日課に歌を詠むと云ふこと	一七〇
(二七)	長文と短文と	一七七
(二八)	作歌と初期の修養	一八三
(二九)	候文と口語文と	一九〇
(三〇)	戸外で出来る歌	一九七
(三一)	文章推敲の實例	二〇四
(三二)	歌の材料の扱ひやう	二一二
(三三)	思ひついたこと	二一九
(三四)	文章の互評	二二一



# 文 話 歌 話

金子薰園 著

## (一) 自己の爲めの文章

諸君は文章を作らうとするに當つて、自己の爲めの文章を書かうとしないで、文章の爲めの文章を書かうとする心持はなからうか。文題を課せられて、作らされるのは、随分苦痛なものであるが、初期の間は此の苦痛を忍ばなければならぬ場合がある。其の文題を課せられた時でも、作者の心持は其の題に囚はれて了しまはないで、何處迄も自己の爲めの文章を書く——此の心持が肝心である。初期の間から此の心持を養つ

(三五) 歳暮と日記文と	二二八
(三六) 『雪中松』に就いて	二三二
(三七) 初春の景色の寫し方	二三七
(三八) 私が歌に志した初め	二四四
(三九) 昔の歌と今の歌と	二五〇
◎文章月令	二七四

て行つて、習慣性を爲すやうにしたい。

諸君は文章を外々しく観て、自分と引き離して考へるやうなことはなからうか。文章は自己の心の反映である。何處迄も自己と合體させなければならぬと云ふ心持を有つて居るべきである。然らう云ふ見地に立つて、文章を作るとしたら、文章と作者と全く別人のやうな矛盾を惹き起すことはない。二つの氣分が共鳴して、そこに出来上つた作品は、渾然たるものを得る道理である。併し、初めから、さうした完作が出来上らせようとしてはならぬ、亦いくら焦つた所が、進歩には階段があるから、然らう手ツ取り早く進んで行くものでない、唯、進み行く途、其の途を誤つて外方へそれて了ふのと、正道を踏んで行くのとは、其處に大なる差がある。自己の爲めの文章を作らうとして進んで行くのは、文章の大道を取るるのである。正道をさすのである。斯うして進んで行けば、進歩が非常に

早く一足飛びに達すると云ふのではなく、一步一步堅實な道程を踏んで行く、焦らずに悠々と根柢を作つて進んで行く、其處を取るのである。好い傾向を取るものは、著々と効果を收めて行く、それが竟に收穫の豊かなるを致す所以である。要は作をする各自の態度による、此の態度即ち心持は、初期の間から養つて行かなければならぬ。

以上は自己の爲めの文章を作るべきであると思ふ。と云ふ概念を與へたに過ぎない。實例を引いて、之れを證明しようと思ふ。で、こゝにAとBと云ふ二人の年少い作文の研究者があつて、或る時『團扇』と云ふ題で作つたものを、私の許へ見せに來た。其の文は短かく、未だ手許に返さないてあるから、こゝに引いて見る。それは本章の主旨を説明するのに當つてゐると思ふからである。

(Aの書いたもの)

私の宅にふるくから一本の團扇がある。誰が描いたのやら分らぬ。墨繪の山水が、小さい中に勢ひよく畫かれてある。團扇と云ふと圓いものに定つてゐるが、之れは四角な形をしてゐて、無細工なものであるが、之れで煽ぐと、妙にいゝ風が出てくる。曾祖父の代からあるのださうだ。

(Bの書いたもの)

團扇は綺麗な繪の描いてあるのがよい。煽がないでも、其れを立てかけて、見てゐると、涼しい風が起りさうだ。骨を象牙にして、立派な絹張りのものを拵らへて、それへ團扇の繪など描かぬと威張つてゐる第一流の畫家に百金ばかり投じて描かせて、床の間のわきの違ひ棚へ載せて、毎日見てゐたい。

此の二人の書いたものを一讀して、何れが自己の爲めの文章を書いて

居るかと云ふことを檢べて見る。先づ兩方を讀んで見た所で、第一に起る感じは、Aの書き方がいかにも素直で、眞率であると云ふことである。作者の生地を表はしてゐると云ふことである。之れに反して、Bの方は題に依つて作つた痕がありありと見える。尋常一様の事では此の題を生かすことが出来ないかと云ふ風に考へて、奇を求めて、作者と離れたものを書いたのではあるまいか。之れを作者のほんとうの性格として見るには、餘りにませ過ぎてゐる。氣取り過ぎてゐる。父兄などの言つてゐることを聞きでもして、お取次をしたものでは無からうか。Aの方は其の團扇の形のやうに甚だお粗末ではあるが、それは直ちに、作者その人の感想である。心持であるから、一道の涼しい、まざり氣のない風を受ける氣がする。此の二つの文例は、洵に些々たるものであるが、斯う云ふ斷片に於いて見ても、自己の爲めの文章を書いてゐるのと、文章の爲めの文

章を書いてゐるのとの二つの差は明らかに看取することが出来やう。自己の爲めの文章の根柢を成すものは眞實である。作者の僞らぬ心持の表彰である。書いてゐるものと、作者とが離れぬになつてゐる作は、作者が筆を把つて紙に蒞む時、自分の魂を他に脱離せしめて、他の都合のいゝ心持を持つて來て、其の空虚に充たしたものである。斯くの如くにして、何うして、根柢のある、堅實な作を得られやう。作者として、自分の魂を脱離せしめると云ふ心理作用を行ふのは、随分手數のかゝるものである。然うして、それは竟に無駄骨折である。何故さうした無駄骨折りをするのかと云ふに、それは畢竟自分の實力以上に見せようとするから、そんな曲藝を演ずるやうになるのである。醜女が美しく見せようとして、徒らに粉黛を施して却つて益々醜ならしめると同じである。自己の爲めの文章を書くことと云ふことは、決して難かしいものぢやない。自

己の生地きぢのまゝを文の上に表はすと云ふことに外ならない。作の興が自然に其の筆に乗つて、文章に生氣を生じ、光澤がついて來るのである。同じ骨折るにしても、自己の爲めと云ふのと、他の爲めと云ふのとでは、自然に其の氣組きぐみが違つて來る譯だ。或る事柄に對して面白いと感じ、又慘いたましく感じて、それを文の上に表はす時の作者の心持は、自己の胸に溢あふれる或る興味に充たされてゐるのである。斯くてこそ、其の書き上つたものから、他を動かすことが出来るのである。誠實まことが人間のあらゆる美德を集めたものである如くに、此の心持で書いた自己の爲めの文章は、最も美しく貴ぶべきものでなければならぬ。之れはひとり文章の上にはかり言ふのでなく、詩歌でも、繪畫でも、彫刻でも、總ての藝術の基礎きそを成すものは、作者の態度の誠實と云ふことである。自己の眞心まことを打ち込むと云ふことである。

私は本書の初めに於いて、特に此の一事を宣言したい。

### (三) 新しい歌

新しい歌と云ふ名が、舊派の歌を仆した所謂新派の歌のそれであつた時代は既に過ぎ去つた。舊派の歌は別に聲を大きくして仆さなくとて、自然に滅びてゆく運命を有つてゐるのである。所謂新派の歌が、常に凱旋將軍の意氣に酔つて、勝ち誇つてばかりゐて、その後の新しい成蹟が擧らなかつたら、どんどん進んで行く時代の思潮の爲めに蹴落されて、あの滅された舊派の歌の運命がめぐつて來る譯である。しかも、初期の新派の歌は、幾つかの時代を経過して、今日では兎も角相當の進歩を見せて居るのは事實である。併し、うっかりしてゐると、沈滞する、かたまる、潑刺たる生氣が一首の隅々に迄流れるやうな作を得られなくなる。

作者の主觀の權威が、だんだん影が薄くなつて、餘義なくされて作ると云ふ、慘めな姿が、其の作に伴つて來る。事物に對する注意力、觀察力が鈍つて、何を觀ても鋭い、生き生きした感じを注ぎ入れられなくなる。つとめて平靜な態度を取つて進まうとすれば、活動してやまない外界の怖ろしい力にあへなくも制せられて、眼が眩んで來る。覺束ない自分を守つて、出るも引くもならなくなる。是に至つて、精神的の自殺をするより外はない。

何故斯う云ふ風に押し詰められて來たのであらうか。それには、必ず何等かの原因がなくてはならぬ。一口に言へば、型に箝つてしまふからである。型に箝まると云ふのは、自分から或る定まつたものを拵らへて、その中に動いて、外に出ることを得ない謂である。早くから或る特色と云ふものを作つて、その特色を深く深く究めようとはせず、外から

善い加減に撫で、體裁を繕はうとするから、同じ軌道ばかりを廻つて新しい發見をすることが出来ないでやむのである。

斯うして、新しく生存して行くべき謂れがない。新しい物の裏には、屹度舊いものゝ影が絡はつてゐる。新しい新しいと思つてゐるうちには、何時の間にか舊い黒い影が、其の全部を占めると云ふ悲惨な出來事にぶつかるのである。我々の願ふ所は、何うか日々の氣分を新にしたい。昨日の我を、今日も明日も、趁つて行つて、新しい光りを目の前に見、然うして感じるこの出來ない人の心を痛ましく思ふ。我々は、然う客觀する前に、先づ自己の心狀を省みなければならぬ。日に三省すると言つた古人の心は、歌を作る氣分の上に押し當て、切に考ふべきことである。

實に怖るべきは型である。我々は常に型を破ることを忘れてはならぬ。新しい歌は、いつでも一所に停滯してゐない。自ら新しがつて、其の實

舊態に甘んじてゐる人は、既に型に篋まつてゐるのである。不知不識の間に、沈滯力は非常な勢を以て自己を包圍してゐると云ふことを忘れてはならぬ。作者としての煩悶はこゝにある。自己の氣分の舊く、かたまるのを恐れて、それから脱却しようとするのはこゝである。其の煩悶が停まつてしまつて、外界の刺戟が感じなくなる時は、其の人の藝術的生命は既うこと切れてゐるのである。あれでもない、此れでもない、煩悶してゐる間に、進歩し推移して行くのである。

總ての藝術に沈滯は厭ふべきであるが、短歌のやうな小詩形の氣分を主として動くものには、それが著しく眼につく。我々は常に氣分を新にした歌を詠んで行きたい。

## (三) いゝ文章

いゝ文章を書きたい！ 之れは誰れても然ら願ふ所であるが、書いて見ると中々想ふやうな文は出来ない。書いてゐる時は、一生懸命になつて筆を執つてゐるから分らないが、書き終つてから、読み返して見ると、書かうと思つて、氣張つた心持が、十に一つも表はれてゐない。筆を投じて、茫然自失することがあらう。いゝ文章どころか、何等の野心もなく豫期した其の十分の一にも達し得なかつた文章を読み返した時の失望は、苦い経験となつて積まれて行くのである。併し、此の失望、此の苦い経験は、他日の効果を生む基礎となるのだから、決して之れに依つて頓挫するやうなことがあつてはならぬ。失望の度が強くなるだけ、苦い経験が積まれて行くだけ、爾の文は磨かれて行くのである。何等の失望も

なく、煩悶もなく過ぎ來つた文は、平々凡々で、何の味ひも匂ひもないものである。斯う云ふ文章は書いて張合ひがなく、讀んで讀みごたへがない。つまりは、あつても無くてよいものになるのだ。

骨折らなければならぬ、苦勞しなければならぬ。それでなくては、いゝ文章は出来ない。所で、其のいゝ文章と云ふのは、何う云ふのを指すのか、之れは當然起る疑問である。一口にいゝ文章と云つても、其の中に何う云ふ内容が含まれて居るのか、分つて分らぬやうなのは、此のいゝ文章なるものゝ解決である。文章に初心の者は、いゝ文章と云ふのを外見のよい、綺麗な文句でも使つてあつて、流暢に書いてあるものに云ふと思つて居るものもあるらしい。所謂才氣があつて、軽く人を魅する書き方を取つてあるものを見ると、先づそれに隨喜して了ふと云ふ傾向がある。併し斯う云ふ文は、甚だしく價値のないものである。外見のよいものは、

内容がないから、それを取繕ふ爲めに、あゝした修飾をして、人目をごまかさうとするものだと言ふことに氣が著かねばならぬ。言ふ迄もないが、内容の充實と云ふことの、作に重大な關係を有つてゐることは、特に考へねばならぬ所である。筆を執る前に、内容を定めてかゝつて、書くべき事柄、其の事柄の按排、それ等を一文に盛る計畫を立てゝからでなければ、妄りに紙に溢んではならぬ。然るに、小才の利くものは、斯うした順序を踏むのが面倒くさいので、書くべき一部分を胸に得るか得ないかに、匆卒筆を飛ばして、豆粒ほどの材料を、飽細工のやうに矢鱈にのばす。作者自身では器用に立ち廻つて書いたつもりでも、よく見れば、竟に無用の長物たる誹りを免れないのである。

前にも言つたやうに、文章でも歌でも作者の誠實と云ふことが基礎になつて居らなければならぬ。誠實を缺いた、一時をごまかすやうな作

は、根本を謬つたものである。根本を謬つたものに、價値のあらう筈がない。誠實なれ、何處迄も誠實なれ、いゝ文章は畢竟こゝから出立するのである。内容が充實して、之れを表はすべき外形がよく適合してゐる文章に、始めていゝ文章と云ふ名を附することが出来るのである。たゞいゝ文章が作りたたい！ とばかり祈つて、それが何の苦勞もなく、僥倖のやうに得られると思ふのは、大いなる誤りである。内容の充實を計ると云ふことが中々の仕事である上に、それを仕了せてから、其の内容を整へるだけの外形を描き表はすと云ふことが、軽い浮いたことぢやない。斯うして、自分ではカナリ出来たと思ふ作も、之れを他人の批判に待つと、缺點だらけであると言ふ場合、之れ迄にする前に、随分失望し煩悶した舉句だから、もう厭になつて、再び作をする氣力がなくなる。つくゞ文章は難しいものだと思つて仕舞ふ。併し、文章でも歌でも然うであるが、



作をする苦勞は、一面に於いて一通りではないが、他の一面には、それに伴ふ愉快がある。すら／＼と出来た作よりは苦勞して出来た作の方が、出来てからの愉快が多い。自分を磨く上に、此の方が大いなる効果がある。

いゝ文章を書きたい！ 此の心持は絶えず有つてゐて欲しい。いゝ文章と云ふものゝ裏には必ず苦作といふ影がある。骨折らなければならぬ努力しなければならぬと云ふ心持は、文章を書かうと云ふ者の頭の中に寸時も忘れてはならない事だ。

いゝ文章を書きたい！ 斯う云ふ心持が常に頭の中を離れてゐなかつたら、設しいゝ文章は書き得られぬにしても、それに近いものは出来るわけだ。諸君は何うか此の心持を忘れずに、出来るだけの力を文章の上に注いで、内容のたしかな描寫の見苦しくない文を得るよう努

められたい。之れいゝ文章を得べき順序であり、階梯である。

#### (四) 自覺といふこと

文章の作者にも歌の作者にも必要なのは、自覺と云ふことである。自覺とは自ら覺める謂である。自ら覺る謂である。本當の自分と云ふものを見出すことである。それは他から動かされるのではなく、自分から氣づく場合に云ふのだ。自分の本體を客觀して、自分の生地を見出すことを得た時、それを自覺したと云ふ。何故其の自覺が文章なり歌なりに重大なる影響を與へるか、と云ふに、無我夢中で作をして、それに作者の生命を打込むことが出来るものでない、自分と云ふものゝ本體が分つて、然らして其の書く事柄に全力を注いで、こそ、始めて其の作に眼が開き、其處に生き生きした生命が通ふのである。

自覺することなしに書いてゐる人々は、一面に於いて天下太平である。何等の煩悶もなく衝動もなく、さうかと云つて生彩もない作は、作として洵につまらぬものである。作者とは全て別の面影がおりまじつて作の表面に浮遊し、何だか取りとめもないものを見る時、我等はそれを淺間しく思はずには居られぬ。作のうまい拙いは別として、自覺した作者の書いたものは、徹底して居る。讀んで、直ちに作者の心持を爽やかに快く受けることが出来る。徹底しない作は、作者の心持が徹つてゐない、其の徹つてゐないものを、強ひて徹らせようとするから、猶更分らなくなつて来る。作者の心から自覺しないでゐて、自覺したやうに見せた所が、それは竟に何等の感應を他に與へることが出来ない。却つて見苦しい結果を貽すことになる。

自覺と作品との關係は、ざつと上に述べた通りである。然らば、自覺は

何う云ふ時に起つて来るものかと云ふ問題が生じて来る。自覺その物は他から動かされるものでないが、そこに何等かの外界の衝動が作者の内面になければならぬ。然うして、靜かに自分と云ふものを客觀して、自己の本體を見出す。昨日迄の自分のした事、即ち作に對する態度の間違つてゐた事などに氣がついて、之れてはならぬと心が自覺めたやうになつた時、作者は正に覺醒したのである。さあ然う氣がついて來ると、昨日迄の自分がしみて、厭になつて、今日新しい自分を築き上げる。全て生れ變つたやうになる。斯くして、作の眼が新しく開いて來るのである。

自覺は外界の刺戟から起つて來ると云ふことを言つたが、然う云ふ特別の場合でなく、冥々の裡に或る閃めく靈の力を得て、それから受けると云ふことがある。それは、氣分の尤も沈潛した時である。深沈と夜が

更けて行く時、自分は未だ燈下に眠らずにゐる。萬象静まり返つて、音と云ふものゝ全く絶えた頃、ほひ風がさつと通り過ぎた。はつと思つて、身顫ひの出る程驚いた時分に、忽然として自分で自分の本體を観ると云ふ例は、禪などやつて居る人でなくても、観得らるゝものだ。之れは本當の自覺であるが、それ程でない場合、即ち頭の心まで透き徹つて爽々しい朝など、昨夜遅くまでかゝつて書き上げた作を取り出して讀んで見ると、何故こんな馬鹿げたものを、あんなに骨折つて書いたのだらうと怪しむ。さうして、此の一篇が自分の之れ迄の弊と云ふ弊を具備したやうに氣づいた時、之れではならぬと自分で自分を叱咤して、新しく出直さうとする。之れも一つの小さい自覺である。斯うした自覺は時々あつて、それが作の進歩になつて行くのである。

人に依つては、斯う云ふ自覺もなくて、だらだらと作の生涯を終るも

のさへある。前途を有する新人の前に、之れは尤も呪ふべき例である。

### (五) 短歌と繪畫と

新しい氣分を盛つた繪畫の小品と、今の短歌とに共通してゐる點がある。それは、二つ共氣分に生きて、刹那の感興を盛るに適してゐるからである。作者の尖つた鋭い神經が、兩者の主腦をなしてゐる點が似て居る。必ずしも尖つて鋭い神經とばかり限らぬが、刹那の感興を惹くには、圓熟したものよりは、此の方が痛切である。

畫家が小さな繪絹をのべて、それに筆を落さうとする時、嘗て觀て興じた色々の物が眼に浮んで來る。其の中で、自分の今の心に適合したものが、新たなる感興となつて、其の繪絹の面に揮灑せられる。畫面を蔽ふものは、作者の氣分である。

歌人が歌を詠まうと云ふ興を得て、眼を瞑ぢて考へる。外面には蕭やかに雨がそゝいでゐて、自然と考へが静かな方へ引き寄せられる。いつしか雨の音が歌んで、林をわたる輕微な風の音が聞える。それが初めは聞えるか聞えないかであつたが、耳を敬て、聽いてゐると、それが次第に深く頭へ響いて來る。靜かな夜の情調が、此の風の音に潜まり返つて響く。之れが未だ感じなかつた新たな感興の如くに、歌の面に表はれて來る。歌の面を蔽ふものは、矢張り作者の氣分である。

### (六) 圓みのある作品

工畫伯が洋行土産に買つて來た小兒の石膏の胸像が、畫室の小机に置かれた筆立ての陰に、自づから可憐な陰影をなして居る。小兒の眼は俯向き加減に、何物かを見るときもなしに見てゐる。下ぶくれの頬のふく

よかさ、下唇から顎へかけての何とも言へぬあどけない圓み、私は此の横顔から觀た圓みに心をとられて、恍乎としてゐると、其のほとりの薄緑の窓かけが揺れて、其の柔らかい絹の端が、直ちに金髪を想はせる。小さく渦を卷いた和毛にふれる筆立ての陰に出來た、かはい、陰影が、窓かけの動く毎に、ぱつと明るくなつたり、暗くなつたりする。其の度びに、例の圓みが益かはいはゆく見える。

私はなほも眼を放さずに凝と見詰めてゐる。見れば見る程、あのかはい、圓みが氣に入つてならぬ。私が私の作品に覗つてゐた圓みはあれだ。と心で叫んだ時、自分ながら恥づかしい位、胸のときめきを覺えた。相對してゐる工畫伯は、と見ると、硝子窓の窓越しに聳えてゐる白壁の二條の城の方に眼を向けて居られる。いかにも心の虚しい狀が見える。私は黙つて頷いた。圓みのある、渾然とした作は、あれでなければ出來ぬ。私

はあの小兒の石膏の胸像と、此の畫室の主人の態度とに依つて、圓みのある作と云ふものを、ほんとうに私の胸に悟入することを得たと思つた。

此の人形について、私の心を唆つたものが、なほ一つある。それは、人形の賣主のことである。巴里の裏町の、セイヌの枝川の流れてゐる小橋の袂で、矢張りかはい、子供が此の人形を賣つてゐたと云ふことである。之れが優しい畫伯の心をいたく惹いた。私は母の乳を心ゆく迄飲んで、すや／＼と眠つてゐる三十年前の子供の心で、此の話を聞いた。

私が年久しく飢ゑてゐた圓みのある作品と云ふものを、今日端なくも悟入し得た歡びの情は、永く忘れることが出来まいと想ふ。他から斯うかうであると言明かされて、成程と會得した心持は、忘れる時がある。自分から自分の胸に悟入した心持は、永久に忘れることが出来ない程

な、強い深い印象を受けるものである。それには常に何物かを欲求して居らねばならぬ。事物に對する注意力、觀察力を常に新しく鋭くして居らねばならぬ。

### (七) 作の上の自由

短歌のやうな、字數に制限があつて、形式の短小なものは、何うしても因はれ易い性質を有つて居る。作者の感情が、其の制限の爲めにこだはつて、情緒の自由を妨げると云ふ弊が起つて來るのは、亦止むを得ない譯である。それに昔は祕傳だとか何だとか云ふ下らぬものを、歌に絡はりつけて、一層形式的のものにして、了つた。それが習慣になつて、近代迄其の餘弊を及ぼして來た。所謂新派の和歌なるものが、時代の要求に應じて、革新の實を擧げたのは、好かつたが、だん／＼技巧が加はつて來て、

情の自然を蔽ふやうな傾向を呈するに至つた。之れは要するに、作者の生地が技巧の陰に隠されて、真情を發露せぬから起る弊である。情を抒ぶるにしても、事を叙するにしても、作者の實感が、其の何れもの基礎を成すのは言ふ迄もない。自己の本體よりもより以上の姿を他へ假設して、それから實感より離れた心持を盛んに修飾して表はさうとするので、匠氣が見え透いて來る。作者から離れた感じを持つて來て、切實な情緒を贏ち來らうとするのは、言ふ迄もなく、謬つた見解である。

眞實でなければならぬ。眞實は何物にも打ち克つことが出来る。自己を中心にして、眞實の情緒を注いで出來た作位、透明な、蟠りのないものはあるまい。眞實と云ひ、自由と云ひ、皆此の透明な自己中心から生れる自然兒である。我等の作は常に此の生き生きとした自然兒を生んで居らねばならぬ。我等の既往には美しくしい幾多の畸形兒を生んだと云ふこ

とに考へ及んだ時、誰か心痛まざるを得るものぞ。

自然の姿は一として自由でないものがあらう。一として、コセコセした人間の心持を刺戟しないものがあらう。我等の作も、あの自然の本體の如くに、暢々と快い氣分が表はれて居らねばならぬ。我と我が窮屈な埒を造つて、其の中に出るも引くもならぬやうな惨めな作を見ると、誰れか自由と云ふことを冀はないものがあらう。しかも、他の囚はれたのを観ることは出來て、己れと同じ運命に支配されてゐるのに心づかない人は、特に慘ましいものだ。自然主義が唱道せられて、情の自然を作の上に尙ぶことを、囚はれた文壇に求めて、著々効果を收めつゝあるのは、將來の文運の爲めに賀すべき傾向である。

## (八) 叙景の歌の眞意義

叙景の歌を幼稚なり淺薄なりと云ふやうに定めて、之れに携はる者を直ちに初期の研究者の如くに輕親し疎外する傾向が一部にあるやうだが、あれは確かに誤つて居る。叙景から入つても、抒情から入つても、各自の好む所に任せるが、自然を對象として、其の種々の現象を客觀し、之れを縱横に試作するのが、初期の研究者の先づ就くべき道だと考へる。と言つても、私が自然の描寫を好み、之に關する作が多いので、自己の嗜好の上から律して言ふのではない。取材の區域が廣くて、自在に之れを取つて試作する自由が、初期の研究者を迷はずに發達せしめ得るからである。抒情主觀の作は、獨りよがりになり、愚癡狂妄の味無さに落つる場合がある。自然の、常に新しい姿を我等の前に展開して、試作の自

由を許して呉れるのに趨るのが順序である。

初期の研究者は自然に對し、正直に、おとなしく客觀するがよい。いかに小さやかな一草一木の前にも觀たまゝを寫して行つて、妄りに矯飾するが如き舉に出てはならぬ。然らう云ふ點から、叙景は客觀が生命であつて、作者の主觀を表はし難いもの、各自の簡性を發揮し得ないものと誤認する説が出てくるのである。初めの間は觀たまゝと云ふ中に育くまれて自己を表はし難いこともあるが、漸次熟して來るに隨つて、作者の色が發揚されて來る。即ち材を取る上及び之れを仔細に觀察する上に作者の主觀が強烈に注がれて來る。然らなつてこそ叙景の眞實の味は出て來るのである。叙景が單に客觀に限られて居るのは、初期の間である。併し嚴密に言へば、その初期の間でも、全然客觀と云ふことは出來ない。作者がその事象を觀て、それに對する所見を寫すのだから、同一

の事物でも、その寫し手の心持によつて、多少の差違のあるのは當然である。それが段々進んで、思を自然に潛めて、凝つと心の眼をそれに注いで出來た作に、作者の主觀が強くて出でゐない所以があるまい。叙景の作を寫眞のやうだと言ひ、客觀一方で作者の簡性が表はれて居ないと言ふ人は、初期の研究者の作を見慣れて、それ以上に作者の沈潛した情緒の注がれてゐるのを詳かに觀ない不忠實から來て居ると思ふ。

短歌は抒情に依つて光輝があると云ふ説は、一應尤もであるが、自己の好む所に依つて、然う偏重する必要はない。抒情でも叙景でも佳いものは光輝がある。自己の性情の趨く所に向つて、之れを歌つて行くに、何等差支がある譯がない。

それから今一つ言つて置きたいことは、其の時々の心持に依つて抒情、叙景その何れに就いても自由であるのに、余は抒情歌人である、自然

に對しては何等の興味もない」と云ふ風に、強ひて、その眼を閉づるが如きは、何の意に出づるかを知らず苦しむものである。然して試みにその故を問へば、彼等は屹度斯う云ふことを答へるに違ひない、叙景は幼稚である、淺薄である、短歌の粹は抒情に在つて、叙景でない、叙景に作者の主觀があるか、主觀の權威のない作は詩として何の價値もないと。此の論旨の「出處は、自己の都合のよい立場を拵へて、他を卑めようとする先達に雷同附和したものに過ぎない。」

抒情にしる叙景にしる、手段目的は異なるが、作者の主觀を要しないで、出來得るものはない。然うして作者の簡性の瞭りと表はれてゐるものを尊ぶのである。繪畫に例を引いても、容易に此の言を確めることが出來る。山水畫家の玉堂氏と春草氏が自然を觀察する眼は同一でない、格段の相違がある。共に自然の愛重者であつて、毫末も自然の美を傷けず



に、主観はカナリ強くその作物に表はれてゐる。玉堂氏が圓く柔らかかに自然の光をその作物に注ぎ入れて、美しくしき感じを出さうと努めてゐるのに對し、春草氏は細く勁く深く自然の内面に突入して其の眞味を看取しようとする態度は、兩者に大なる相違を示して居るのではないか。斯く自然に對する、主観の際やかに表はれてゐる、二氏の作物は、叙景を幼稚なり、淺薄なりと誤認して居る論者に目覺ましい反證を與へて居るではないか。

或る論者は又斯う云ふ説を立て、叙景を輕視しようとして居る。叙景がよ、しくらくよく出來ても竟に自然の模倣である、模倣は恥づべきことである。叙景に志して居る作者が自然を模して、それに親炙しようとするのは、決して愧づべきことでない。人間が同じ人間の作を眞似るその事すら、初期の間に於ては當然の事として許されて居るではな

いか。それが大なる自然を模倣し、出來るだけ密接させようとするのは、之が研究者として、初期のみでなく、一般に押擴めて稱すべきことであらう。我等は自然の模倣者と言はれることが寧ろ名譽である。我等は力めて之れが模倣を企て、ひたすら自然に親炙しようとする。冀つて居るが、自然は人間よりずつと廣大である。小さい我等の面は、大きな自然の面に接するたびに、餘りに其の懸隔の甚しいのに、及び難い感が切である。而も二者は決して懸け離れるものでない。模倣し、親炙し行く間に、自然の心が人間の心持と融け合つて、自然を描寫する場合の作者の主観が、殊更に際々しくなく、瞭りと表はれて來るのである。叙景に主観の加はつてゐないと云ふのは、ごく初期の作か、然うでなければ、漫然として作者の態度の明確でない作である。眞實の叙景の作は、作者の主観が瞭りと盛られてゐなければならぬと云ふことを明言する。

尙こゝに作者が主觀を動かして、描寫しようとして企てしめた或る景色のいゝ場處があるとす。然うしてそれを描寫してみた。しばらくしてから、又その場處に行つて見たが、前に起したやうな感興が起らない。なぜ彼の時、あんなに嬉しくて、あゝ云ふ作が出来たのかと考へて見る。斯う云ふ事は、諸君も經驗して居ることゝ想はれる。前の場合は、自然の心と人間の心とがびつたり合つた時で、後の場合は合はなかつた時である。その時々々の心持に依つて、興味を惹き、又然らざる時があることから考へても、叙景に主觀の加はつてゐない譯がない。

### (九) 新緑の森の觀方描き方

私は心の貧しい時、寂しい時、悲しい時、腹立たしい時に何時も程近い平原を訪うて、其の森陰に行けば、屹度慰められて、歸つて來るのを常と

する。平原の自然は私の心に廣い然うして濃やかなる恵みを與へる。私は此の恵みに生きて、自然に愛著が深くなつて行く。私が平原と斯う關係が深くなつたのは、武藏野に近く住居を移して、朝暮の風色に親しむやうになつてからだ。然うして、時は春の暮れ方から、夏の初めへかけて、自然の青みわたる時分がよい。此頃になると、私は暇さへあれば、野に出掛ける。野の入口から先づ眼を放つ先きは、此の野の中心をなして居る一團の森である。高くこんもりと茂つて、青く若葉して居る。朝早く、靄のかゝつて居る時に見ると、白くぼうつとして、周圍の廣々と青く長く伸びた草は、雨水でもかゝつて居る様に、しつとりと水分に浴して居る。之れは水蒸氣の多い此の頃の朝によく見る所である。斯う云ふ時には、ぼうつと廣く見えさうなものだが、却つて場面の狭められる心地がする。それは、空氣がしつとりとして、空が重く垂れて居るからである。日が射し

て、見渡す限り新緑の青い輝きが、天鵝絨の様に、てらてら眼に映つて來る時、廣い美しい力ある自然を感得せられる。

野を寫さうとする時、たゞ描きさへすれば可いと云ふ主義で、描くべき範圍を定めずに、たゞ漫然と筆を把つて書いたら、どんなものであらう。それは、組立と云ふものを無視した人々のすること、描寫の法を知らないからである。描寫の心得ある人は、必ず此の書くべき範圍を定め、他はそれに附屬したものとす。

て、私は森を寫す場合には、之れを中心として描き得る少し隔つた處から十分に觀察する。それとは反對に野を寫すと云ふ場合には、森に行つて、其の下陰からちつと平らな靜かな自然を觀るのだ。私は森を寫し、野を描く場合、此の兩面の描寫の方法を取る。寫すべき物を自然に觀るべく、眼の置き處を定めるには、作者の立場を明かにする必要がある。此

の立場が定まつて居なくては、取材の範圍が散漫になつて來る。著眼が一般の藝術に肝要であると云ふのは、作者の立場を明かにして、寫すべきものに向つて、眼を放つ處が定つてから上のことである。

森にかゝつた靄が、晴れそなつた朝位、氣持の悪い重苦しいものは無い。草中の石などに腰をかけて、晴れるのを待つてゐたが、いくら待つても、晴れないで、曇天からいつか雨になつた。森の靄は、一層繁く重く、出たばかりの高い若葉が灰色になつて、打ちそよいて居るのが見える。雨も細いうちはよいが、どしや降りになつては、堪まらぬので、平生から雨の嫌ひな私は、急いで引き返す。つひうっかりして、びしょ／＼になつて歸つて來ることもある。もう靄のかゝつて居る時は、野に出まいと心に堅く約束しても、其のあくる朝、雨が止んで晴れさうになつて來ると、私は又とつかは、出掛ける。野に出る路は、しつとりと快く濕つて、初夏の爽

かな心持が草履を通して素足に觸れる。それが先づ特殊の感じを覚えしめる。

靄の森は依然白くぼうつとして居る。てつきりそろそろ晴れた頃と想つて來て見ると、矢張り然うである。此の森を眞正面から觀るべき例の草中の石に腰掛けて、靄の森の靜かな中に何んな微動があるかを瞞めて見ようとする。忽ち森はその片方から靄が脱れ初めて、しばらくの間、すっかり脱れて仕舞ふ。四邊の空氣が明るくなつて、朝の日光がそれに降りそぐ様にあたる時、森の若葉は新しい鮮やかな色に輝く。ちつと見て居ると、眼が痛くなる程強い光りを受ける。

長く伸びた草一面に露うて居る雨の名残り、夏らしい強い日光に見る／＼乾いて行く。此處彼處から立ち騰る水蒸氣は、雨霽りの快い氣分を傳へて、新緑の森の生氣は眼に立つて見える。自然が滴るやうな潤

ひを持つ頃は此の初夏の季節で、特に其の雨霽りにある。さらぬも滴る様な新緑の色は、雨に濕されて、一層の美觀を呈するのである。

私は又夕暮の森を訪ふのを好んで居る。夕日が森の頂上に薄い餘光を残して、下の方は次第に黒く夜の色を帯びて來る。明るい霎時の餘光が段々消えてゆく頂きを見て居ると、心が妙に沈んで來る。季節が季節だけに心の滅入るやうな事はない。日が消えて了つても、後に新緑が残ると云ふ明るい感じが胸を支配して、沈んで來ると云つても、そこに頼む所のある氣がする。風なくしづく／＼と暮れて行く静けさは、新しい力が一時休息して、又明日の生命を生み出す用意のやうに想はれる。斯う云ふ心持で、靜かに暗くなりゆく森を見ると、若き人の落ちつきと云ふものを感じず。私は此の落ちつきが好きで、夕暮の森を訪ねて、夜になるまで、凝つと移つて行く時を見て居るのである。

暮れはてゝからの新緑の森には、若やいだ沈静の氣が籠つて、その陰に立つと、新しい木の葉のそよぎが、いかにも若々しく聞える。ちらばつて居る星の光りに、薄明るく照されて、若葉のそよぎが軽く眼に入る様な夜が好きだ。空に夕月のあるのも差支ないが、月のある夜よりも星の夜の方がよい。しつとりと若葉の森の情調とも言ふべきものを胸に沁み入らせることが出来ると思ふ。

斯うした事から、私は夜の若葉の森が好きだ。初夏ごろの月のない夜は、好んで森の中にさまよひ入つて動揺しやうい心を落ちつけることが多い。私の此の頃の歌に、幾分でも此の心持が出て居るとすれば、私の好む所があらはれたので、自然から受けた恵を感謝せねばならぬ。

初夏の森に風が起つて、空に翻る若葉の緑が、凄まじい動揺を示す時に、私は若き心の鳴動ともいふべきものを感ぜざるを得ない。併し、それ

もひと時、荒れた風波が凧いだやうに鎮まり返つて、一葉も動かぬ静かな姿に日がカン／＼射して、青天鶯絨の様な光澤が、此の森から伸びた草一面に輝きわたる時、私は沁々と初夏の自然の美しくしいのに感ずるのである。

## （一〇）西行の歌

今の時代の歌を研究する傍、参考にすべき古人の歌は誰々ののであつかと問はれる毎に、私は『萬葉集』の諸作者のと答へたいが、彼の浩瀚な書物を読んで見よと言ふのは、初學者に不可能の事を強ひるのである。一の巻を読んで、後の數ある幾巻かを想像すれば、つひ厭にならう。稀に篤志の人があつて、全部通讀したとしても、それだけの時間を潰して讀んだ程の効果が、今の時代の歌を作る上にあらはれて來まい。尤も『萬葉

佳調』と云ふ、集中の佳作を選述したものが古く出版されて居ないでもないが、其の選抜の方法に就いては、今の時代の研究者から觀て異議がある、新しい今の人の眼から觀て、千古の佳作だと歎服せしむるに足るものは、矢張り今の人の眼識に須たなければならぬ。前方與謝野氏や窪田君の手に依つて、此の集の佳作を評釋したものを雜誌で見たが、何れも未だ一部に過ぎないのは残念である。萬葉集は非常に結構であるが右の様な譯で、初學者に多くの勞を費さずに、一通り其の妙味に觸れさせることが出来ないでは、今の新しい歌を作る上に、其に次ぐ必要な歌集は何であるかと云ふ問題に逢著する。『古今集』『新古今集』曰く何、曰く何と、幾多の歌集を列舉して、其の佳なるものを求められる場合、私は『伊勢物語』にある業平の歌と『山家集』の西行の歌とを推舉するを常として居る。此の二人の作者の歌は、當時既に水平線から高く超越して居つ

たのである。而して千載の下、愈、光輝を發して居る。業平は平安朝の盛期に美名を馳せ、西行は同じ平安朝の末期から鎌倉時代にかけて、殆んど獨歩の觀をなしたのである。當時堂上の名家に俊成あり、定家あり、父子相次いで、斯道のオーソリチーを以て任じて居つたが、彼等は畢竟師範役として立派な人達であつたに過ぎない。試に彼等の作品を取つて、西行に比較して見やうなら、詩品の高低、素より同日の談でない。西行は詩人として千古に朽ちない作品に豊かであるが、彼等の作に至つては、多く文字より喚ぶ感想であつて、其の心靈に觸れて出來たものは、幾んど無いと言つて可い。日本の詩人は多く此の文字の彫琢者である。萬葉集の諸作者や、業平、西行の如き、自己の感情を尊重して、縦横の詩思を揮霍した作家は、寔に數ふる許りである。斯くして西行等の作は、常に新なる光輝を放つ所以である。

俊成定家の宗とする所は古き三代集にある。三代集在つて始めて彼等は存在し得たのだ。即ち三代集の有する真率の氣を除き去つて、残る文字の彫琢に憂身を窶したのだ。真情の流露するものなく、生氣の潑漑たる所を缺いて居るのは、亦自然の勢ひである。彼等を中心とする斯壇の風潮は、滔々として此の時弊を歡喜し、之れに趨走した。彼等の足跡は平安京の外に出づることなく、花鳥風月を詠ずるの詩境は極めて狹隘であつた。彼等は其の狹隘なる天地に跼蹐し、竟には足一歩も出でずして居ながら名處を詠ずる事を、歌人として最も稱すべき能事と心得た。西行の如き詩人肌人は曷んぞ此の流俗に伍せられやう。彼が半生を一笠一杖に托して、行雲流水の間に吟嘯し、詩思を養ふに務めたのは、寔に味はふべきことである。

斯くして彼が歌集『山家集』は、當時の形式的の空氣から離れて、極めて自由である。暢達である。人生を詠じ自然を歌ふに毫も滯る所がない。直ちに其の言はむと欲する所を道破して居る。彼の性格や見地は集中の何の作を取つて見ても明白に表現されて居る。當時の歌人の眼に映つた彼の作は、多くな言歌の範圍を出ないものであつたに違ひない。彼等の多くは斯くまで自由に所思を表はし得たとに就いて、羨望の念を彼に寄せなかつたであらう。歌の製造人には、此の無雜作に一氣に出來たやうな作が甚だあつけなく物足らぬものに觀えたであらう。

然り、西行の作には技巧の貧しいものが少なくなかつた。辭句を整へることは、何時でも出来るものと想つて居たに違ひない。自由に所思を表はすこと之れが彼の常に願つて居つた所なのだ。『山家集』一卷を通じて著しく感ぜられるのは、此の純なる詩境に至つた一事である。俗世間の煩累を去つて、名利の念なく、飄々として秋葉の穢り行くが如き生

涯を送つた彼の心安さを想ふ毎に、私は一日でも可いから、彼の心持に  
なりたいと願はぬことは無い。併し、彼の天分なくして其の境地に到り  
著いた所が、何の効もあるまい。さはれ、彼の境地は何だか羨ましい心地  
がする。醒醒した人生に没頭して、一時の閑もない身には、彼の作に依つ  
て、其の境地を偲ぶだけでも心の伸ぶるを覺える。彼があゝの形式づくめ  
な重苦しい空気を遁れて、自由な天地に飛び出した心持は、今の時代の  
歌を作る者の注意すべき點である。舊派を笑つて起つた新派の歌も幾  
分形式に流れて來たので、更に新しい力て之を極はなければならなく  
なつて來た。西行が願つて出た自由の天地は、やがて今日の新しい歌の  
向ふべき境だ。『山家集』の研究は、そこに意義がある。

『山家集』の作は玉石相混じて居る。彼が詠んだ全部を一首も残らず  
こゝに收めて、彼が生活の状態を明かにし得て居ることを嬉しく思ふ。

此の點に於いて、玉石の混淆も意味がある。併し、慾には今少し淘汰して  
欲しかつた。類似の著想、同型の形式の作が、此處彼處に散在して居る。自  
由を重んじた彼の作に、詠みっぱなしのもの、或は又たゞ言歌の尠なく  
ないのは、一たび巻を開けば、容易に眼に觸るゝ所である。

彼の人生觀には、佛教の厭世的思想が付き纏つて、無常迅速の儚なさは、  
其の根本をなして居る。彼にして若し此の佛教的觀念を超越して、直  
ちに其の胸臆に觸るゝ所のものを以てすれば、もつと生き／＼と積極  
的の作を得られたのであらう。惜むらくは、彼の人生觀照の態度が一と  
ころに固定して、其の圏外を脱し得なかつたことを。併し、之れは彼の詩  
才を愛重する上より言ふ所で、當時に在つて、これ以上の思想の開發は  
望み得られなかつたのである。

彼の歌には時代の空氣が彼の個性を借りて表はれたものが多い。俊



成、定家に依つて得られぬ或る特殊の氣分を彼の歌から豊かに注入せられたことを記憶すべきである。

左に之れを證明する爲めに、集中から二三を抜くことにする。

願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ  
 これは人口に膾炙して居る作で、幾んど誰知らぬ者もない位である。西行が半生を歌の三昧に入つて、慰樂を之れに求めた所以は、こゝに在る。花のちる下と言はずに、未だ開き盡さざる生命の光りゆたかな二月半ばの、月圓かなる夜を、其の入寂の時に願つた彼の詩境は、消極的ばかりでは無かつた。風流にして、襟懷の洒脱であつた彼が面影を偲ぶに餘りある。櫻は彼の最も愛して居つた花で、春は彼の性情に適つて居つた季節であることが分る。雲水の身何處如何なる目を果と極めることは出来ないが、自分は二月半ばの夜、天櫻樹花未だ開き盡さざる下蔭を終

焉の地に望んで居ると云ふのである。宗教家から觀れば、俗縁の絶ち難い處を笑ふかも知れぬが、其の思ひ澄ました調べの中に沈んだ華やかさの含まれて居るのは、彼の作に潤ひがあつて、枯淡に失しない點である。これやがて彼の作に詩的生命の宿る所である。翻つて、彼の

佛にはさくらの花を奉れわがなき後を人とぶらはむ  
 の作に及べば、直ちに其の豐潤なる詩想に到著することを得やう。然うして、彼が死後なほ櫻花を喜んでやまぬ清く美しい心持を味はふことが出来る。佛には、一語突兀として、人の意表に出づ。此の初句といひ、三句の「奉れ」といひ、飄逸の中に犯しがたい、詩人の高い意氣を見る。前の「願はくは」の作に聯關して、彼の終極的生命を窺ふことが出来る。

彼の歌の妙味は多く、此の種の抒情的のものに在る。純抒情でなくて、そこに自然の景物を混へたものに在る。轉じて、彼が自然に對して何う

いふ観方を有つて居るかを調べて見よう。

さびしさは秋見し空にかはりけり枯野をてらす有明の月

淋しさに堪へたる人のまたもあれな庵をならべむ冬の山里

秋すぎて庭のよもぎの末見れば月も昔になる心地する

わがものと秋の梢をおもふかな小ぐらの里に家居せしより

路のべの清水ながるゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ

など、僅かに其の一二の例に過ぎないが、彼が自然に對して、常に自己の感懐を寄せ、其の生活と聯關せしめるのは、彼の慣用する所で、集中幾んど純客觀の作がないのを見ても明かである。生活と渾融して、情景の勝れたものに至つては、右の如き佳作を見ることを得るが、中には随分わざとらしい主觀を混へて、自然の妙趣を害うたものが尠くない。何故自然をもつと尊重しなかつたかと、物足らぬ感じのするものが多い。自己

の感懐を先きにして、自然に執著することの薄いの分る。これ彼が抒情詩人として貴き所以であらう。即ち、

世の中を夢と見る見るはかなくもなほおどろかぬわが心かな

あはれとも心におもふ程ばかりいはれぬべくはいひこそはせめ

人知れぬ涙にむせぶ夕ぐれは引きかづきてぞうちふされける

などの純抒情の作は、最も彼の立場を明かにするもので、半生の行脚生活より得來つた所のものは、此の沈思である。此の頓悟である。斯くして彼の佛には、櫻の花を奉れ、の逸興も、深い意味があるものとなるのである。

## (一) 『倫敦塔』の一節

倫敦塔の歴史は、英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云ふ怪

しき物を蔽へる戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。凡てを葬る時の流れが逆しまに戻つて古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。

此倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔て、眼の前に望んだ時、余は今の人が將た古への人かと思ふ迄我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初めとはいひながら物静かである。空は灰汁桶を搖き交ぜた様な色をして低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れは波も立てず音もさせず無理矢理に動いて居るかと思はる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼が、いつ迄も同じ所に停つて居る様である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。只一人の船頭が艫に立つて櫓を漕ぐ。是も殆んど動かない。塔橋の欄干の邊りには白き影がちら／＼す

る。大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が静かである。物憂げに見える眠つて居る、皆過去の感じてである。さうして其中に冷然と二十世紀を輕蔑する様に立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歴史の有らむ限りは、我のみは斯くてもあるべしと云はぬ計りに立つて居る。其偉大なるには、今更の様に驚かれた。此建築を俗に塔と稱へて居るが、塔と云ふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成り立つ大きな地域である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形状はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へむと誓へる如く見える。九段の遊就館を石で造つて二三十並べて、然うして其を蟲眼鏡で覗いたら、或は此塔に似たものは出來上りはしまいかと考へた。余はまだ眺めて居る。セビヤ色の水分を以て飽和したる空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が、わが心の裏から次第に

消え去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して来る。朝起きて啜る澁茶に立つ烟りの寢足らぬ夢の尾を曳く様に感ぜらるゝ、暫くすると向ふ岸から長い手を出して余を引張るか、と怪しまれて来た。今迄佇立して身動きもしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行きたくなつた。長い手は猶々強く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐい／＼牽く。塔橋を渡つてからは一目散に塔門迄馳せ著けた。見る間に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮游する此小鐵屑を吸収し了つた。

此の一文は漱石氏の短篇の中で異彩を放つて居るものである。氏が例の「我輩は猫である」に於いて諷刺的な輕妙洒脫の筆を恣まゝにした後で、此の莊重なロマンチックな作品を示された讀者は、氏が天分の豊かなのに魅せられて了つた。氏は當時多くの短篇を作つて、「カ」

ライルの博物館や一夜などの秀れた作もあつたが、此の「倫敦塔」は其中に在つて特に目立つた作品であつた。倫敦塔の過去の歴史に遡つて、史實と想像とを巧みに織り交せて、一の夢幻の影を現出したもので、氏が渾身の力を此の一篇に注がれたものであることは、明かである。當時の氏は油の乗つてゐた最中であつた。腹笥に滿つる蘊蓄の泉は、滾々として盡きる所を知らなかつた。此の「倫敦塔」は其の泉の溢れむとして溢れないで居たのが、俄かに溢れ出した最初の動力であつた。其の停まる所を知らない大なるエナジーの先づ發し試みられた作であるから、生氣の潑瀾たるは言ふ迄もなく、作品に重々しい權威がある。氏の其の後の作に往々輕快に流れ、委曲に失して、才人を弄すと云ふ弊を免れないものに比して、此の作の尊重すべき所以を想ひ合せたのである。

て、茲に載せた分は、本篇の發端で、倫敦塔の輪廓を描いて、然うして其の幻影を趁ふに至る處である。氏は先づ此の輪廓を描く前に斯う云ふことを書いて居る。塔を見物した丈けは慥かである。塔其者の光景は今でもあり／＼と眼に浮べることが出来る。前はと問はれると困る。後はと尋ねられても返答し得ぬ。只前を忘れ後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を劈く稲妻の眉に落ちると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の燒點の様だ。と言つて、明るい夢幻的に取扱ふ用意を示して居る。前を忘れ後を失したる中間が會釋もなく明るいとは寔によく一篇の光影を此の奇警な數語の中に集め得たのもである。

前置きは此の位にして本文を讀んで見よう。先づ冒頭倫敦塔の歴史は云々英國の歴史を煎じ詰めたるものと云ふ斷言は、よく此の一篇

に響いて居る。それから過去と云ふ怪しき物を蔽へる戸張の中の幽光は、氏の眼に映じた幻の影である。此の史實と想像とが一篇の經緯となつて居ることを最初に考へねばならぬ。此の一節は倫敦塔の概念を讀者に印象せしめたる内面的輪廓記である。

第二節に入る。之れは前の内面的に對して外面的の輪廓を表はしたものである。余は今の人か將た古への人かと思ふ迄云々前を承けて、先づ作者の抱く感想であらねばならぬ。今人乎古人乎、作者は現實と夢幻との間を彷徨して居る。然うして作者が我を忘れて餘念もなく眺め入つたと云ふ倫敦塔の外面の輪廓は次の叙述に依つて明かである。冬の初めとはいひながら云々讀者に其の日の重い靜かな空氣を想はせる。灰汁桶を搔き交ぜたやうな空の色、壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流れの色、何れか重く沈んで居らぬはない。塔の

下を行く帆懸舟を形容して、不規則な三角の白き翼がいつ迄も同じ所に停つて居る様である。とは實に沈靜な光景である。それから漕いで來る大きな二艘の傳馬の動くとも見えないのや、塔橋の欄干の邊りにちら／＼する白い鷗の影を點じて、見渡した處皆な眠つて居るやうに靜かて、過去を想はせると斯う書いて來て、其の中に倫敦塔が冷然として聳え立つて居る様を表はし、其の陰氣な灰色は丁度現世を呪つて、前世紀の記念を永劫に傳へむと誓へる如く見える。と一の大なるロマンチックな塊を現出した。それから作者は、九段の遊就館を云々と言つて、その形を熟視してゐると現實を觀る眼はだん／＼、ボンヤリして來る。過去の幻影を腦裏に描き出して來る心持を形容して、朝起きて啜る澁茶に云々とぼうとした煙の寢足らぬ夢の尾を曳く様に喩へ、それから長い手が向ふ岸から出て來る。さうして、強く

それが引張る。ぐい／＼牽く。斯くして、自然に其の幻影を趁ふやうに叙述してある。夢幻的の倫敦塔を過去の一大磁石に喩へ、作者自身を現世に浮游する小鐵屑に比べた。此の比喻は倫敦塔を一箇偉大なる不可思議の塊の如く、眼前に現出せしめる。之で、茲に掲げた本文は終つた。次節には塔上の鐘を點じて、星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て逃れ出づる囚人の逆しまに落す松明の影より闇に消ゆる時も塔上の鐘を鳴らす。と云ふ凄愴な文句があつて、それから後に、霜の朝雪の夕、雨の日、風の夜を何遍となく鳴らした鐘は今何處へ行つたものやら余が頭をあげて、蔦に古りたる櫓を見上げた時は、寂然として既に百年の響を收めて居る。と餘情限りなき無韻の詩がある。次に逆賊門を叙して、古來幾千の罪囚が舟から護送されて此の門に至つて、慘ましい面影を浮べ、或は薔薇の亂の罪人の屍を乾鮭の如く積んだと

云ふ血塔の昔の幻影を描き、或はリチャード二世に讓位を迫つた白塔の悲惨な歴史を回顧し、或は九十一種の辭世を題したポーション塔の壁を撫て、指先きに滑る眞赤な露を幻覺し、死の凄まじさを夢幻の中に強く描いて居る。地獄の影の様な倫敦塔が滿都の紅塵と煤煙を溶かして、濛々と天地を鎖す裏にぬつと見上げられた時、作者は現實に歸つたのである。

### (二二) 黄葉の觀方描き方

私は晩春から初夏にかけて、自然が明るい鮮やかな色を與へてくれるのを非常に喜んで、其の頃になると何事も手につかない。郊外の木の根などに踞して、青い空を徐ろに行く自雲の行方を仰いで、青い木草の中に埋もれるばかりに一日を暮す日が多かつた所が、今年頃からは、も

う新緑の鮮やかな色も、目を射る様な日の影も、以前の様に強い快い色彩の刺戟を惹き得なくなつた。年配の加減もあらうが、我が心は之から何か或る壓迫を感じる様になつて來た。今では初夏の自然よりも晩秋のそのの方が、しつくりと心に適ふやうになつて來た。晩秋で嬉しいのは、第一に空の高いこと、第二に景色が廣々として來ること、第三に空氣が透き徹つて明るいこと、第四に陽光に黄な色が深く加はつて來ること、第五に木の葉が黄に染まつて、草の色も狐色に黄化して來ること等が、著しく眼に觸れる所のものである。然うして、私は此の中で、木の葉の黄に染まつたのを、最もよく晩秋の色を現はしたものとて愛好する。私は之迄は初夏が好き、初秋が好きと云ふ風に、季節の移り變りの風物に趣味を有つて來たのだが、今では初夏よりも晩春がよく、初秋よりも晩秋がよくなつて來た様に、物の晩熟を欲して來た。晩秋の天地の空漠

として居る中に、林の木の葉が残らず黄に染まつたのも可い、又、平原の處々に散らばつて、一二本づゝ黄葉して居る木の立つてるのも好い。晩秋の空氣の中なら、何處に在つても黄葉の色は眼に快い感じを與へる。深い黄な色の日光が、同じ色の葉に照返して、明るい光を漲らす時、バツとした見事な色彩を眼に與へる。併しそれが、新緑に初夏の日の映射するやうな眩しい光りてなく、そこにいかにも自然な熟した處がある。人生を知り抜いて、華やかな滋味があると云つた風な人を見る様だ。華やかな滋味は黄葉の有つて居る生命である、光輝である。

信濃の山々は霜深く降つて、黄葉にはもう晩からうが、俗累の多い身は、今年も淺間の噴烟を眺めて、黄葉樹下に立つ晩秋一日の閑情を得られなかつたのを残念に思ふ。兩毛の平野から遠く奥州に續く處、打ち連る萬樹は皆黄に飽いて、渺々果てを知らぬと云ふ。此の程黄葉の旅から

歸つて來て、此の光景を談つた友の眼には、憧憬の情が溢れて居た。私は此の友の眼から黄葉の熟した秋の色を見せられる様な氣がした。黄葉！黄葉！秋の自然を好む心は、もう堪へ難くなる。

一口にもみぢと云へば、紅葉にのみ限られるやうだが、黄葉も亦しか云はれるが、同じもみぢでも紅葉と黄葉とは、眼に映ずる感じに格段な差がある。紅葉は其の色に俗臭があるが、黄葉は自然で秋の匂ひが深い。深いだけそれだけ之れを描くに容易でない。唯、黄いろく染めた丈で、中に含まれた氣分が表はれてゐなくては、駄目だ。繪畫に紅葉の描かれたものは多いが、黄葉を描いたものゝ少ないのを見ても、單に閑却されたばかりでなく、描寫の困難なのが確かに主要な原因をなして居ると想ふ。形丈けを表はして、晩秋の氣分が伴つて居らぬ様な繪は、繪として何の價值もない。卒然として一樹の黄葉を描き、或は黄葉林に筆を落



して、何等の用意もなく、又憧憬もない繪があるとしたら、之に對する觀者は、其の自然に匂ひ乏しき筆致を看て、黄葉に於ける眞味を感受することが出来まい。繪畫から養はれる一般民衆の趣味性は決して少くない。繪畫に携はる者は、自己の職責を重んじ、無責任な筆を弄るではない。前にも言つたが、紅葉は俗になり易い、併し趣味性の低い多くの民衆は、却つて此の俗臭を喜んで、之を描いて益々綺麗に友禪の模様の如きをも厭はない。紅葉本來の俗臭は描いて一層の匠氣を加へる。之を歌に詠み文に作るも、同様の俗氣を免れない。黄葉は遠く萬葉集時代の歌人の口にも上つたものだが、爾來扱々しい歌を代々の集に留めない、文章も亦同様である。

私は藝術の題材とならないで、不遇な秋々を経て來た黄葉に就いて、憧憬の念禁じ難いものがある。之に對すれば、終日沈黙を續けることも

出来る。明るい一葉一葉が聚まつて、日光の映射を受けて居る黄葉林の午後の日が黄昏れて、暗い寒い色が襲ひ來ても、黄葉の特色は減しない。夜、野路などを歩いて、ふと見る一樹の黄葉の、薄く夜色に漂つて、消え去らない幽妙な色彩は、紅葉の夜の色の、黒ずんで趣もないのとは比較にならない。

私の家の縁側から東に方つて、高い银杏の大木が見える。银杏の葉は皆黄いろく染まつて、この頃の私の眼を放つに、極めて適應して居る。椅子を縁側へ出して、昨日も今日も茫然としてそこに過した。今朝濃い霧が立ち籠めてゐたのが、剎がれて行くと、黄葉の見事なのが、茫漠として私の眼を刺戟する。霧の晴れた後の黄葉は、濕つた中に快い色を示して居る。

黄葉を描くには、此の明るい、快い色を失つてはならぬ。これ日光との

關係の直接に影響を及ぼす所以で、曇つた日や、雨降る日などには、其の特色が發揮せられない。黄葉の研究者は、又晩秋の日光の、黄に乾いた様を、十分に看取する必要がある。雜司ヶ谷の森に一本黄葉の特に美しい大木がある。自然の恩寵を一身に聚めたやうな快い色を之れから受けた。

黄葉をのみ題材にして、その寫生を専らにするのも可いが、周圍の自然と融合せしめて、そこに黄葉の眞味を傳へることが出来る。私は彼の银杏の黄葉に對して、それに附隨した空を見る。日光を見る。其の木の位置を見る。其の木に近く古ぼけた某家の二階の窓が見えて、張り替へた障子の白色、其の障子の色が黄葉に反映して、黄ばんで見える。此等の事實を綜合して黄葉の面白味は加はる。續いて、白く塗つた家を前にした黄葉林の夕映なども快く考へられるのである。

### (一三) 二種の感興

感興に、自分から起す場合のそれと、自然に起つて來る場合のそれと二つある。前のは感興と云ふよりは興味と云つた方が適切であるかも知れぬ。作をする前に、興味を起してから筆を執るのと、餘儀なくされて書くのとでは、出來た上で、大いなる差が生じて來る。面白味を感じるのと、然うてなく厭々書くのとでは、必ず其の作の上に大いなる影響が無くてはならぬ譯だ。作者の箇性がよく表はれて、作物に徹る感味の快く受け得られる文なり歌なりは、それに對して起した作者の感興が基礎をなして居らねばならぬ。作物に依つては、それが天來であつて、人爲のそれでないかも知れぬが、多くの場合、天來の興を得ることは難い。謂ふ所の感興は興味であつて、自分から起すものである。

詩歌に携はる若い人々の中には、無暗に天來の興に憧がれて、それを眞實に感じたものゝやうに定めて了つて、精神に異狀を來す者が起つてきたり、若しくは又輕薄にそんな事を言つて見たい者が起つて來る。我々は然う云ふ得誰い興に囚はれて、あッけらかんとして、長い年月を待つてゐることは出來ない。それは、其の人の天分にも因り、其の場合の心の状態が、恰も天意と冥合するにも因るので、奈何なる人に依つて起され、奈何なる動機に依つて起るものかは、人意を以て測り知ることは出來ない。唯、我々は一朝、天來の興が油然として到つて、身内の隅々に迄爽々しい感じが漲つた時の快感を想望するを禁じ得ない。

俗務などに鞅掌して、身も心も疲れ切つた時、ふと或る慰安の影が淡く胸の底に映ることがある。然う云ふ時、我々は堪まらなく其の心持を歌か文かに言ひ表はして見たくなる。困憊して後の慰安は、唯、眠りであ

る。普通の人はそのれて眠つて了ふが歌なり文なりを作り得る素質を持つてゐる者は、常にそれを考へて居るから、然う云ふ疲れ切つた時にも些かの餘裕を得さへすれば、彼の反動で、直ぐそれに走る。慰安の影は即ち些かの餘裕を得て、作をしようと思ふ心の潤ほひである。之れには、作を想ふと云ふ人爲的の處もあるが、一面には自然に湧き起つた興も伴つて居る。我々が若し言ひ得べくむば、斯う云ふ場合のを自然に得たものに近い感興と稱するのである。

慰安の影が淡く胸の底に映つて、疲れ切つたあとの心を潤ほすと云ふことは、文や歌に携はつてゐる者ばかりの有する處である。我々の死んだやうな心は、斯くして、此の自然に近い感興に蘇生つて行くのである。文や歌は常に我々の生活に色彩を添へ、光明を與へてくれることを忘れてはならぬ。

我々が或る作にかゝつてゐて、中途で筆がちびり、氣沮むと云ふことがあつた場合、それから生きようとして、色々に他から興味ある聯想を呼んで見る、其の中で、圖らず自分の今書かうとして書き得ないで居つた或る一事にぶつかつたとする。それで、俄かに興が起つて来て、杜絶えてゐた筆を進めることになる。と云ふやうな事は、人爲で感興を呼んだものである。斯う云ふ場合の感興が、作の上に尤も有効であつて、常に振作することを忘れてはならぬ。

#### (一四) 短歌に於ける配合

配合は平たく言ふと取合せである。或る二つの物があつてそれがシツクリ合ふ時、取合せがよいと云ふのである。配合がよいと云ふのである。文章の上にも配合は必要であるが、歌のやうな短かい形のものにな

るとそれがシツクリ合ふと合はないとて、一首の上に及ぼして來る感味のちがひは大なるものである。そんなら其の配合はいかにして調べてよからうかと云ふ問題になつて來る。之は一口に斯うと解決をつけることは出來ないが、大體先づ斯う云ふことを心得てゐて貰ひたい。それは、取合せらるべき二つの物は全然異つたものではならぬ。少なくとも兩者の間には或る共通した點がなければならぬ。まるで違つたものを持つて來て調和させようとした所で、それは出來ない相談である。外形は異なつてゐても、その内部に兩者通じたところがなければ、配合せられやうがないのである。然るに、目先きを變へると云ふ事、即ち奇抜にやつて、人の意表に出ようなど、考へて、途徹もないものを捉へて、それを不自然でなくつなぎ合せようとした所で、絶対にその者が相違してゐては、とても調和出來やう筈がない。即ち配合せらるべき二つの物は少

なくもその何處かに共通し、一致した點がなくてはならぬと云ふことを斷言し得る。

所で又斯う云ふ錯誤がそこに起つて來るのである。それはわざ／＼取合せようと思つて、人爲的にさう工夫したものである。然うした作を見ると、作者はいかに之れを蔽はうとしても、その痕跡を掻き消すことは出來ないのである。之れなどは不自然であつて人間の猿智恵を出したものだ。併し、初めのうちは、何うしても此の人爲的工夫が加はつて、そこにイヤミが伴つて來るのである。配合に於いて最も心得べき肝心の事と云ふことは、それがあく迄も自然でなければならぬことである。強ひて持つて來たのでなく、それが自づと一致調和されると云ふ風でなければならぬ。例へばこゝに黒い色と白い色とがある。之れを調和させようとしたら何うであらう。此の二つの色は絶対に異つた色である。諺

にも極端に違つたものを炭と雪と云ふではないか。此の全く相異なつたものをいかに苦心して調和させようとした所で、それが不自然に終ると云ふのは何うした譯であらう。此の二つの物の何處かに共通した所があるか何うかを考へて見る。併し、全く相異つたものは、それが共通した點のありやうがないぢやないか、強ひて之れを調和させて、此の二つの違つた者から受ける印象を強くさせようとした所で、何うしてもそれは別物になつて仕舞ふ。さうして、此の二つを對照させたことをわざとらしく思はずには居られまい。

例へば、こゝに雪に埋もれた森があつて、それへ鴉が來て黒點を印して居ると云ふ景色に出逢つたとする。その時に白い大きなものゝ中へ黒一點をのしるして、鴉を面白くと思はぬではないが、何うもその際立つて相違のある色をわざ／＼奇を求めて對照さしたとしか受取れな

い、甚しく異つたものには、眼に受ける印象が餘り強過ぎるから、二つ一致しないで、離れくになつて仕舞ふ性質を有するのは、前に言つた通りである。併し、こゝに例を挙げたやうに、白い大きい物の中へ小さい一點の黑影を落した位ゐては、そんなに際立つて強い刺戟を目に與へないから、それ程不自然な感じを受けないのである。が斯う云ふ對照を以て、空漠とした白い色の中に一點の變化を與へて、觀者の眼を倦ませまいとしたのは、一種の配色法として、舊くから慣用されて來たのである。彼の萬綠叢中紅一點の如く、一點の紅を以て萬綠に對せしめて、その綠色を引き立たせようとする方法は、今日から見て、既に陳腐である。わざとらしくなつて居る。強ひてさうさせんと云ふ風に解されて來た。今日はすべて自然と云ふことを尊重する。不自然な配色はイヤミと云ふ一語で排斥されて來た。

75

文 話 歌 話

て、前に戻つて、二者相共通した點がなければならぬと云ふことになつて來る。即ち青い色と、白い色の如く、二者に何處か似通つた點があると云ふこと、之れに或る一致の點を認めることが出来る。青葉の中に白壁の家が見えがくれしてゐると云ふやうな景色に出逢つたとして、此の二つの色から受ける印象は、少しも際々しくなく、青い草の間を縫うて一道の水が流れてゐると云つても、それがいかにも自然に感じさせるのは、矢張り兩者に共通した點があるからだ。だから渾然とした感味が出て來るのである。

左に青い色と白い色とを取合せた景色の歌を列舉して見よう。さうして、そこに配色の自然を得て居ることを證據立てようと思ふ。

白蛇ありわがゆく前の一すぢの路をよぎりて草中に入る

青淵に幄の上なる山櫻ちらちら白くちりかゝる夕

白壁の見えがくれするかの遠き青葉の中に君をしちもふ

青き菜にあわ雪のしてささらぎの一日の朝の霽れにけるかな

之れは何れも或る初期の研究者に代つて試作したもので、幼稚な處はあるが、此の二つの色を取合せて得た快感は、相應にあらはれて居ると言つてよい。今度は別の場合に於ける配合を話して見る。

こゝに大木がある。その根元に芽が出て、大木も其の小さい芽も共に春の日を受けて居ると云ふ景色に出逢つたとする。所で、之は配合のよろしきを得て居るか何うかを考へて見る。大木とその芽とでは、大小が餘り際立つてゐて、何うかと云ふ批難があるかも知れぬが、之れは二つ相聯關してゐて、離れぬになつて居らぬ。さうして、此の大きい小さいのは二つの物をわざ／＼並べたのでなくて、もと偶然であつて且つ一致して居る處があるから、不自然の點が少ないのである。併し詠みやう

に依つてはわざとらしくもなる。左に之れを試作して見よう。

大木と根方にいでし小さき芽とおなじく春の日を浴びて居り

斯う云つては餘り見たまゝに過ぎて、感じの露骨すぎる憾みがある。

もつとシツクリした詠み方を以てせねばならぬ。つまり、前半の詠み方が悪いのだ。大に對して小と承けたその言ひやうが一つは拙い。

大木とその根方なる青き芽と

と、かう改めたら、同じ露骨でも、そこに幾分の姿態を生じて來る。即ち青き芽と換へたので、下の春の日に對しても、感じがよくなつて來る。小「さき」と「青き」との違ひで、大木に對する配合又春の日に對する調和が整つて來ると云ふことを等閑に思はないで、よく考へて貰ひたいのである。

## (一五) 今の眼で観た古人の春と夏の歌

春の日の気分は長閑かにゆつたりして居る中に、何處か心を唆つて人を落ちつかせない所にある。古來の歌に表はれた春の日の情想は單に長閑かにゆつたりして居る所を詠んだものと、心をそゝられて落ちつかぬ所を詠んだものと、斯う二つに分つことが出来ると思ふ。心を唆られると云ふのは、重もに自然に對する憧憬の情を抒べたものであるが、延いては、うら若き心の悩み、さてはふりゆく身の哀れを籠めて堪へがたき春愁を詠んだものもある。即ち左に最も古き萬葉集時代の歌人が、いかに春を觀じ、いかに自己の情緒を之れに寄せたかを檢べて見ようと思ふ。

春の日に張れる柳を取り持ちて見れば都の大路おもほゆ

——(大伴家持)

春の麗かな日に、青やかに新葉を出して枝を張つて居る柳に手を觸れて見ると、裊々と枝を垂れて居る都の大路が眼に浮んで來ると云ふのである。たゞそれ丈けの意味で、見たまゝ感じたまゝを歌つたものには過ぎないが、此の中に悠々たる春の日の気分が遺憾なく發揮されて居る。作者の位置も分るし、此の作を通してその都の大路の光景もおぼろに見えるではないか。文字に些かの技巧がなくて、自然の情緒がのんびりと出て居る此の時代の歌の空氣を伺ふことが出来る。

百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮しつ——(山邊赤人)  
之れは人口に膾炙して居る歌で、意味もよく通つて居る。此の歌を口



ずさめば、誰しも奈良の都の春の日に胸をびつたり合せるやうな心持になるであらう。春氣千萬な眠つて居るやうな氣分になるであらう。何物も皆暖かき春の日の光りに溶けて、天地は唯だ陽炎の浮游する如くである。生の苦しみもなければ、死の怖れもない。斯う云ふ心持に片時でもいゝからなつて見たい氣がする。もしきは大宮人と云むは爲めの冠詞で、暇あれやのあれやはあればにやと云ふやうに、耳に強い疑問の意に取らずに、柔らかに咏嘆の心持に取るがよい。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ

——(柿本人麿)

春の夜明けのしら／＼として來た景色が快く目の前に髣髴する。かぎろひは陽炎のことである。絲遊のちら／＼と立つのを見て、夜が明け

たと思つて、西の空を振り返ると、落月の淡い影が目に入つたと云ふのである。幾分の技巧はあるが、作者の態度の自然の爲めにそれが少しも苦にならぬ。渾然とした氣分の中に包まれて、快感を與へて居た。調子の高い感じの勝つた作である。

うらうらと照れる春日に雲雀あがり心悲しも獨り思へば

——(天伴家持)

麗らかに日の照つて居る春の空に雲雀の高く揚る様を見ると、何かうら悲しい心持がして來る、それは獨り物を思つてゐる時であるからだ。と云ふ意である。春愁を詠んだものである。調子の面白い、引きつけられる作だ。照れる春日に雲雀あがり、と軽い和らかな調子で來て、四句で「心悲しも」とシンミリと結んで、獨り思へば」と句の轉換法を用ゐて、一首

の情緒をよく表はして居る。春愁と云つても、それは深い切なものでなく、何れかと云へば、軽いあつさりとしたものであらう。心に憂ひある時は、大空に高く揚つて居る雲雀の長閑かな姿を見ても、悲しいとしか感じないと云ふのだ。一方に快感を起す材を捉へて来て、心の憂ひがその快感を打ち消すばかりである。と二者を對照せしめて、感傷を強めたのである。此の對照は斯う云ふ風に自然にやらないと、厭味に流れ易いものだ。

讀み去つて、何處となく胸の痛みを覺えさせる作である。

燕くる時になりぬと雁がねは國しぬびつゝ雲がくりなく

——(大伴家持)

春の雁を詠んだものである。國しぬびつゝ云々は故郷を懐うて、高き

雲がくれに啼くと云ふのだ。燕くる時になりぬと無雜作に云つて、雁の歸る頃になつたことを思はせ、それから、四、五句の情緒を表はしたものである。一首の面白味は、此の情緒纏綿の所にある。擬人法を使つて、毫も厭味にならぬのは、例の詠み振りの自然だからだ。

手弱女の袖ふさかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く

——(志貴皇子)

之れは明日香の宮から藤原の宮へ都遷りがあつて、俄かに物寂しくなつた明日香に、作者が残つて、詠まれたのである。即ち、明日香の宮に入りする美しくしき女等の袖吹き返すべき春風が、遠く遷都したあとの今は、もう其の嬋めいた面影を見せないで、空しく吹き渡つてゐると云ふのである。明日香風は明日香を吹く春風と云ふのを、斯う詰めて特別

に言つた所に、其の時代の面影を想ひ浮ばせることが出来る。みやこを遠みは都が遠さにてある。いたづらには前の袖吹きかへすを承けて、漠とした寂しい情景を想はせる切實の語である。一首に「春」字を點するなく、際立つた春の景物を持つて來ないで、春の氣分の溢れて居るのは、作者の高手を想はせる。

讀み返せば讀み返す程、春のさびしみが、蔽ふ所なく溢れて居る。

子らが名に懸のよろしき朝妻のかた山岸にかすみたなびく  
 美しい可憐の子に負はせる名としてふさはしい彼の朝妻山の出  
 ばつてる處に霞の棚引いてゐると云ふので、優しい情緒を景の中に寄  
 せて詠んだものである。單に朝妻山に霞たなびくだけでは、折角の初、二  
 句の情緒を散漫なものにして仕舞ふ所を、かた山岸と云ふ眼の著け所

が、彼の情緒にびつたり、出會つてゐるので、一首の感味が、シツクリして來る。

氣の利いた心憎い作ではないか。

櫻花咲きかも散ると見るまでに誰かも此處に見えて散りゆく  
 櫻の花のやうに美しい少女の群れが自分の側を通つて行つたの  
 を目送して詠んだものである。咲きかも散ると云つて、美しい華やい  
 だ群れを想はせ、誰かもと云つて、親しんで、その群れを見たことを表は  
 して居る。複雑した事柄が、一首の中に美しく織り込まれて居る。春の  
 景物を取合せた明るい背景も目に見えるやうである。

すつきりと一本調子の作の多い集中に、意味の曲折した此の歌は異色がある。

かなと云ふ咏嘆の辭は、斯う云ふ風に使つてこそ始めて味ひが出てくるので、字數の足りない爲めに、間に合せに持つて來るなどは、明らかに濫用である。景樹は此の「けるかな」が好きで、矢鱈に使つたので、其の歌集を「けるかな集」とさへあだ名された位であつた。「けるかな」の如き重い咏嘆辭を、さう無暗に使つては、其の辭に權威がなくなる。注意すべきことだ。

(一六) 迷ふと云ふこと

此の程、未見の或る人から斯う云ふ事を言つて寄越した。それは何うも歌を作る場合、迷つて困る。あゝでも無い、かうでも無いと考へて、考へ抜いた果てが、無茶苦茶になつて了ふ。然うして、不愉快の伴ふのを常とする。何とかして、此迷ひを救つて下さる方法はありませぬかと、それは

茅花つばな抜くあま浅茅ちが原のつぼつぼ董とう今さかりなり吾が戀こひふらくは

——(大伴・田村家・大嬢)

茅花つばなを抜くころになつた浅茅あまが原に、董とうの咲いてるのを見て、そなたと一所いっしょにこゝに遊んで茅花つばなを抜き董とうを摘つんだ過ぎた春が戀しいと云ふのである。之れは妹の阪上さかのうえ大嬢おほいらつめに寄せた作だ。

同性を戀うた歌だけに、情味が淡い。併し其の淡い所に純じゆんな趣おもむきが出て居る。春風にやはく面おもてを向けたやうな作である。わが戀こひふらくは「は、わが戀こひふるは」と云ふ意い、らくは「る」の延のびびたものである。斯う餘情を残した言ひ方が、一首の情味を誘ひ出して居る所に注意せねばならぬ。

以上は萬葉集まんやふしふの所々から眼に觸れた春の歌を抽ひいて見て、聊か私註を加へたものである。續いて代々の歌集にも及ぼす筈であつたが、長くなつたので、こゝに筆を擱おく。

わが宿の外面そとに立てる櫓やぐらの葉はの茂しげみに涼すずむ夏なつは來きにけり(惠 慶)  
 無む雜ざ作さに詠よんだものである。門外かどに大きな櫓やぐらの木きがある。それに葉はが  
 茂しげりあつて、その下したは廣ひろい陰かげをなして、涼すずむによろしい夏なつが來きたと云いふ  
 のである。外面そとに立たてる櫓やぐらと云いふので、作者その生せい活かつの状じやう態たいも、その景けい趣すか  
 ら憇しやうばれるものがある。淡たん々と言いひ下くだした中なかに、作者その簡かん性せいが髣ほう髴ふつとし  
 て居ゐる。

月つき清きよみ小野おのの細道せうだう過すぎゆけば皆みな卵たまごの花はなの垣根かきねなりけり(實 定)

月つきの光ひかりが夏なつらしく白しろ々と涼すずしげな夜よ、小野おのの細道せうだうを辿たどつて行いくと、藁わら  
 屋やが三さん四し建たつてゐるが、その垣根かきねは皆みな白しろく卵たまごの花はなが咲さいてゐて涼すずし

い月光げつこうを受けて居ゐると云いふのだ。爽すわ々々しい詠よみぶりて、初しよ夏かの夜よの感かんじ  
 を直ただに受うけしめる作さくである。

ぬばだまの月つきに向むかひてほととぎす啼なくおと遙はるけし里さと遠とほみかも

——(家 持)

「ぬばだまは冠詞かんじで意味いがない。月つきのてる夜よ空そらに向むかつて啼ないてゐる杜ほと  
 鵲とらのこゑが遙とほかに聞きえるが、その啼ないてゐる里さとは餘程よほど遠とほい彼方あつちでがな  
 あらうと云いふ意い、遠とほい鵲とら聲こゑをきいて、その里さとの遙とほかなるを想おもひ、一味い幽ゆう遠えん  
 の情じやうを催もよほした作者その情調じやうてうを伺うかはしめる。調てうの高たかい、一い道だうの眞氣しんきに打うたれ  
 る作さく。

峯みねの松まつ入い日ひ涼すずしき山やまかげの裾野すその小田せだに早苗さなへとるなり(順徳院)

峯の松が涼しく風に戦いでゐる邊りに入日があかく射して、その餘光が此の山裾の野と開けて居る田の面に明るく落ちてゐるが、そこらは今田植の最中で、薄暮近いのも知らずに勤しんで居ると云ふ御心である。場處の取り方が凡でない。入日、山かげの裾野、此の二つの景物を持つて來られた其著眼が並大抵の田植の作と確かに懸け離れてゐることを證する。凡手の企及し難い畫趣を此の御歌から想はせることが出来る。

かげしげき木の下やみの暗き夜に水の音して水鶏なくなり

——(永福門院)

木の下陰が濃く暗い夜の小流れに、ひつそりとした空気を揺かす水の音がして水鶏が啼いてゐると云ふのである。深くはないが、幽趣を覺

えしめる作である。四句の「水の音して」が一首を活かして居る。此の句の爲めに、木の下陰を流るゝ水が、暗に白く光つてゐるさまも見える心地がする。

忘れては秋かとおもふ片岡の楢の葉わけて出づる月かげ(親房)  
片岡に茂つてゐる、あの楢の葉を分けて出づる涼しい身に沁みるやうな月を見て、まるで秋のやうな感じを覺えたと云ふのである。初句と二句が、間延びがして且態とらしい言ひ方である。秋近い晩夏ごろの夜氣に觸れさせる景趣でありながら、それが切實に來ないのは、作者の實感が動いて居ないからである。古歌には、概して此の實感が稀薄である。ずつと古い萬葉集時代の作者の詠んだものには、實感即ち歌と云ふ傾向があつたが、巧を競うて、一意體裁を飾るやうになつてから、短歌の生

彩は段々剥げて來た。古歌を研究する上に辨へて居らなければならぬ事である。此の歌に作者の實感が緊切して居らぬことを話す序でに、一言して置くのである。

かき分けて折れば露こそ零れけれ淺茅にまじる撫子の花（西行）  
 茅が淺く一面に生えてゐる草むらの中を分けて、撫子の花の紅く咲いてゐるのを手折つた所が、花に置いてある露が憐れにこぼれて、手をぬらしたと云ふ歌の心である。何でも無いが、憐れの籠つた作で、そゝろに心をそゝられる。

夕立の雲間の日影はれそめて山のこなたを渡る白鷺（定家）  
 満天墨を流すやうであつた夕立雲の間から日光が見えて、こなたに

面してゐる山裾を濡れ羽を羽ばたかせながら、白鷺が一羽飛んで行く  
 と云ふ景色である。山のこなたと云ふのが、少し突梯であるが、白鷺を點して景色が活きて來た。

割合に趣向が複雑して、雲間の日影と云ひ、山のこなたの白鷺と云ひ、奇抜な遣り口である。言葉の足らぬ傾きはあるが、佳作である。

道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

——（西行）

路ばたに一道の清川がゆるく流れて居る。そのほとりに柳の枝が青く長く垂れて、その下陰はいかにも涼しく心地よさうなので、疲れたからだを、しばらくの間、そこに休ませようと思つて、立ちどまつたことである。と云ふ意。路上は盛夏の極熱で、そこを喘ぎ々々來かゝる旅人の

さまと涼しげな此場の景色とが、相對して、直に一首の情景に觸れさせることが出来る。詠みぶりが自然で、淀みなく言ひ下した處に面白味がある。

夏の夜のふすかとすれば杜鵑なく一聲にあくるしのゝめ（貫之）  
夏の夜の明けやすく、まだまだ夜だ、夜だと思つてゐるうちに、杜鵑がないで、その一聲に明けかけて來たと云ふのである。ふすかとすればは寝る間もないばかりに、夜の早く明ける意を言つたものである。平俗の趣味を歌つたもので、稱すべきはその點にある。

夏草のしげみが下のうもれ水ありと知らせてゆく螢かな

—（後村上天皇）

夏草が長く繁つて、水の流れはその下に埋もれて一寸氣のつかない邊りを螢がそれと分るやうに照らして飛んでゆくことかなと云ふ御製の心だ。ありと知らせてと云ふ四句の御眼の著け方が奇警で、草長さ夏の野の夜色がぼうつと目の前に見えるやうに覺えまゐらせる。

大荒木の森の下草茂りあひてふかくも夏のなりにけるかな

—（忠岑）

「大荒木の森」は地名である、山城の國久世郡に在る。其の森かげに生えてゐる草が長く深く茂りあつて、その下に夏の更けたことを覺えさせると云ふのだ。坦坦と言ひ下して、其の森の邊りの景色が見えるやうであると共に、晩夏のあはれが身に沁みて來る。ふかくも夏のなりにけるかな、何の巧みもなく、すらくと言つて、餘情盡さがたい作である。ける



わが宿のいさゝむら竹吹く風の音の微けきこの夕べかも

——(大伴家持)

春の静かな夕ぐれに、新竹のあつまりに訪なふ風があるかなきかの響を立てゝ居ると云ふのである。一首の情調はよく春夕の静けさに適つて、線の細い所に妙味がある。後世の繊細と云ふのは、巧を弄して、小細工に落ちるから、作者の小才ばかり眼について、歌の内容に流れて居る氣分を味ふことが出来ないものである。巧を弄しなれば、歌の妙味が表はれない様に考へた後世の作者の心事は、洵に淺ましいことだ。手先きの器用で出来た作品は、竟に兒戯に過ぎないと云ふことが、斯う云ふ作品を見ると、自然に發明されて來るのである。

それは長い手紙を寄越したのである。中には斯う云ふ場合、彼あいふ場合と、一々その時々<sup>ときどき</sup>に起つた事柄を書き立てゝある。自分はそれを限なく讀んで見て、成程と合點<sup>がてん</sup>される節が多い。之れは、あながち、その人一人ばかりでなく、斯様な迷<sup>まよ</sup>の中に悶えて居られる人が多いと想ふから、左にそれに答へかたゝ然<sup>さう</sup>う云ふ場合の心得を説かうと思ふ。

諸君、迷ふと云ふことは、確かに或意味に於いて好い事である。舊態<sup>きゅうたい</sup>に安んじられないで、新しい進歩の途<sup>みち</sup>に上らうとして腕<sup>うで</sup>いてゐる時である。その闇を切り抜けければ、前途には確かに光明<sup>くわうめい</sup>がある。決して悲觀することでは無い。自分は諸君に大に迷ふことをお勧めする。然うして、一旦の迷ひに志を挫かないように、ますゝ奮つて貫ひたいのである。中には、斯んなに考へても出来ないから馬鹿々々しい、外の事をする方がましだと途中で廢めちまふ人もあらう。そんな志の弱いことでは、何業<sup>なにげ</sup>に

限らず成し遂げられるものぢやない。迷ふならいくらでも迷へ、迷ひ抜いて仕舞つたら、何處かへ打つかるだらうと云ふ勇氣を有つてかゝらなければ駄目だ、一寸自分の思ふやうに行かぬことがあると、もう厭いで仕舞つて、その事を捨て、仕舞ふやうでは、一生うだつの上りッこは無いのである。何處までも遣り遂げると云ふ強い信念を以て懸らなければ最後の勝利を得ることが出来ない。一體、今の若い人は物事に執著心がない。或る一事に取り著いたら、一かばちか定りがつかぬ間は、手を引かない位な決心がなければならぬ。始終心が動いて定まらぬやうでは、必ず一業を成就することは出来ないものだ。殊に歌のやうな、自分の心を基とするものに在つては、一倍心を苦めもし樂ましめもするものだ。その苦しい時は、こんなに苦しくつては、逆もつゞくものぢやない、自分には生れつき歌が詠める素質がないのであらうと獨り定め定め

て了つて廢して仕舞ふ。歌のうの字も口にしなくなる。然うして折角出来かゝつた礎を打ちくづして了ふ人が尠くはあるまいと思ふ。自分は斯う云ふ人々の上を考へる毎に、氣の毒でならない。何故一奮發しない、行く處まで行くと云ふ心にならないのかと情けなく思ふのである。

で、迷ふと言つて寄越した人の事に立ち返つて、その場合の一々を擧げて慰めになる答をしよう。

先づ斯う云ふ事が書いてあつた。或る自分の心持を詠まうとして、何うしてもまとまらない。それは或る夕ぐれの事であるが、檜の梢に五つ六つ程残つて居る枯葉が散らうとして散らないで、久しくそのまゝで居つた所、風もない夕ぐれの空氣に觸れて、その中の一枚がガサツと云ふ音を立て、散つた。その時、自分は縁側へ出て暮れ行く空を眺めてゐたが、此の静かな中に重い響を持つて居る音を聞いた時、ハツと思つた。

然うして胸の動悸が止まない。此時の心持を何うかして詠んで見たいと思つて、暗くなるまで、縁側の柱にもたれて居つたが、出来ない。室へ歸つて燈の下で凝つと考へたが、矢張り出来ない。その夜は斯くして何事も手につかないで寝た。明くる日になつても出来ない。言へさうで言へない。自分は歌の啞になつたのである。……と云ふ悲痛なことが細々と書いてあつて、歌は添へてなかつた。何故出来なかつたらうかと自分は考へて見た。

人は或る刺戟に逢ふと、その興奮した心のゆらぎと云ふものに制せられて、一言も發しえられない場合が多い。歌でも然うだ。餘り強い感動を受けると、その當座は心が静まらない。然う云ふ時には、成るべく心を静平にして、その静まるを待つて、始めてそれを歌にすべきである。當時の感想はなるべくその時に近く言ひあらはす方が、何うしても、切實に

なつてよいものだが、出来ないものを強ひて詠むには當らない。然ういふ場合には、その時の感想を心の底に秘めて置いて、後日何かの折にそれを詠んでも差支へない。旨く其の當時に出れば、それに越したことはないが、出来ないものを強ひて出さうとして努めるのは、愚である。焦れば焦るほど出ない。つとめて心の安靜を計るに限る。

で、自分が假りに其の時の感じを言ひあらはして見よう。そこで、

ちり残る檜の枯葉の幾ひらか枝にありしが一片ちりぬ

と先づ詠んだとする。これでは、單に事實を述べたゞけで、作者の感じが出て居らない。作者が心のをのゝきと悲みとが出て居らなくては、作者に代つて詠むと云ふ甲斐が無い。更に考へて見る。

風なきにちりのこりぬし檜の葉の梢はなれし夕の悲哀

と詠みかへて見る。今度は前に比べると、大分作者の心持が出て來た。何

處かしんみりと胸に應へるふしがないでも無い。たゞ「風なきに」と云ふ初句が、ことわつてあつてそれが爲めに一首のさびしい趣を殺いで居る。何と改めたら、此の場合、適當な語句となるであらう。初句ばかり直す譯には行かないで、

ちりあへず残りし中の檜の葉のひと葉先づちる夕のか

なしみ

として見る。これで、先づ好からう。まだ十分とは行かぬが、幾分作者の心持を傳へたものであらう。あゝでも無い、かうでもない、心の中で、迷つてゐる間に、上の句でも下の句でも、或はその中の一句でもよいから、書き抜いて見る。それから感じがだん／＼進んで行くものである。それで自然出来て行くものだ。始めからよいものを拵へようとか、自分の感じを遺憾なく傳へようとかすると、何うも想ふやうに行かなくなる。そこ

で、いろ／＼の煩悶が起つて来るものだ。なるべく虚心平氣にして、何か作らうとする一首の中の或一句なり二句なりを得たなら、それを土臺にして詠んで見るが可い。然うして、自分の氣の濟むまでに書き改める。頭の中で考へて居るよりは書きつけて見る方が、自分の經驗から言つて、効果があがるやうに思ふ。それから、其の次の迷つた場合に斯う云ふことが書かれてある。

今度は推敲上の煩悶である。或日ふと歌を詠んで見ようと云ふ氣の起つたのは、非常にいゝ天氣で、小春日の暖かさと言つたら、障子に射し込んで来る午前何時かの日の色を見て、何だか嬉しくて堪まらなくなつたので、左の如き歌を得たとある。

うれしきは晴れたる空のかゝる日の障子にうつる午前  
の日ざし

と先づ詠んで見たが、何だかあつけない気がして、詠み直した。それは、

晴れし日の午前の日ざし見るばかりあゝわが心うれし

きはなし

と云ふのである。矢張りあつけないと思つて、今度は、

うらゝかに晴れたる今日の午まへの日ざしを見ればお

もふことなし

と書きつけてみたが、これでは、小春日に詠んだと云ふ心持が出て居らぬといふので、小春日と云ふ文字を一首の中に入れて見ようと企てた。

うらゝかに晴るゝ小春の午まへの日ざしを見ればおも

ふことなし

と直して見たが、何うもうまく行かない。……此後に書きては消し、消しては書きして、五六首列ねられてあつて、その果てに、だんゝ拙くな

るやうです。考へも何もめちやゝゝになりましたと亂り書きに書いてある。

自分は之を見て氣の毒に思つた。此の位苦勞して竟に自分の意を満たすものを得なかつたとは、いかばかり不本意のことであらうと想つた。で、自分は更に斯う云ふことを考へた。それは此人は餘り考へすぎる質の人で、その爲めに失敗するのだと。よく氣を静めて考へて見られるが可い。書き直した歌を見て行くと、だんゝ悪くなつて居る。始めの一首が一番すらすらとして作者の感じがよく出て居る。餘り早く出来たので、何か無雜作過ぎたやうに考へて、更に詠み直したに違ひない。併し、その無雜作に出来たものが一番出来がよい。小春日と云ふ文字が入つて居らなくてはその心持があらはれないやうに言つて居るのは間違だ。必ずしも小春日といふべき必要がない。内容にそれらしい感じが出て居

れば、それで可い。文字を以て、その感じをあらはさうとするのは、ごく幼稚な、淺薄な手段だ。然う云ふ外形の道具立を借らずに、その心持が言ひあらはされるやうにならなくては駄目だ。が、斷つて置きたいのは、その文字をまるで使つてはならないと言ふのぢやない。文字にたより過ぎ、自分の思想が制せられないやうにと言ふのである。例へて言つて見れば、彼の初めに出來た作の「嬉しきは云々の第五句を、小春の日ざし」として、第三句のタルンで居るのを「午前の」としたい。この場合、小春はわざわざ持つて來たのではない。これが爲めに思想を制せられて居らない。否、「嬉しきは」と云ふ作者の感じに對し、小春は確かに生きて居る。斯う活用しなければならぬ。左に書き直して見る。

嬉しきは晴れたる空の午前の障子に映る小春の日ざし

これで可い。畢竟は自分ひとりで作つて、他に見せて、批判を受くるだけ

の師友が無いから、いろ／＼な迷ひが起つても、それをほぐすことが出來ないのである。歌そのものは元來自分のものであるが、自分で會得して、よく自分をあらはすことを得るまでには、他の指教を待たなければならぬ。

それから其人の迷つて居ることに對し、今一つ書いて見る。それは上の句が出來て下の句が出來ないと云ふ時、下の句が出來て上の句が出來ないと云ふ時の例を幾つも擧げて、中途半ばのものが澤山出來て困ります。然ういふものは、いっその事捨て、仕舞はうと思ふのですが、それ／＼おもひてがあつて、その儘にしてあります。所が時々それを讀み返して見ると、一首に纏りさうなものが出來て來ます。併し當時の感じでないものを、今書きつゞけると云ふ事は、罪ふかいやうな感じがして見す／＼一首になりさうなものを其儘に、當時詠まうとした心持の出

て來るのを待つて居ると云ふ始末です。一首になりさへすれば、構はな  
いものでせうか、何うもそこが色々に考へられて迷つて居るのです。云  
々と云ふ事が書いてある。中々熱心な人だと想つた。然うして之れは早  
く返事してやりたい氣がした。

或る時々考へた事が一首に纏まらないで、上の句を得たり、下の句  
を得たりする場合、それを一々書き列ねて置いて、後々から當時の感想  
を呼ばうと云ふのは好い方法である。しかし、後で讀み返して見て、その  
句にふと出逢つた心持が起つて、それを一首にした所で、決して罪惡で  
も何でもない、あながち當時考へた著想と符合しなくとも、その出來て  
ゐる句とピッタリ出逢ふものなら、それを一首にして差支へない。新し  
く起つた思想と出逢つて面白いものが出來れば、却つて結構である。少  
しも躊躇することはない。之も一つの開發の道である。

(一七) 歌の出來る時 (一節)

私が歌の出來る時はこれまで多く路を歩き乍らであつた。朝家を出  
てからの路、夕方歸つて來る路、此の間が歌を考へるに好い時であつた。  
所が、此の頃ではもう其様な餘裕がない。然う云ふことを考へないでも  
ないが、何だか心が追はれる様で、何と云ふことなしに行つて、又何と云  
ふことなしに歸つて來る。小さな動搖が自分を離れないで、今では寢る  
一時間許り前、朝起きてから飯迄の間、此の時刻が妙に心が落ちついて、  
歌が詠みたくなつて來る。二三日前、夜十二時過ぎ、寢ようと想つて居る  
と、雨が白く音たてゝ來た。何とも知れず、心が涼しく潤うた。

月見草の花の黄いろいのが、私には何より嬉しい。次第に黒くなり行  
く夜の空氣にしつとりと水氣のある黄な色を見るのを好む。斯う云ふ

静かな境から、私の歌の思ひは揺かされるが、他に絶えず動かされて居る私の心は、沈静して此の花に對し得る時が少い。(四十三年の夏)

### (一八) 生きた會話

日本人は談話の拙い國民である、自然口語と云ふものを輕視して、文章には必ず文語を使ふ習慣が古くから堅く根城を定めてゐた。言文は一致せぬものであると云ふことは日本人の頭に浸みて來た。だから、今から二昔も前に、亡くなつた山田美妙齋が其の小説に始めて口語を使つて發表した所が、世間は好奇のすさびの如くに蔑視して、此の美妙齋の新しい運動に水をさした。甚しきは之れを邪宗の如く見做して、攻撃の矢を放つものが多く、氏の人格にまで云々する手合が出て、ワイ／＼騒いだものであつた。所が物變り星移り、今日では口語の勢力が非常な

力を以て、幾んど文壇の全部を蔽うた。諸君も知つて居る通り、口語で書いたものでなければ、讀んで見るのを躊躇すると云ふ迄に口語の勢力は蔓延したのである。あの論文に迄口語の區域が擴がつて、何うしても文語體でなければならぬと定つて來た弔祭文に迄、口語の勢力範圍を進めて來ると云ふ驚くべき變化を示して來た。

そこで、小説は先づ眞先きに口語體を取つて、自己を描寫し、若しくは自己に近いものを取つて、一篇の題材とし、何でも實際實際と云ふ風になつて來た。だから之れ迄會話がとかく小説の地の文と離れがちで、其の會話だけ見たのでは、其の人物が何うも活躍しない。きごちなく型に嵌つたやうなものであつた。之は此の位の身分で、此の位の年配であるから、斯うやつたら可からうと云ふ。めこの勘定から、人間の性格をあらはす大事の會話を、無雜作に定めて書いてゐても濟んだものであつた。



同じ程の階級で、同じ程の年配でも、十人十色で、其の氣質なり、口吻なりが著しく違ふものである。それを可い加減に、同一の型に容れて律して仕舞ふと云ふのは、甚しく亂暴である。之れは是非改めなければならぬ事だ。口語の隆興と共に、此の弊害を一掃して、今日では、其の會話に依つて、其の人間を活躍せしめる様に努めて來た。其の著しい現象として、先づ自己を描寫せよと云ふこと、之れ位ぬ、眞實で、又其の性格を活躍せしめることはあるまい。自己を描寫せよと云ふのは、自己を中心として、それをめぐる尤も手近かな、よく知つてゐる人を寫せよの謂である。斯うして、其の會話から活きた人間を掴み出して、くる習慣を養ふようにする。然らうさへすれば、自己から其の親近せる人、延いて其の他の人に迄も及ぼして、人間を寫す稽古が、だん／＼に出來てくるのである。

私は無論諸君の多くが將來文藝に携はる人々ばかりでないことを

信ずる。社會の各方面に雄飛して獨特の手腕を揮ふべき人々であることを信ずる。だから、私がこゝに文を語り、歌を語るにしても、努めて一般的たらしむことを期する。で、こゝに人間を寫すに、最も必要である會話の事を述べるにしても、直ちに小説を作る爲めのそれを説き明かすのみでなく、一般に人間を觀察し、其の言語動作を究めると云ふ上に、最も大事なことであらうだ。此の點について、諸君が世の各階級の人々の會話に注意して、其の性格、其の他を知ると云ふ事は、人間を研究し、世の中に處して行く上にも大事なことであると思ふ。

私は私の友達から斯う云ふことを聞いたことがある。友達の家は細い横町で、厠の窓が往來に面して居る。少々穢ない話になつて來たが、そこで或日の事、友達が厠で用を達してゐると、或る知合ひの人と人が出會して、そこに一場の會話が試みられた。何でも厠の窓のすぐ前での

立話だから、それが聞え過ぎる程聞える。會話はだん／＼佳境に入つて來た。丁度窓が明け放してあつたので、友達が立つて、其の窓から長い顔をニユツと出すと、折角佳境に入つてる話の腰を折ることになる。もう疾うに、用は済んでゐるのだが、立つにも立てないで、矢張り凝つと蹲踞してゐる。いや實に迷惑と云つたら無かつたさうだが、所在なさに耳を立て、聽いてると、二人の顔は見えないが、其の談つてゐる話や、其の聲色から推して、何のくらゐの年配で、何う云ふ階級の人であるか、解かる。延いては其の顔の表情なども分つて來る。さあ、さうなると、面白くなつて來て、とう／＼其の立話が終つて、二人が別れるのも知らずに聞き入つたと云ふことである。然うして、此の些つとした事柄が、人間を描寫する上に、益することが多く、此の活きた事實に依つて、新しい開發を得たと云つて喜んでゐた。臭い中に、長い間しやがんで、迷惑であつたには違

ひなかつたが、其の迷惑を打消すだけの收穫があつたことは、友達の確信して居る所である。

人間を研究し、人物を描寫しようとするには、會話の些末な點に迄注意して、單に其の會話を記述するだけでも、其の人間の特殊の性格を看取するように行き亘つた觀察力、注意力を養ふことが必要である。前にも言つたやうに、近來口語の隆興と共に、これ迄尊重されなかつた會話が、生きた人物を描寫する上に、必要な事柄となつて、小説を書かうとするものは、特に此の會話の研究が重視されて來た。從來の小説には地の文が重んぜられて、それから、篇中の人物や、いろ／＼の出來事を想察すると云ふ風であつたから、何うも、生きた人生が我々の目前に開けて來ない。丁度幕か何かで一重隔てた人生を通して、それが始めて我々の頭に來るのだから、切實な感じを受入れることが出來なかつた。尾崎紅葉

や、廣津柳浪や、小杉天外などの諸作家は以前會話の上手であると云ふことを以て、鳴つて居つたが、それでも今日から見ると、篇中の各人物の會話は紅葉式、柳浪式、天外式と云ふ風に、各作家の型に入つた人物は表はしても、其の各人特殊の氣分を交々伺ふことが出来なかつた。之れはつまり會話が一般から注意されなかつた故で、特に之に關した書物の出なかつたのが、其の因を爲して居る。然るに、近時『會話文範』と云ふ書物が、新しい様式に依つて論ぜられ、從來の缺陷を充たしてくれたことを喜ぶ。附録の「會話の書方」の中で、實際の會話と書かれたる會話の一章は、特に必讀の文字である。

本書は單に小説を學ばうとする人々の無二の参考書たるばかりでなく、廣く人間を研究する人々の讀物としても、非常に有益な書であると信ずる。

### (一九) 景色の纏め方

眞夏の午後縁に立つて、強い日の光りに輝いて居る空を見る。てらてらと鏡の様に日を反射し、久しく見て居ると眼が痛くなる。が、今日の様に氣をとめて空を見たことはない。藍色の濃い、繪に描いた熱帯の空を見るやうだ。廣い大空には雲の一ひらもない。何處を見ても、一つ藍色に光つて居るではないか。何處かに眼を休める白い雲の一片でもあつて呉れ、ばよいがと思つて、なほ見て居るが、それらしい影の浮んで來さうもないのである。

丁度自分の眼の眞直に行く空のもとに丘があつて、その上に何の木もだか高く茂つて居る。其の木に一ばいに茂つて居る葉は、強い日の光りを受けて、皆萎えるやうに俯向き加減である。

藍色の空のもとの高い一本の丘の樹空には火のやうな太陽が照り輝いて居る。見たまゝの材料を集めて來ると、自然にそれが景色となる。此の場合、作者はその景色に對し、面白いと感じなくてはならぬ。面白いと感じて始めてそれが歌になるのである。藍色の綺麗な空を見ても、ふりそぐ日の光りを見ても、丘に一本高く茂つてゐる大樹を見ても、何の感じがない人がある。然ういふ人には、あれはいゝ景色ぢやないかと言つても、いゝとも悪いとも感じないものである。それではテンデ歌を詠むべき資格がないのである。美しいものを見て美しいと思ひ、醜いものを見て醜いと思ふのは、人間自然の情である。それが無い人は、人間としての感じを缺いて居るのだ。

諸君の中で、歌や文を作らうと云ふ人に、然うした無趣味の人はないと信ずる。よい景色見れば、聲あげてその美を讚歎することゝ想はれ

る。今指し示したやうな景色を見たら、屹度あゝいと喜ぶと共に何うかして、あれをあの儘、人工を加へないで言ひあらはして見たいと希望するであらう。妄りに人工を加へた歌は、卑しく小さい、死んで居る、生き／＼と、自然の本當の色を表さうといふには、人間の猿智恵を出してはならぬ。

そこで、早速彼の景色を纏めにかゝる。纏めると言つても、こつちから一つあつちから一つと云ふ様に材料を寄せ集めて、一首にするのではなく、大略かぎられたる處の景色、即ち自分で面白いと感じたものを歌ふようにする。寫すべき場處をおほよそ定めて、それを詠むようにする。さうせずに唯大きい場處を歌に入れようとする。竟に中心點も何もない、ごた／＼したものが出來て仕舞ふ。例へば、最前の材料で言ふと、丘の木の高さが一つ藍色の空のもとにぞ著く見えける」と假に綴つて見

る。此の歌の缺點は一首に熱さうな處がなく、折角材料を指定して作るばかりになつてゐながら、それがいかにも不揃ひで、態々持つて來て、つなぎ合せたやうではないか。無論此の場合、作者はその景色に向つて居るのである、それで、斯う云ふ不手際なやり方をしては困つたものだ。詠み直して見る。そこで、いろ／＼考へた末に、左の如く詠み直して見たとする。

藍色の空のもとなる一もとの丘の大木のあつげなるかな

前から見れば、餘程よくはなつたが、それでも自身で興味を起して詠んだと云ふ所がなく、いかにもお役目で成程斯うすると歌になるものかなと始めて分つた様な風である。初めの間はそれでも仕方がないがその景色に對して面白味がなくて、は可けない。面白いが、材料の取り方に迷ふと言ふのなら、初心者にありがちの事だから別に咎めることはあ

るまい。

あつげなるかなと斷つて仕舞つては、もうそれ迄である。さう言はずに一首に熱い心持が貫いて居らねばならぬ。實景を凝つと視て、更に詠み直して見る。

藍色の空のもとなる一もとの丘の大木の萎えて動かさず

之れでは、別に前と變つた處がない。萎えて動かさずと改めたのは、著作として精一杯の處であらうが、萎えて動かぬ理由が説明されてゐないから、此の句は突然のものになつて了ふ。前にその句に對すべきものがなければならぬ。

藍色の空かゞやけりうち仰ぐ丘の大木の萎えて動かさず

斯う改めれば幾分目的に適つて來た様なものゝかゞやけりだけでは、極く熱いと云ふ感じを與へない。こゝが中々むづかしい處である。

藍色の空のかゞやき日の光り丘の大木は萎えて動かずとすれば、前の句が熱さうになつて來た。多少説明に過ぎた嫌ひはあるが、景色は目の前に見える、前數首に比べて、之れが出來て居る。

以上述べた所の事は、あれは歌になる景色だから詠んで見るが可いと、指し示されて、歌にしたのである。

今度は一步進んで諸君はめい／＼自分から景色を選んで、それに面白味を覚えなければならぬ。他から動かされたのでなく、自分から動くようになりたい。

で、その参考に迄言つて置きたいのは、或は景色に臨んで、それを面白と思ひ、歌に詠み入れようとする場合、困ることはその景色を纏める點である。その景色は面白いには違ひないが、何處から詠み出してよいか迷ふ場合があらう。多くの景色を手にかけて來ると、だん／＼コツが

出て來て容易になるものだが、初めの間は、何うして可いか分らぬ。そこで注意して置くことは、最初の景色について言ふが、先づ目につくのは、藍色の空である。その空の色だけでも、よく觀察すると、そこに美しい詩境を見出すものであるが、初心の間はそれが餘りに漠として捉へ處がないと言つた嫌ひがあらう。然らう云ふ或一つの物に對しての精細な研究は後に譲つて、今は景色を纏めると云ふことに考へて貰ひたい。即ち先づ藍色の空の下に丘があつて、その上に高い一本の大木が茂つて居ると云ふのは、他の普通の景色と違つて、すぐ人の眼に觸れる所である。藍色の空のもとと云ふことを定めて置いて、その次に一本の大木、丘、その大木に青葉が茂つてゐること、眞夏の強い日光を受けて、葉が萎えるやうになつてゐることを段々に觀察して、それを歌に詠む順序にする。諸君は此の方法に依つて、秋の野に出て、空の色及びその下の森なり、

川なり、草なりを観察して、それを歌にまとめて見るがよい。

### (三〇) 歌を詠む二人の態度

高く澄みわたつて居る秋の空のもとに、少<sup>ち</sup>かい或る二人が、それを見上げて、歌を詠<sup>よ</sup>まうとして居るとする。そこで、二人共その詠まうとする心持を異にして居る。

Aは空の高いのに對して、心の浩<sup>ひろ</sup>濶<sup>く</sup>とせるさまを詠まうとして、考へて居るし、Bは大空の下に在る自己の小さいのを感じて、それを詠んで見ようと思つて居る。Aは秋の晴<sup>はれ</sup>空<sup>そら</sup>は高く澄みわたると云ふ習慣から、然<sup>さ</sup>う詠めば、この景色をあらはし得るものと想つて居る。Bは秋の空のひろびろとして居るのを仰いて、ふいと自己の影の小さいのをわれと吾が意識<sup>いしぎ</sup>して、一種の淋<sup>さび</sup>しみを覺えたと云ふのにある。兩者の出發點は

根本から違つて居る。Aの方は舊派の歌を詠む人の考へを受けついで、古來の型<sup>かた</sup>と云ふものを脱し得ないのだ。Bの方の作者の觀方は、自己と云ふものが瞭<sup>はつき</sup>りと出<sup>で</sup>て居ると云ふ風に、諸君の中には確かに此二つの色分けがあると想ふ。これやがて諸君が歌を詠む上に生ずる二種の態度であるのだ。諸君の中には、何<sup>ど</sup>うしても、Aの如き態度を以て詠んで居る人が多い。自己と云ふものを卑<sup>いや</sup>しんで、一から十まで先人の跡<sup>あと</sup>を襲<sup>おそ</sup>はうとするのは、甚だ意氣<sup>いき</sup>地<sup>ぢ</sup>ない話である。覺<sup>おぼ</sup>束<sup>つか</sup>なくも自己と云ふ基礎をつくつて置いて、本當の自己を表はさうとし無ければ、眞<sup>まこと</sup>の歌を詠む人の態度<sup>たいど</sup>と言ふことを得ない。即ち、Bの如き、自己に感じた所のことを表はさうと云ふ態度を、本當の歌の出来る第一歩と心得てゐて貰<sup>もら</sup>ひたす。

そこで、Aの如き考へに依つて出来た作を左に掲げることとする。

秋空あきぞらの高さをながめわがこゝろ次第に澄みゆく如くおぼゆる  
 空高し雲一ひらもあらぬ空ただに高さをわれはおぼえぬ  
 など、秋空は高いものと云ふ因襲いんじゆく的習慣しゆくわんに幾分累かさせられて居るのを免れない。此二首などは同じ因よらはれて居りながらも、何處どこか活き／＼した所があるが、その甚だしきものに至つては、

空高くなりたるまゝに秋と云ふ感じを強く胸におぼえぬ  
 鶯うぶ高う空に舞ふ見てわがこゝろはたまた空を翔るが如し

など云ふ如き因襲的習慣から詠よんだと云ふ弊を脱しがたい作を見る。  
 一は秋空あきぞらは高いと云ふ意識が込み込んでゐるのと、今一つは高く舞ふ鶯うぶを點して、それを表あらはさうとしたものである。

斯う言つても、秋空あきぞらの高く晴れて居るのを、低く曇つて居るやうに詠めといふのぢやない。自己が本當に感じたのなら差支へない。所で、左の

如き詠み方を以てしたものは、何處どこから言つても、型かたに箝くわめられたと認めることは出来ない。新しみのある眞實の感じその事の直露が、蔽おほふ所なくあらはれて居るからだ。

野にいで、歌をうたへば空高う響く如くも澄みわたりけり

見上みあぐれば晴れたる空の高々たかたかとげに際涯かぎりなく響きてありけり  
 十分とは行かぬが、斯う云ふ詠み方をする作者は、慥たしかかに窮屈きうくつなく歌の境に動いて居ると云ふことを想はせる。諸君は一寸しても斯う云ふ風に詠んで貰もらひたい。これやがて作者の態度の眞面目まじめにゆつたりして居るさまを示したものである。

今度はBの心持になつて、いかに詠むべきかを考へて見る。

大空を仰ぎつゝふとわれと云ふ小さきものを見て哀あはしめり

空のもと行く人々の小さなる影をし見つゝわれもあゆめり



など、前のAの心持とはそこに大なる差異がある。彼は斯う詠むべきものだと云ふ習慣に依つて、自然を觀て居るが、此は自由なる、拘束なきもとに、自己の思ふところを詠んで居る。二者の態度は出來た作に死活のけぢめを生じて來る。Aの作の何處か生き生きとした所に、容易に其の然る所以を看取することが出來よう。

次に秋の花に對して、兩者の異つた感想を述べて見ることにする。

白萩のつゆふりこぼし吹きわたる風冷やかに身に沁む朝よ

と云ふのはAに屬する。白萩のさく頃の風は冷やかなものと云ふ習慣から、その景色を見ずにも容易に出來るのだ。つゆふりこぼしと云ふのは、いかにも冷たさうな景色だと、想はせるばかりの作に過ぎない。斯ういふ作は整はせるばかりの作に過ぎない。整つてゐても、活き／＼したものと云ふことを得ない。

若しこれが作者自身に深く感じた事實としたところが、此の著想は餘りに定り切つて居る。一首に新味と云ふものを見出し難い。作者の心持が特に出た歌とは認め難いのである。

然らば、これをBに詠ませたら、何ういふものが出來るだらうかと考へる。

庭の萩見つゝしをればふと風のおとづれ來り露こぼしけり

と平凡かは知らぬが、いかにも自分に觀たまゝの感じを歌つて居る。流るゝが如くに詠み下して澁滞するところが無い。

こぼろぎや褪せゆく花を弔へる歌の如くも啼きてあるかな

「とぶらへる歌」と云ふやうなことも、わるくすると厭味になるものだが、斯うさつぱりと詠み下せば、細工といふ感じを起させない。これもBの自然の態度から出來たものである。

若しこれをAに詠ませたら、何うであらうかと云ふ事を考へて見る。こほろぎは哀しき音になくうら枯れて花なくなりし小萩がう

れに

いかにも、こほろぎが悲しげに啼くと云ふ風だが、それはお詠へ向きたるを免かれぬ。哀しき音と花なくなりしとが餘りに際々しい配合で、他に強ひてしか感ぜしめようと云ふ缺點がある。これは作者が真に然う感じたのでなく、想像からこしらへたのであつて、一種の習慣である。諸君は作歌の態度に就いて、つとめて自由であれ。自己の感想を表はさうとする場合他に拘束せられてはならぬ。それと同時に一方に於て自己の修養に資する良書の繙讀を忘れてはならぬ。

### (二二) 力のある文章

近來文章の道が著しく頹廢して來たと云ふのは、識者の認める所であつて、然うして最も憂ふべき事柄になつて居る。其頹廢の原因は何處から來て居るかと云ふに、口語體の文が盛んになるに伴れて、喋舌べると同じ事がドシ／＼筆に上つて、それが文章になるのだから、之迄の文章に必要と認めて來た調子とか力とか修辭とか、餘り注意されなくなつて、たゞ達意と云ふ方面にのみ向ふやうになつて來た。中に文章上の約束とも云ふべきことを云々するものがあると、文字の末に拘泥して、形式で誤魔化すなど、難癖をつけたがる。仕舞ひには文章無技巧論など、云ふ極端な議論が唱道されて、粗雑な、ダラ／＼した文章を誰も彼れもやる。骨折らなくて濟むのだから、いゝ氣になつて口から放題の事を書きつけるやうになつて、文章上の約束を守るのは馬鹿らしいと云ふ傾向を生じて來た。自然派の作家等は一面に於いて其の責が

ないとは言はれぬ。内容があればそれで可いと言つて、相伴ふべき形式が粗雑であつたら、何てその内容の美を發揮することが出来やう。文章無技巧論を唱道した論者は文章を學ばうとする初心者、若しくは既に學びつゝある者を邪道に引き入れたのである。

口語體と云ふ形は自由で、ノンビリと意志を通ずることは出来るが、簡勁と云つたやうな、短かく力あるものは、餘程うまく書かないと、口語文に添はなくなつて來る。即ち書きよいに任せて、字句を洗鍊し、文句の取捨を嚴にしないからの、ほうづなく延びて、その果ては刈ることの出來ない雜草と選ばなくなつて來る。ダラシのない締りのない文章が多くなつたのは、全く此の口語體が累ひして居る。自由な形式であると共、にその形式を尊重して、善用しないから、斯う云ふ失敗が起つて來るのである。私はどちらかと言へば、口語文の讚美者であるが、讚美すると共

に約束を無視してはならぬと云ふ論者である。約束と云ふのは、甚だ漠とした語であるが、私は囚はれると云ふことを思ふて、規則とか定則とか言ふのを好まないからだ。約束は自然の約束であらねばならぬ。即ち自由の口語文に伴ふ必然の約束を言ふのである。

社會に規律とか秩序とか云ふものがあつて、その安寧を持続して行くと同時に、文章にも、此の約束が或る處まで守られねばならぬ。それを全く無視するからの、ほうづのない文章、だらしない文章が弘く行はれて、力のある締りのある文章が少なくなつて來るのである。形式に累ひされなくて、思想を發揮すると云ふ趣旨は甚だよい、併しその累ひされぬと云ふのは、全然無視せよと言ふのではない。うるさく形式にかゝづらつて、大切の思想が二の次になつてはならぬと云ふのである。無論思想が第一で、形式が第二である、それが轉倒しては甚だ可笑なもの

である。無技巧論が唱へられたのは、技巧を重視し過ぎる所から出たので、一時の激語であるのは言ふ迄もない。それを初心者は絶対にさうあるべきものと解して、無暗に書き放題に書くこと云ふ弊を生じて来た。力のある文章が、諸君の中に見ることが稀れて、終には何うしたら之れを書き得るか云ふ疑問の起つて来るやうになつたのである。想ふに之れはたゞに諸君の中の二三の人の抱いて居る疑問ではあるまい。

最初に内容を尊重して、形式の自由を欲する餘りに口語體の達意的なのを奨めたのであるが、筆端の緊約を計らなかつた弊は、竟に冗漫になり、粗雑になり、一言いつて、その事柄の表はれる所を、口舌筆の走るに任せて、二言も三言も言ふやうになつて来る。之れでは達意を通り越して意志の剩餘を來すやうになつた。さうして、其の果は、何處に一文の主旨があるか分らなくなつて来る。主として寫すべきこと、客として描く

べきことが、ごつちやになつて仕舞つて、捉まへ所がなくなつて来る。謂ふ所の達意の弊は、こゝに窮まるではないか。

力のある文章を得ようとするには、先づ冗漫に流れるのを防がねばならぬ。一篇の主旨を明らかにせねばならぬ。字々句々に、その内容が充實して、一點隙もないと云ふものを指すのである。然うしてこそ、作者の意志を強く文の上に傳へることが出来るのである。此の約束を無視して、徒らに達意達意と言つて、其の言ふ事に縮りがなくては、何て人を動かすことが出来よう。鬼神を動かすやうな離れわざは、吾等凡人の企圖する所ではない。たゞ人を動かすことが出来れば、吾等の願望は足りて居る。

力のある文章は、單に豪壯なものばかりではない。悲しみにも喜びにも、又大きいものにも小さいものにも、之れを言ふことが出来るのであ

る。つまり意思の充實、字句の洗練が、之れを得る所以である。吾等は短かくてもよいから、力のある文章を得たい。それには文章上の約束を遵守して、妄りに埒外に飛び出さうとはしまい。と云つても、或るほだしを造つて、諸君をそれへ縛りつけようとするものではない。前にも言つたやうに、或る自然に定まつた掟を守るべきものであることを告げようとするのである。

て、此の力のある文章は、何うしたら一番早く捉まへることが出来るかと云ふ問ひが、諸君の中に起つて来ようと思ふ。それは無用の語句を成るべく節約して、一言で、或る緊張した意味を言ひあらはすと云ふ位ゐるまでに、意味がその字句の上に乗るようにする。さうして、よくその文意を徹底させると云ふことが、之れに次いで、の要件である。餘り冗句を省かうとして、妙に堅く凝り固まつてしまつて、解釋に苦しませ

ると云ふのでは、折角文章を緊約して力あらしめようとした甲斐がない。是に於てか、第二の要件たる文意の徹底と云ふことが、主要の問題になつて来るのである。此の二つは、内容と形式とが相俟つて、文章の完きをを得る如くに、力のある文には、洵に須要な事柄である。

以上説明した所に於いて、諸君は斯う云ふことを學ばれたと思ふ。意思を自由に發表すべき必要から、口語體の文は尤もその處を得て居るが、それに伴つて、冗漫に流れだらしがなくなり、一篇の主旨を捕捉することが出来る。達意を目的として居りながら其の結果は邪徑を辿るやうになる。乃ち、内容の充實を計り、尤も多く字句の洗練を要して来る。力のある文章は、斯くして之れを得るに至るのである。文章は作者の人格の映つた象とすれば、力のない、へな／＼した文を作ると云ふことは、甚しき耻辱である。諸君は切にこゝに意を致されたい。

歌を作るのは、学校の教科書を読んで深く頭へ入れようとする類とは違ふ。何うしても作らなければならぬと云ふ性質のものではなく、作つて見たいと云ふ興味が先きに立つて、そこで出来るのである。だから歌を作つて居る諸君は誰れ一人作らうと心から思はぬものは無からう。然らう云ふ諸君に向つて、事新しく興味の話でもなからう。所で、これは私の考へ違ひか知らぬが、諸君の中には歌そのものから来る興味でなくて、他の興味の爲めに作つてゐる人もあらう。

歌を作るその事が面白いのでなくて、之れを作つて雑誌へ出して見たい。然らうして成るだけ多く出して貰ひたい。今月は「甲」の部に採つて貰つたが、來月は何うか「乙」の部に下りたくないものだ。來月は「甲」の部も末

### (二三) 興味から作ること

の方でなくて、初めへ出して貰つたら、何んなに嬉しからう。何うか佳い歌を作りたいものだ。然らうして優遇がして貰へたら、飛び立つ許りであらう。と云つた様に、子供臭く無邪氣な名譽心かも知らぬが、兎も角歌を一種の遊戯物の様に取扱つて居る人が多いと思ふ。だから、其の興味と云ふものも、甚だ頼母しからぬ興味なのだ。自分が本當に観て感じた事を歌にしようとするのでは無く、當て物でもする様な心持で、今度一つ當てゝやらう。此の前に斯う云ふ詠みぶりをした歌が「甲」の首位を占めたから、自分もあゝ云ふやうなのを詠んで、選者の意に投じてやらうなどゝ人のあと許り追うやうにして、其の中に興味を有つて居る人も見かける。諸君は歌を作る場合、何うか人の爲めにやると云ふことを考へず、自分の心持を歌ふのであると云ふことで、何處までも推して行つて貰ひたい。

人の爲めと云つても、誰々は斯う云ふ佳作が出来て羨ましい、自分はあれとは全て別な方面から材料を取つて、歌つて見ようと云ふ競争心を起して作るのも一種の練習である。例へて言つて見れば、甲の作が初夏の野を材料にして、

新緑の森かゞやかに目の照りていと快く眼を放ちけり

と云ふのを詠んで、それが佳作として雑誌に出て居つたとする。そこで自分も同じ初夏の野を材に取つて、何か一つ試みて見ようと云ふので、新緑の森かげに來て眼を放つ眞晝の野べの力あるかな

と作り試みたとする。内容は少し變つて居ても、前作の「新緑の森」目を放つと云ふ主要の語が、その儘入つて居るのは、模倣の痕が明かだ、彼方の作に従はうと云ふなら兎も角、競争して見ようとするには、同じ初夏の野でも、覗ひ方を異にせねばならぬ。前の作者と同じ場處に來て、同じ語

を遣つたのでは、殆んど此の作者の取柄と云ふものがない。然うして此の作者は恐らく其の場處に行つて詠んだのではなく、あの作を見て、それから想像して作つたものに違ひない。實景なら、いくらあの作が土臺にあつても、あゝ云ふ不手際なことは無い。作者が本當に興味を起して作つたものでないと云ふ事は、言葉の上にはばかり「力あるかな」と言つた所で、其の表はれた景色には、一向力がない。たゞ眞似じたと云ふのみのことである。

私は前に返つて斯う云ふ事を言ふ。それは、作者に興味を求めることである。諸君は歌を作る場合に面白いと思つてしなければならぬ。あの景色を歌にして見ようとか、此の心持を詠んで見ようとか云ふ心がなくて、たゞ人が作るから、自分も作つて見ようとか云ふ様に、人の爲めに作る位の馬鹿らしいことは無い。それも極く初期なら仕方がないが、苟も

観る景色が面白いとか面白くないとか材料の可否を批判し得る位になつたら、作の上に必ず興味が伴はなければならぬ。興味がなくて出来た作は造り花のやうなもので、凝れば凝る程生氣が抜けて行くのだ。そこで諸君の中に斯う云ふ疑問が起つて来るに違ひない。自分等は未だ物に對して歌に作つて見ようと云ふ興味を起したことがない、それで矢張り歌を作つてゐる。斯うして試つて居る間には、興味と云ふものが出来るであらうか何うかと。私は之れに向つて答へたいのは、何等の興味がなくて、どんな歌でも出来るものぢやない。本當の興味でなくとも、何か目的なしで出来るものぢやない。前にも言つた様に、自分の歌が印刷に附せられて見たいとか、佳い作を拵へて面目を施さうと云ふ風に、何か張合のあることがなければならぬ。雑誌へ投書すると云ふ事は、勵みになつて、進歩を助けるものだから、悪い譯はないが、歌を作る事

が單に雑誌に出す興味ばかりでは甚だ心細い。此の雑誌へ出す爲めに作歌の興味を呼ぶと云ふのは、根本が誤まられて居る。自分が楽しんで作つて出来た歌が氣に入つたので、それを雑誌に出すと云ふなら、毫も差支ない。自分の思想が滿天下の人に見て貰へるのだから、決して嬉しくないことは無い。自分と云ふ者が、世の中の何處にか存在して居ると云ふことを廣告するのだから、愉快でないことは無い。併し其の愉快よりも一層愉快なのは、興味を以て作つて出来た歌が、自分の思ふ様に出来た場合である。然うして始めて雑誌に載つた愉快なのである。

そこで、その興味を呼ぶ方法だが——それは各自自得しなければならぬ所であるから、立ち入つて言ふことは出来ぬが、——之れは物事に對する觀察が細かく注意力が行き亘らなければならぬ事だ。然うして、注意して観る事柄から面白いとか面白くないとか云ふ批判を呼んで



來るのが順序である。

諸君が若し未だ興味があつて作つたことがなかつたと言はれるなら、私はそれは物事を注意して観ないからだと言ふに憚らない。總て物事はよく注意して観ると、そこに今迄見得なかつた新しい事實の伏在するものだ。然らして、それから呼ぶ興味がしみる胸に感ぜらるゝのだ。

諸君に勧める、事物に對する觀察は出来るだけ精細であれと例へば、こゝに若葉の茂つた木が一本あつたとする。それに日が當つてゐるのを、たゞそれだけに見て仕舞へば、別に之れと云ふこともないが、若葉の色は浅い緑に明るい輝やかしい日が射して、その若葉は萌える様に光つて居る。日の光りも未だ夏の初めだから、それ程ひどくはない。併し、若葉にも日光にも、新しい力が籠つて居る。之れか二つ融け合つてそこに

出來た新しい別の力は、柔らかな中に元氣のいゝ處がある。……と云ふ風に一本の新樹でも少し氣をつけて見ると、そこに新しい事實が現はれて、従つて興味が出て來るものだ。私は繰返して言ふ、諸君は今少し事物に對する注意力を養はなければならぬと。

### (二三) 今の人々の秋の歌

秋は來ぬ杜にこもりて啼く鳥の澄みてするどき響を聴けや

——(窪川 空穂)

あの杜の中で啼く鳥の聲が澄んで尖つたやうな響を立て、居るのを聴け、秋の來たことが明らかに分ると云ふ意味である。周囲の乾びて來た空氣に響いて徹つた鋭い聲に鳥が啼くと云ふ感じが、よく秋の心持を表はして居る。澄みてするどきと云ふ強い引き締つた句を承けて、

結句の響をきけやが沈痛に聞かれる。

此の鳥は百舌などであらう。

初秋や暮るゝ草より十ばかり小鳥の立つを驚きし君(平野 萬里)

初秋の静かな野をわかい二人が黙つて歩いて居る。夕ぐれの事で、風がそよともない草の中から、十羽ばかり小鳥が飛び立つのを、女の方が、はつと胸を轟かせたと云ふのである。

初秋の夕ぐれの寂しい中に、萩の花の如くなよなよとした若い女性の姿が見えるやう。

萩の花はつはつ咲きて、蟬なく九月の二日母の日は来ぬ

—(興謝野寛)

萩の花が咲き初めて、こぼろぎが啼く。今日は九月二日で、亡き母の命日である。と云ふ意。すらすらと何と云ふこともなく無雑作に言ひ放つた中に、蔽ひがたい哀愁が籠つて居る。

九月二日は偶然に私の亡祖母の命日でもある。と云ふ所から、一層私にしみじみとした感じを與へる。

君去にてもものゝ小本のちらばれるうへに静けき秋の灯よ

—(若山 牧水)

今まで話し合つて居た友の歸つたあとに、或る小形の書物がちらばつて居る。その上に秋の燈がしづかに明るく射して居ると云ふのである。一首では、秋の灯が眼目であるから、秋の灯よと強く印象されるやうに言つたのだ。

懐かしい——そゞろ、心の峻られる作。

安らげき死にや急ぐと晩秋の空ゆく鳥に眼をとめて見る

——(尾上柴舟)

あゝあの物寂しい秋の末の夕空をゆく鳥よ、お前の寢床に歸るのを安らかな死場處へ急ぐやうな心地がして、思はず眼をそゝいて見るこゝとであるよと云ふのだ。夕と云ふ字がなくて、夕暮の氣分が一首に表はれて居る。

同情のあるこゝろさびしい作。

大馬の黒の背鞍に乗りがほの甥に訪はれぬ野分する家

——(與謝野 晶子)

野分と云つて秋の暴風の吹く日、大馬の黒い鞍の上にも乗りさうな様子をして居る腕白の甥がやつて來たと云ふのである。野分と云ふ荒びたものに大馬を取り合せ、更にその黒い背鞍に乗りさうな甥を持つて來て、一首に組合せたのである。奇想を以て勝る作である。然うして、わざとらしくない處が好い。

磯草にこほろが啼くやゆふ月の干潟あゆみぬ人五六人(同)

磯に生えて居る草にこほろぎの啼くころ、夕月のさして居る干潟——水が引いて陸になつた處——を男女うちまじつて五六人歩いて行くと云ふのである。複雑した景色をやす／＼と言ひ下して居る手腕を稱さねばならぬ。

病おほき身は死にもえずながらへぬ秋の初めの雲の静けさ  
——(武山英子)

多病でやるせなく暮してゐる身はいつぞ死んだ方がよいと思つても死ぬことも出来ずに悶えて生きて居ることであると、しづかな秋の初めの空の雲を眺めて、思ひ歎いた作死にもえずと云ふ所に、うら若い作者の心の悶えが酌まれる。秋のはじめの雲のしづけさと事もなく詠み下して、そこに言ひ難い哀しみを残して居る。

霧こめて雁が音寒し君とわが別れし夜半に似たる夜半かな  
——(佐々木信綱)

夜霧が白くこめて雁の啼くこゑの寒い川ばたで君と別れた時のやうな夜であるよと云ふ意別れた場處があらはされて居ないが、何うし

ても水邊であるやうに想はれる。夜半に似たる夜半かなと云ふのが、タルンで聞える。夜半を二つ重ねる必要はあるまいと想ふ。斯う云ふ餘裕があるなら、なぜ場處を指定しなかつたらうか。

秋の家たそがれごとの静けさにさしぐむ癖の人とありし日

——(土岐哀果)

「さしぐむ癖の人」と云ふのは、心弱い些つとしても涙ぐむ癖のある人の意。秋の家と云ひたそがれと云ひ、寂しい静かな自然と人事とに流るゝ気分は、よく此のさしぐむ癖の人を髣髴せしめ得る。洗んだ、たよりない追懐の歌である。

夜の市さびしき秋のうす紅の木この果みに通ふかの海の香よ

うす紅色の秋の果に、果物店の澄んだ夜の灯影が流れて居る。海邊の假住から歸つて来て、市の夜の色に接した作者の眼に、うす紅色の秋の果物が映つて、明るい冷たい匂ひが鼻へ來た時、ふと懐かしい海の香ひが、それに伴つて漂ひ來たと云ふのである。かの海の香ひは、ふいと起して來て、然うして一首を結んであるが、よく作者の氣分に融和されて居るので、些しも不自然を感じさせない。

—(前田 夕暮)

わが思言葉となるか秋の日の木犀に染みて香とかをる時

(窪田 空穂)

自分の思つて居る事が、秋の日に匂つて居る木犀の花の香に染みて、薫る時分に言葉となつて歌になるであらうかと云ふ意。五句の「香とか

をる時」が面白い言ひ方だ、二句の「言葉」となるか、も好い。全體があつとりとしてゐる中に、木犀の香を嗅ぐやうな、強い甘い君が歌の匂ひを深く味はせる。

水汲むと舟をよせたる秋かぜの淡路は晝もうつ砦かな

—(平井 晩村)

舟には貯へた清水がなくなつたので、丁度淡路島の近い所から、そこへ舟をよせて水汲みに上らうとする。島には秋の風が既に吹いて居て、晝の砦の音が、胸に沁みると云ふのである。固有名詞の入れてある歌は、多くの場合、作者以外の人には無意味に聞えやすい。所が、此の歌に使つてある「淡路」は、處柄、一首にふさはしい響を與へて居る。「晝の砦」と云ふ景物もよく聯絡してゐて、間に合せに置いたものでない。

ふりつゞく秋雨の音夜となれば前夜の如く又身には沁む

——(岡 稻里)

秋雨がまどくと今日も佗しく降つて居る。降りくれば夜となると、前の晩に身にしみたと同じやうに、雨の音が哀しく響くことかなと云ふ意である。前夜の如く又身には沁むと云ふのが、細いながら、哀しみを覚えさせる。

線の細い作は、一讀した時には、それと強く感じて來ないが、縷々として、つきない。然うして、それを懐ひ出して二讀三讀する間に味ひが出て來るのである。此の作者の歌にはすべて斯うした傾向のものが多し。

蟋蟀や四十二にしてはてませる師がおん墓の夕ぐれの路

——(與謝野寛)

之れは故落合直文先生を偲んで詠んだ作である。四十二歳でなくなられた先生の御墓へ行く夕ぐれのしめやかな路にこぼろぎが啼いて居ると云ふのである。別に何でも無い作のやうだが、讀めば讀む程一首の深い味ひが表はれて來る。

「こぼろぎや」と云ふやうな突如とした起し方も、「四十二」と云ふ没趣味になりやすい字面も、よく一首に調和されて、うす暗いものはかなさが切に味はれる。私の好きな歌だ。

以上は主として私が先年著した『和歌新辭典』の作例から抜いたものである。

## (二四) 『寒月照梅花』に對する聯想

『寒月照梅花』は新年の歌御會の御題である。從來の『新年梅』や『新年雪』などに比べて、詩趣を此の御題に覺ゆる。併し、其の詩趣は漢詩のそれで、廣い意味の詩趣ではない。寒月といひ、梅花といひ、漢詩の題材であつて、柔らかな優しい特色を有せる國詩の題材としては、決して詠み易いものではない。然うして題が幾んど内容を説明して居る。題だけで既にその意が悉くされて居る。之を三十一字に詠んで、歌意を活かす餘地がない。

寒月が梅花を照らすとは、よく二つの材料の調和を得て、清く高い、凜とした氣分を之から得られる。此の場合の梅は無論白梅である。白梅は春の花と言はうよりは冬の花だ。寒い玉の肌のような花は、見るから身に

沁みて、骨に徹る如き心地がする。そこへ寒月が、冴えに冴えて鋭利な刀の様な光りを浴びせるのだから、一層の寒さを想はせる。一國の士風頽廢して、人心舉げて奢侈安逸を欲し、相率ゐて利慾の巷に走るが如き時に方り、此の御題の心を想うて、深く反省しなければならぬ。此の點から考へて、聖旨のある所を愈々尊重すべきである。

私は此の御題に就いて、懐かしい回想がある。それを諸君にお話ししようと思ふ。今から二三年程前、私が東京の西郊大久保村に閑居して居た頃のことである。さる著述に従事して、寒夜の更くるをも知らずに夜々筆を執つてゐた當時の事興に乗つて幾枚ともなく書き飛して、一句切りついた時、急に肩の凝りが著しく感ぜられた。肩をたたき乍ら、ひと身に迫り來る寒さを、かたへの火鉢に寄せて、ふと見る窓の障子が白く雪でも降つたあとの様に明るい。寒さを忘れて手を伸して、障子を明

けると、空には一團の明月が鏡の如く照り渡つて、邊りが雪夜の様に明るい。そよとの風もないが、冬の深夜の空氣は霜の如き月光に混じて、耳も鼻も頬もちぎれる程寒い。葉が落ちては枯木のやうな木立があらはに冬の月を浴びて、一きはの寒さを覺えさせる。庭の面に眼を遮るものとしては椿の木が深緑の葉の堅甲をつけて、籠り合つてゐるのみである。荒涼、目もあてられぬ處を照して、月の心は、たゞに寒く冷たい。之れがいまに春になると、朧ろに霞んで、溫柔の氣分を與へようとは何うしても想はれぬ。かくして、一年も二年も永く續いて行くやうに想はれる。あゝ寒い、寒くてならぬ、もう障子を閉めようと思つたが、餘りに凜とした光りを放つてゐるのを見ると、何か斯う反抗心が起つて来る。寒いのを堪へて、なほ凝つと視てゐると、俄かに薄い芳ばしい香ひが鼻を衝く。花の香ひである。想ひがけないので、何の花の香ひであらうと惑うて居ると、

其の芳ばしい香ひは、だん／＼加はつて来るやうだ。飢ゑた人が物の養える美しい香ひをかいで、堪らず心をときめかす如くに、今の飢ゑた心には、それが何の花であるかを知りたく思つた。

ふと彼の椿の木の傍にそれより小さい梅の木の立つてゐるのを認めた。然うして、その梅の木に瞳を凝らすと、枯れて死せるが如き枝に、ところどころ白い花を著つけて居る。障子を鎖して、此の二三日戶外に出なかつた私は、梅にもう蕾がついて居たのを知らなかつたのである。私は心ゆく限り、その薄い花の香を嗅がうとした。心にくい月光に對する反感を之れから償はうとしたのだ。

氣のせぬか、梅花の香りは愈々加はつて来るやうだ。月の光は益々冴えて来る。萬籟死せるが如くに静まり返つて居る此の天地に活きて覺めてゐるものは、月と梅と私と此の三つに限られてゐるやうだ。思はずも窓



際まぎにゐざり寄つて半身を戸外に出してゐた私の全身は、氷の様に冷え切つた。かじかんだ手で辛からくも障子をしめて、火鉢に頼たらうとしたら、火鉢の火は大方灰になつて、その灰も冷つめたからう。呼ぶべき婢むすめは既に熟睡してゐる眞夜中である。私は手をふところに入れて、僅かの温あたたかみを取らうとした。然さうして靜かに瞑めい想さうする。

眼は斯かう瞑とぢてゐても、決して眠つては居らぬ、しかし既もう眠つてゐるも同じことである。あゝ此の死せるが如くに眠つて居る萬象の中に活きて、くわつと眼を開いて居るものは、たゞ寒月と梅花とのみではなにか。私は斯かういふことに想おもひ到つて、今更の如く此の深夜の情調じやうてうを力ある懐かしいものに考へた。今はもう反感どころでは無い、此二つの覺めた光りと香ひとに包まれて、靜かに安らかな天地を想うて、ゆつくり眠らうとした。寒月と梅花と、そこに二つの抱かか合あした清きよい高たかい寒さむい氣分

を想おもひつゞけて、快く曉近い夜を寢いねた。

寒月と梅花とは配合の妙を得たもので、此の二者を合せたものから受ける快感は、恐らく冬の景物の中で、之れに越こした味ひのあるものはない。前にも言つた様に、寒月梅花を照すと云ふ題材だいざいだけで、聯想は十分である。然るに此の題材を使つて、その内部に含まれて居る意味を活いかさうとするのは、如何いかなる詠み方をしたら可よからう。併し、こゝに述べべき所ところのことは、此の題から受ける美感や聯想をお話はなしするに在るから、諸君は其の積りて、私の話を尙少しく聽いて貰もらひたい。

古來の歌を檢しらべて見ると、梅花に配合する月は多く春のそれであつて、寒月を配あけたものは稀まれである。

誰たが園の梅の花をも久かたの清きよき月夜にこゝだ散り來る

梅の花誰が袖ふれし匂ひぞと春やむかしの月に問はゞや

(通 具)

大空は梅のにほひに霞みつゝ曇りもはてぬ春の夜の月

(定 家)

梅が香にさゝぬ外面をから猫の忍びてすぐる夕月夜かな

(蓮 月)

の如く、其の大部分を占めるものは春月を配した歌である。寒月と配しては硬くなり又強くなつて、國詩で詠み易くないと云ふのが、其の詠歌の極めて稀れな所以である。漢詩の題として洵に恰好のものであるが、既に斯く御題となつて表はれた以上は、其の難かしい、先人の手を著けなかつた所を啓いて、新しい御代の歌として耻づかしからぬ作を詠進

せねばならぬと想ふ。(明治四十四年一月)

### (二五) 徹底と云ふこと

諸君の文章をいつも讀んで感ずることは、徹底と云ふことを缺いて居る一事である。徹底とは文章の意味が一篇に貫き徹つて居ることである。作者の心持が一篇に充實して然うして何處と云つて曖昧のないことである。文章の専門家でも、此の一義に戻つて居るものを書く人が多いのだから、諸君にのみ兎や角言ふのは、少しく酷かも知れぬが、苟くも文章を研究しようと云ふ者が、誤りを誤りとして傳へて行くことがあるものか、文章家ともあらうものが、然う云ふ弊のある文章を書いたら、自分はそれを嘲り笑ふ位な意氣がなければならぬ。然うせずにあゝ云ふ先生でも免れ難いものだから、自分のやうな初心者は仕方がないと

自ら卑下し過ぎる人が諸君の中にあるかも知れぬ、そんな意氣地がないこととて、到底文章の奥を極められるものぢやない。諸君よ、諸君は、自分の文章を書いて居る筈ぢやないか。自分の心持を思ひ／＼に出さうとして居るのぢやないか。それなら、他を顧みずに、自分の往くべき一路に猛進しなければならぬ。

そこで、諸君の文章に徹底を缺いて居るものが多いとは何を以て言ふのか。それは、前にも言つた様に、意味が徹つて居ないことだ。想ふに諸君の多くは、或る一文を書かうとする前に、其の文を形造る要素を考へることに粗漏である様だ。つまり用意が足りないと思ふ。熱心が缺けて居ると想ふ。例を擧げて言はうなら、こゝに蟬のことを書くとして、唯蟬がミン／＼暑さうに啼いて居ると云ふだけのことを、ぶツつけに書いた所が面白くも何ともない、書く前には準備を要する。何を書いてよい

か、先づ第一に何、第二に何、第三に何と順序を立て、敘述して行けば、書くことにキマリがついて、自然に意味が通つて来る。こゝに始めて文章に一番大事な精透と云ふことを得るのである。

蟬を例に引いたから、之れに關する一文を形造つて見ることにする。  
 (一) 蟬がいつか啼き出した、眞夏になつたなと氣がつく。ジリ／＼と照りつく様に啼く。昨日始めて窓の梧桐に來て啼いたが、今日はもう幼い可憐な聲ではない、立派な蟬になつて居る。

(二) 靜かに讀書しようと思ふが、どうも蟬の聲が煩さく耳について堪まらぬ、書中の意味を靜思することが出來ない。室を更へたが、矢張り耳について思ひを澄ますことが出來ない。

(三) 午後になると、一層烈しくなつて來た。中々初蟬どころぢやない、憎らしくてならぬが、何うもまやうがない。すると、何時の間にか、さしも烈し

かつた聲が、たと歌んだ。同時に子供の聲がする。裏の木戸を明けて、近處の子供が蟬を取りに来たらしい。通したか捕つたか、どちらだなどと考へて居ると、捕へられた蟬の悶ぐやうな聲が、けたましくする。確かに五六疋はやられたなと微笑する。これでよいと、書物を讀み出す。

(四)二三時間経つと、又啼出したが、今度は一二疋なので、餘り耳に障らない、然うして餘程臆して居るらしい、安心して豫期した所まで讀了つた。夕方になつて五六疋位で啼き立てたが、もう讀了つた後なので、邪魔にならぬのみか、其の啼き聲に一種の音樂的の調子を感じた。

以上書くべき事柄を四通りに分けて、それから一文に組み立て、餘計な事柄を省き、言ひ足らない事柄を補ふようにする。然うして出來た作に始めて作者の言はうとする心持を貫き徹らせることが出来るのだ。諸君は或る一文を書かうとするに當つて、之れだけの準備をしてか、

るであらうか。文意を徹らせると云ふことは、文章の奥義でも何でもない。文を作らうとする者は、その初心なると否とを問はず、皆一樣に此の約束を守らなければならぬ。

文章の批評に、徹底しない文だと言はれる位、不名譽なことはあるまいと思ふ。何か書いてあるに違ひないが、讀み了つて何等の感銘をも與へられない文章がある。之れなどは徹底しないもの、極である。書いてあることは幼稚でもよい、拙くともよい、たゞ作者の書かうと思つて、ることが、一文に行き渡つて居れば、文章の第一義は達せられて居る。初めはそれでよい、初めから佳いものを作り上げようとするのは間違ひである。意を達することを以て、目的を遂げたものとせねばならぬ。

前に返つて、彼の蟬の文を一篇に纏めて見ようと思ふ。(一)から(四)に互つて居る事柄を順序立つて纏めて見ることにする。

『蟬が啼き初めたのは昨日であつた。初蟬だなど可愛らしい感じか起つたが、今日はそれ處ではない。朝早くからみん／＼と煩いこと夥多しい。静かに讀書しようと思つてゐるに、斯う騒がしくては堪まらぬ。室を更へる、矢張り耳に付き纏つて離れない。午後には一層喧しくなつて来る。困つて居ると何時の間にかはたと歇んだ。同時に子供の聲がする。子供に捕られたなと思ふ。子供の手で蹴く聲は確かに五六疋がものはある。これでよいと安心して書を読み出す。しばらくすると又啼き出したが、今度は一二疋で、その聲はいかにも微弱である。夕方には四五疋になつてやゝ高く啼き立てたが、書物は既に豫定の處まで讀み了つた後なので邪魔にならぬのみか、却つてそれに一種の音楽的の調子を感じて、静かに夏の夕べに對した』

準備事項たる四箇條は此の文中に綴られて、兎も角一文に組み立て

ることを得た。少し冗い處はあるが、一文の意味はよく徹つて居る。之れを讀んで意味が不明だと言ふ人はあるまい。巧拙は別問題として、此の作者の感じは確かに出て居ると思ふ。

蟬に似て、形小さく色青き蟲に蝸がある。これは夏の末から啼き出して、秋の初めにかけて涼しい爽やかな聲で啼く、明け方など此の聲を聴いてると、清い寂しさとも言ふべき感じに打たれる。蟬の聲の濁つてがや／＼と喧しく非音楽的なのに引きかへ、此れは清んで微妙な音楽的興味を感じる。二者の間には感じの上に大なる徑庭がある。然るにそれを辨まへないで、二者を混じて、その特性に區別をつけなかつたら何うであらう。

『眞夏の暑い日盛りに蝸が啼いて居る。がや／＼と非常に煩さい。之れに似て蟬といふ蟲が居るが、此方は聲が詩的である、清い寂しい聲で啼

かれると、自から涙が出て来る』  
 と云ふやうな文が書かれてあつたら何うであらう。之れなどは事項が  
 反對になつて居るので、讀者は直ちに誤りと云ふことに考へが行く、そ  
 こで作者の無識と云ふことを考へて、思はず嘲りの笑を浮べずには居  
 られまい。事實の誤りから來る文章の不徹底はお話にならない。

(二六) 日課に歌を詠むと云ふこと

日課に一首なり二首なりをその日／＼に見聞した事柄から材を取  
 つて書きつけて行くと言ふ方法、之れが歌の上達を計る必要なもので  
 あることを話さうと思ふ。

單に毎日無意味に幾首必ず作つて行くと言ふやうなことは、作者に  
 取つて甚だ苦痛である。それでなくても、初めの間は詠みづらいものだ、

何う詠んでよいか分らぬものだ。或る題を定めて、それから想像を呼ぶ  
 と云ふ方法は、想像力の養はれて居らぬ初期の研究者の頭を苦しめる  
 ことが多い。

で、然ういふあてのないものを考へ出して行くのではなく、その日そ  
 の日に有つた事をつかまへて、それを歌にしようと云ふのは、事柄に興  
 味もあることだから、不知不識の間に一首又一首、それからそれと、事柄  
 を選ぶのも巧者になり、詠み方も自由になつて行くのである。成るべく、  
 その日／＼に或る事柄を捉へて之れを歌にして行くようにしたいが、  
 何うしても詠んで行かぬばならぬと云ふ定りは無い。詠むべき事柄が  
 なければ、それを強ひて作り出すと云ふ無理算段は要らぬ。然ういふ場  
 合は、「この日歌なし」と書いて、それで済ませる。併しそれは特別の場合に  
 限る。毎日歌なしでは困る、何か歌にする材料をつかまへて、練習を続け

て行くようにするのが肝心だ。

同一の材料、即ち昨日詠んだものと同じ材料でも、今日見れば、昨日考へつかなかつた観察も新に出て来るものだ。然う云ふ場合、單に同一の材料を繰返すのが無意味であると考へずに、昨日言ひ足らなかつたことを今日補ふと云ふ風にする。之れは自分の思想観察を練るのに良い方法である。

例へば、こゝに躑躅の花が咲いて居るとする。それを昨日は斯う詠んで日記へ録して置いた。

くれなるの躑躅の花に黄なる蝶一つ来りて去りあへぬかな  
今日もまたその花に對して、見てゐると、矢張り昨日と同じ蝶が来てとまつたり離れたりして、いかにもその傍を去りかねて居る風だ。凝つと見てゐると、昨日とは變つた感じが浮んで来る。即ち同じ材料を持つて

来ながら、その觀方が違つて来る。何う違つて来たか、左に示して見る。

黄なる蝶醉へるが如しくれなるの躑躅の花のうすき匂ひに  
と云ふやうに「醉へるが如し」とか「うすき匂ひに」とか、前の歌に見なかつた作者の細かい心持が加はつて来た。これ昨日と今日と感じの異なる所で、やがて又一步進んで来た證據である。即ち、立ち入つて、その事柄を見ようと云ふ、作者の新しい研究のあとを窺ふことが出来るものである。

斯うして同一の材料を取扱ひながらも、その表はし方が違と云ふ風に、だん／＼工夫して手際を進めて行くのは、作歌の上に非常に有益なことである。必ずしも日々異つた材料を捉へようとしなくとも可い。同じ材料で、いくらでも觀方を異にして行くことが出来る。わざ／＼新しい材料を捉へようとして、あくせくするよりも、却つて此の方が自然

に進歩するものである。それには根氣即ち熱心が必要だ。

諸君には此の根氣即ち熱心が乏しいやうに想ふ。今日考へてうまく行かなかつたことを明日まで持ち越して、新しく考へ直さうと云ふことを志ないやうだ。今日考へて旨く行かなければ、それなりにして、其の事柄に深い執著心を持たうとしないらしい。だから、その作つたものが何うも徹底して居らぬ。折角面白い材料をつかまへても、それを發揮せぬに済まして仕舞ふと云ふ弊がある。

斯う云ふ弊を救ふ爲めに日記の歌は諸君に自由な練習場を與ふるものと言つてよい。思ふやうに行かなかつたら、幾日でも持越して、然うして飽くまでも同じ材料を取つて研究させる。一日／＼に或る新なるものを其材料に注いで行くと云ふことは張り合ひのあるものだ。一日野に出て見る。野はいつか目のかぎり青い夏の景色になつて居る。今日

の日記にしるす歌の材料をこゝから求めようとする。

目のかぎり青き野に立ち夏すでに來りしことを覺えぬるかな

あゝ五月わが好ましき夏は來ぬ覺えず野をば走りても見つ

斯う詠んで、その次の日に又同じ野の同じ場處に來て更に詠み試みて見る。

目のかぎり青麥の穂の海の如き廣野をわたる風を見るかな

初夏のうす緑なる野は前に開けぬわれは走らむとしぬ

など材料が幾分複雑して來た。初めの歌は、前にはたゞ「青き野に立ち」と云ふだけであつたのが、「青麥の穂の海の如き廣野」と景色が明かにあらはされて來た。次の歌も前には「覺えず野をば走りても見つ」と云つて、その動機が明かでない。うす緑なる野は前に開けぬとあつて始めて其の「走る」と云ふ事が切になつて來るのである。前日の歌と次の日の歌と比



べて見ると明らかに前に詠み足らなかつた處を補つてある。出來ばえのよしあしは別として、研究の歩を進めてあるのは事實だ。斯う云ふ風に、同じ材料を深く觀て行くことは、進歩の實を擧ぐるものだ。

以上の例は外界の事柄を材料に取つたものであるが今度は作者の心に入つて、昨日と今日との心持の違ひを寫して行く方法を述べて見よう。

もの見ればたゞにかなしくわれながらあやしき迄に思ひける

日よ

と云ふ歌を昨日かきつけて置いたとする。ものかなしかつた昨日をあやしむ迄に今日は晴々と氣持がよい。それを書きつける。

わが心今日は晴れたる空の如くそのいづこにも暗き影なし

斯う云ふ風に心持の變化して行くさまを日々かきつけて置くのは、

其の端書の文章と共に後から見ておもひでの深いものである。然うして自分の心を寫すのに自在ならしめる習慣を養ふことが出来る。

人われにそむきぬされどわが心餘りに弱くにくみもあへず

わが心次第に暗くなりまさる生きながら人と別れてよりは

ふたゝびは見じとかたみに言ひかはし別れし時のふかき悲哀など幼稚ながら作者の心を割つたやうな作は、抒情の歌の基礎をなすので、日記の歌の効果ある處だ。

### (二七) 長文短文

——(某誌の短文を選した後に)

文章に於ける口語體の勢力は、今や一般に普及したと言つて可い。時に従來の文語體で書いたものを見ると、妙に究屈な感じがして、一種異

様の感に打たれる。少し大袈裟な言ひ方かは知れぬが、故人に逢つたやうな感じがする。驚くべき變化と言はねばならぬ。小説に、評論に、叙事抒情に、行くとして可ならざるはないと云ふ有様である。しかし之に伴うて戒心しなければならぬ點は、冗長に失する事である。達意と云ふ目的には適つて居るが、野生の草木の伸び放題伸びて、緊約を缺き、莊重の氣を失ふ如く、文章に重みがなく、權威のないものが出来るのである。舊形式を破壊して凱歌を揚げた口語體は、自由で書きよいと云ふ所から、ほうづなく誰の筆にも上つた。一寸一言言つて濟む所を二言も三言も云ふやうになるので、勢ひ、煩瑣に堪へなくなる。口語體を歡迎して自由の書き方を喜んだ作者及び讀者は、早くも倦き氣味を呈して來たやうである。

口語體は親しむべきスタイルである。心易立てに流れる文體である、

謹嚴を主とし、或は感慨淋漓たるものに至つては、口語體のよくし得ない所がある。例に引くのは恐れ多いが、勅語が若し口語體で書かれたら何うであらう。あの尊嚴な襟を正さしめる氣分は逆も得られまい。又弔文を同じく口語で書き綴つたら、あの悲壯沈痛な心持は書き表はし難からう。絶対に書き得られないと云ふことは出來ぬが、現在の口語體の有様では、到底不可能の事である。盛んに口語を唱道した人々は意外の普及を見て、満足して仕舞つて、之れを進歩發達せしめると云ふことに、甚しく冷淡の様である。肝心の研究が等閑に附せられて居るのは、甚だ残念な事である。

併し乍ら從來の究屈な形式に囚はれて、ギョツチない文章を書くのに比べれば、此の自由な達意的な口語體の文は確かに各自の伸ぶべき文才を恣まに伸びさせるもので、將來の文運の爲めに慶すべき新文體

であるのは言ふ迄もない。所で、之れを隆興させる爲めに、先づ第一に企圖すべきは、冗長の弊を防ぐことである。文章は長文でなければ立派と云ふ譯のものでない。文章の價値は、長短に依つて決せらるべきものではないことは、論を俟たぬ所だ。然るに、斯道の初學者は、短文を以て幼稚の如くに解し、長文を作らう作らうとする傾向がある。文章の妙不妙の岐るゝ所は、要するに其の内容の如何に在る。貧弱な内容を以て之れを豊富に見せようとし、長篇大作の如くに繕はうとするから、鉛細工のやうな、内容の空虚なものが出來上るのだ。而も初學者は之れに心づかず、十枚書いた、二十枚書いたと言つて、徒らに其の枚數の多きを同儕の間に誇り、自己の文才の著しく進歩したことを喜ぶ風が見受けられる。之れなどは甚だしい心得違ひである。が、私は初學者に向つて絶対に長文を書くなと勧めるものではない、長文の内容があつて、之れを相當の長

さに書いて行くなら差支へないが、短文の内容しかないのに、徒らに長く／＼と書き延ばして行くやうでは、自己の思想を充實せしめる時がない。文章として思想の貧弱なのを見る位、みすぼらしいものは無い。之れは口語文の書きよいのに任せて、自己の思想を揣らずに書き飛ばすから、斯う云ふ醜態を演ずるやうになるのだ。之れは確かに口語文の書き方が完整されて居ないから、一面の責任は口語文が負はなければならぬ。

私は諸君の文章を見る毎に、徒らに長からむことを競うて、筆致の冗漫に流るゝのを認めるので、之れを矯正する手段の第一に短文を募つて、筆端の緊縮を計り、内容の充實を奨めようとした。集まつた數は非常に多かつたが、特に看るべき作は殆んど一篇もなかつたと言つて可い。然うして本號に發表したものは、投稿の數の二十分の一にも當らない。

のである。私等は豫期に反した不成蹟に失望した。即ち比較的<sup>ひかくてき</sup>可なるものを抜いて、僅かに<sup>わづか</sup>二等三等を附したのである。

三題の中で、初春のスケッチが一番作りよかつたと見えて、最も多數であつた。隣家の人之に次ぎ、五分間の記事が一番少かつた。初春のスケッチには因襲的<sup>いんしよてき</sup>の作が多く、五分間の記事には態々<sup>たいたい</sup>事を構へた作が少なくなつた。唯隣家の人の中には、状景躍動<sup>じやうけいやくどう</sup>するものがあつた。私等は、此の成蹟を見て、因襲的の事及び態々構へた事に冗漫に流れた作が多くて、實驗を主とするものに比較的<sup>ひかくてき</sup>緊約<sup>きんやく</sup>した作があつた。諸君の平生の作に想ひ及んで、此の一事を具體的<sup>くたいてき</sup>に諸君に警告し得たことを喜ぶものである。

### (二八) 作歌と初期の修養

——(某誌の投書の歌に就いて)

自分が本誌で諸君の歌稿を閲し初めてから今日迄では、尠<sup>すくな</sup>からぬ歲月を経過したことである。諸君の歌の思想も聲調<sup>せいてう</sup>も大分變つて來た。無論善い方に變つて來たのであるが、其れは要するに一部の士に見る所で、大部分は矢張り幼稚を極めて居る、陳腐を極めて居る。成るべく一人一首と云ふ規定で、多くの人々に満足を與ふるようにと、選拔<sup>せんぱく</sup>し修正するに務めて居るのだが、中には箸にも棒<sup>ぼう</sup>にもかゝらないものがある。讀んで行く中に眉を顰<sup>ひそ</sup>めしめる作が多數を占めて居る。或る人のは二十五字しか無い、或る人のは三十八字もある。俳句かと讀んで見ると然うでなく、小品かと思ふと、それでも無い。眞面目<sup>まじめ</sup>に歌を作らうと云ふ心持は無く、出鱈目<sup>でたらめ</sup>に書きさへすれば可いと云ふ態度であるらしい。なあ

に、こんな物でも、出しさへすれば、選者が何うかして呉れるだらうと云ふ様な無責任な遣り方で、幾首でもこしらへる。こしらへるので無く、たゞ書きなぐるのだ。甚だしきは、古人の作を丸抜きにして、立派に自分の名を名乗つて居る人もある。何う云ふ古人のが多く出されるかと云ふと、今迄一番餘計見掛けたのは、本居宣長翁の例の「朝日に匂ふ山櫻花」である。何う云ふつもりだか分らぬ。可笑しくもあれば、腹も立つ、言ひ立てると際限が無いが、之れは要するに諸君の身邊に然るべき指導者を缺くからである。諸君いかに賢なりと雖も、生れながらにして、其進むべき順序を知得することは出来ない。如何なる天才の士でも、一通り學ばなければ、決して其天賦の才能をあらはすことを得ない。之れは古今の天才の爲來つた事に徴して分る。天才は一層刻苦精勵して居る。自己を發揮せむ爲めには、随分苦しんで居る。然うでなければ、斷じて本當の天

才を發揮し得られない。小才、小器用に己惚れて修養を怠り、天才の士は區々たる修養より益せられることは無い、予が天分を見よと云ふ調子で掛つて來られては堪まらない。幸にして諸君の中にさう云ふ亂暴な人はあるまい。指導者がないので、事ここに至つたものと想つて可い。指導者を無視して、自己を尊重するやうな事はあるまい。歸する所は、確とした據り處が無いので、それさへあれば喜んで就くに違ひない。自分の身代りと云ふ格で、諸君の机上を訪はうとして出たものに、先づ『和歌入門』があつた。しかし、之れは極く初學の士の讀むべきもので、之れだけでは中々物足らない。何かもつと、詳しく順序立て、書いたものが無ければならぬと云ふので、先年『和歌新辭典』を世に問うた譯だが、之れは前のから見ると、ずつと密に出來て居る。新しい歌を作らうとする人、又現に作りつゝある人は、必ず此の一本を備へなければならぬと云ふ意氣込

で、多くの勞力を之に盡したのである。出來て見ると、未だ不十分の點はあるが、初學の士を益することは尠なくないと信ずる。諸君は各自此の一本を藏して之から作歌の資料を得ることになつて居るが前に述べた通り、諸君の歌稿を閲して、何うも本書の影響を受けて居ると認められるものが少ない。持つては居るが、それを活かして使ふことをしない、ちやんと飾り物にして、些つとも動かしたくないと云ふのではあるまいか。諸君は年少氣銳の士である、そんな隱居さんじみたノンキなことはあるまい。諸君は何うか今少し自分の著書に親しんで貰ひたい。

自分は今諸君の歌稿を閲して、左の如き一首に出遇つた。

春の夜の川しろじろと月かけを受けてななかれぬ草野のな  
かを

一寸見ると、調子がすら／＼として、穩かな叙景の作のやうだが、再讀三誦すると、季節が不分明になつて來る。「しろ／＼」と云ふと、其の月かけの皎々たることが分る。春の月は打ち霞んで、おぼろ／＼として居るもの。「しろ／＼」と云ふやうな瞭りした色を呈するもので無い。夏か秋——寧ろ秋の趣である。それから五句の「草野」も、春の小草の生えて居る野と云ふのでなく、草長く伸びて居る景色、即ち夏か秋であるか、一首のシンミリした心持からして、夏でなくて秋である。

秋の夜の川しろじろと月かけを受けて流れぬ草野の中を

として、適切に感じられるが、作者は、春の夜の景色を歌つたものである以上、然う全く改められては、詠んだ作者の立場から言つて、決して名譽のことぢやない。作者が若し、まかく景色を觀て詠んだものとすれば、作者の觀察眼は、自然の特殊の感じを無視して居るものと言はなければ

ならぬ。假りにも景色を寫さうと云ふものが、四季の景物の特別の感じを見分ける能力のうりたうが無いやうでは、その資格しきかくを缺いてゐるのだ。春の月と秋の月との感じのちがひも、容易に分明すべき筈だが、仔細しさいに立ち入つて他の景物との連絡を計るやうになつて來ると、何うしても其方法等につき、修養を要すべき事は無論である。「和歌新辭典」は斯う云ふ場合に於ける指導の任を盡つしたつもりである。即ち春の夜、夏の夜、秋の夜とそれ／＼に異なる景趣を明示してある。毎月集まつて來る歌稿の中で斯う云ふ區別を混同こんどうした例が多い。これ、確かに何の據よる處もなく、幼稚の頭あたまで大ざつばな觀方をしたと云ふに過ぎない。本辭典を熟讀し、其のそれ／＼の條下に於いて、特殊とくしゆの景趣を味ふべきである。即ち先づ「春夜」(和歌新辭典一四頁參照)から初める。類語るいごを検すると、「おぼろ／＼の夜となりて」灯かけ霞めり「晝に見し物の姿の」うす曇り空の遠方とちかたなど、春の夜の特別の

景趣を表した物の多いのに心づく。此等の類語から延いて、いろ／＼の聯想れんさうを生じて來る。假に之を綴つて見ようなら、先づ「おぼろ／＼の夜となりて」を二句三句として「灯かけ霞めり」を四句に置くことにする。これ一首の大半たいはんは出來たものと言つて可い。後の問題もんだいは初句と五句とにある。初句を「野はいつか」と置き、五句を「遠とちの一つ家」と据ゑて見る。左に一首に書き直して見る。

野はいつかおぼろおぼろの夜となりて灯かけ霞める遠の  
一つ家

もとより佳作では無いが、自在に一首にまとめて、春の夜の特に有する景趣を言ひあらはして居る。かく別に勞力らうりきと云ふべきものを要しないで、自然しぜんに詠み得られるのである。然うして、他の夏、秋と換かへ難いものがある。春と云ふ事は動かない。進んで作例を検すると、

街のこゑうしろになごむわれらいま潮さす河の春の夜を見る  
 巷のものゝ響きが後の方にしづまつて来た、自分達は今、潮のさして來  
 て、海に續く河水が次第に殖えてくる春の夜のおつとりとしてゐる様  
 を見て居ると云ふので、何うしても春の夜でなければならぬ。さうなけ  
 ればならぬ。

### (二九) 候文と口語文と

—(某誌の書簡文を選した後に)

常々言ふことだが、努力は我々の生命である。自己の能力の全部を擧  
 げて爲た仕事は、よしそれが拙ない結果を貽すにもせよ、其の人自身と  
 して、之れ以上のことは無い。私が諸君の作を選び、そして満足の微笑を  
 洩らさずに居られなかつたのは、斯う云ふ理由があるからだ。

て、こゝに後れ馳せながら、諸君の前に辨明しなければならぬことが  
 ある。それは、何故に「候文」に限つたかと云ふことである。出来るだけ諸君  
 の自由を許して置きながら、特に「候文」に限つたことは、何か理由がなけ  
 ればならぬことだ、それを左に述べて見ようと思ふ。

私は書簡文に於ける口語體の自由で意思を悉くすに都合のいゝ形  
 式であることを認めて居る。しかし、普通の文に於ける口語體のやうに、  
 對者なくして、眼に見、心に感ずることを自由に表白して、何等の不都合  
 のないのと違つて、書簡文には必ず對者がある。對者なくして、書簡文の  
 成立する所以のないことは、言ふ迄もない所である。既に對者があれば、  
 それに伴つて對者の感情を尊重しなければならぬことは、之又言ふ迄  
 もない所である。然るに、口語體の形式は、無遠慮になりたがる、勝手氣儘  
 の事をツケ／＼言ふやうになつて來る。對者の感情を無視して、自分の



我ばかり立てるやうになりたがつて来る。随分親しい間柄でも餘り心やすだてが過ぎて、言ふべからざることをも言つて、兄弟のやうに親しい交りも一朝にして破れることがないでもない。

いかに親しい間柄でも、或る程度まで禮義があつて欲しい。顔の違つた人が集つて、社會が出来上つて以上、社交と云ふことを無視するとは出来ない。虚禮に流れてはならぬが、人間の有すべき禮義は一通り守らなければならぬ。親しみ易く、馴れ易い口語文は、或る程度迄對者の感情を考へて注意を拂ふべき必要がある。それから口語文を以て、お話のまゝを書き綴る簡易なものに解釋して、争うてそれに就く習慣があるのは、文章道の爲めに考ふべき問題であらうと思ふ。口語文は誰でも書ける、書けるが、その特色を發揮してその妙趣を表はさうとするには、漫然として、お話のまゝを書けばそれで可いと云ふものでない。必ずそ

れに伴ふ約束がある。その約束を心得ないで、單に自由である、自在である、と云ふ都合のいゝ名の下に、蔽ひ去ることは出来ない。

手紙は對者の顔が見えないから、どんな事を書いてもいいものゝやうに思ふ人が、口語文でまくし立てたら、いかに凄まじいことであらう。對者の顔を見て話をする場合には、二人の心持に共通する所があるから、何でもなく濟むやうな事でも、手紙となると、對者の顔が見えないから、意志の疏通しない點が出来てくる。さあ、さうなるから、何らかすると感情の行き違ひが起つて来るのである。何も對者と此方との間に障壁を築くことは要らないが、或る程度まで謙讓と云ふことを忘れてはならぬ。

口語文を書くのはよいが、書く前に少なくも右の如き約束を守るべきである。然うして、口語文は注意しないと冗長に流れ易い性質を有つ

てゐるから、最初に「候文」を書く稽古をしてから、口語文を書いてよいと想ふ。私は書簡文として先づ候文を自在に書き得られる稽古を積んで貰ひたいと考へる。さうすると諸君の中にも、候文を以て書簡文の初歩と心得る人があるかも知れぬ、併しそれは考へ違ひである。要は口語文も等しく自己の意思を對者に通ずるにあるから、その場合場合に依り、選ぶ所があつて可い。何れを甲とし乙とすることは出来ぬが、文章を研究し、文格を明かにし、對者の感情を尊重する上から、先づ候文を習得しなければならぬ。口語文の同輩若しくは目下のみ用ゐられるに反して、候文は一般に行き亘り、社會の各階級を通じて、之れを用ゐるに都合がない。形式の打破に急で、自由と云ふ名の下に、候文の運命を呪ふ人もあるやうだが、早まり過ぎた説である。候文も從來のまゝでは堅苦しく形式に囚はれた氣味があつたが、之れから用ゐようとするには、も

つと自由にして、候を少なくし、之れに左右されないように工夫しなければなるまい。口語文の長を採つて、候文の短を補ふやうな風にしたいと思ふ。私が先年拵らへた「新書簡文」は全體口語文を一篇も加へないで、自由な候文を工夫して見たのであるが、彼れでは未だ意に満たない、他日大に増補訂正を試みるつもりであるが、今の所諸君が書簡文を稽古し、候文を試作しようとするに當つては、多少の参考になると信じて居る。それから、書簡文特有の文格を明かにすると云ふ上から、書簡文捷徑を讀んで貰ひたいと思つて居る。普通の文章を書いて相當にこなせる力のある人が、書簡文となると、まるで別人のやうな拙劣の文を書くこと云ふのは、普通に一番入用である利器の使ひ方を知らないからで、非常に見苦しいことだ。

私が書簡文を募集するに當つて、候文に限ると云ひ、文格を守らなけ

ればならぬと言つたのは、諸君を刺戟し、大に奨勵しようと思つたからである。が、諸君の骨折つた割に、効果の擧らなかつたのは、平素の心得が不十分であつたからだと思ふ。之れからは、急にわきから動かされて、やると云ふのでなく、自分でそれと覺つて、此の方の研究に意を注がれたいと望んで居る。斷つて置くが、私は敢て候文ばかりを重んずる譯でない、書簡文を研究する順序として、先づ之れに就いて相當の知識を要するからである。

口語文が今の所、同輩若しくは目下に使はれてゐて、それが冗漫に流れ、無遠慮に失すると云ふことは、之れを推稱する論者も否定し難い事實であらう。口語文の冗漫を防ぎ、禮儀を持たせようとすれば、候文を用ゐるのと、別に變つた所がなくなる。そんなら、何も特に口語文を奨勵しなくとも可いことになる。口語文に全きを求めることの出来ないのは

此の故だ。

そこで、前回の懸賞文の成績を見ても分るが、諸君が「候」を扱ふ上に何れも重苦しくなく、比較的自由に使ひこなしてあるのは、よろしい。併し、まだ一般に然う云ふことは出来ない。選に洩れた大多數の人々は未だ少しも分つてゐない様に想ふ。さう云ふ人は、何うか一日も早く、貧しい知識を豊かにし、相互の意思を通ずる絶好の機關たる書簡文を自由にさうして完全に書き得られるやうにしたいものである。

### (三〇) 戸外で出来る歌

諸君は歌を詠まれる時、室内と戸外と何れを心に適した場處とするであらうか。おもひ／＼であらうが、初心の間は成るべく、戸外の新しい大氣に觸れて、其の眼に映ずる所のものを取つて歌はれたい。所謂寫生

である。拙くも、観たまゝを歌つたものには、生氣が迸つて居る。前人の思想を透き寫しにまたやうな作ばかりで、自分の心に感じた所の事を歌つてなくて、それは甚だ無意味である。役者の聲色を真似て、一文菓子を賣つて居る小商人と擇ぶ所がないのだ。初心の間は何でも可いから、ドシ／＼作るに限る。然うして、目の前の事柄を捉へるようにする。

路を歩き／＼歌を考へて、餘り夢中になるので、人に突き當り、電信柱に打つかつたりするやうなこともあらう。自分はよく然う云ふことがあつた。突き當つて、驚いたはずみに、折角考へ續けて來たことを忘れて了つて、残念に堪へないと云ふ場合もあつた。想ふに諸君の中にも然う云ふ經驗を有つて居る人があらう。併し、其れ位熱心にならなくては、歌は上手になれぬ。往來の人通りの激しい中で、一向外界の刺戟を氣にせず、悠々歌を考へて行くと云ふ餘裕があつて欲しい。それ電車が來

る、馬車が來る、俥が來る、自轉車が來ると云ふ風に、眼ばかり働かせて居ては、心がオチ／＼しない。何うせ、塵埃の立つて居る都會に住んでゐて、雜沓が氣になるやうでは、歌が出来るわけはない。歌の材料は野山には、かり横はつて居るものとは限らぬ。都會に又都會の趣味がある。其の居る處を土臺にして、作歌すべきである。自己及び自己の身邊を離れて、餘りに遠く思ひを運ばせるから、シツクリしなくなる。作者と作物とがピタリ合つてこそ、始めて其の作に興味が出來るのである。諸君は何うも自分と作物とを近接せしめようとし、ない傾向がある。興味で作るのではなく、餘儀なくせられたと云ふ傾きがある。歌を詠む場合の中心思想なるものは、興味から出發しなければ嘘である。諸君の作には、わざと事を構へたものが多い。直ちに自己の胸臆から迸り出たと云ふものは、求めて多くを得ることの出來ないのを憾みとする。

興味は、本當に心に感じなければ得られるものぢやない。興味から出來てゐない歌は、造り花のやうなもので生々した色もなければ匂ひもない。自分が感じて詠んだのでないから、竟に人を感じさせることは出來ない。斯うして出來た歌は、單に文字ばかりを操つたもので内容が空虚である。美しく見せようとか、面白く感じさせようとかした所で、儼ない人工のあとが加はつて居るばかりで、讀んで何等の味ひもない。到底斯ういふ状態で永く満足されるものぢやない。自分から之れでは可かぬと考へ直すのが當然であるが、しばらくの間だけでも、無駄骨を折つて居るのは馬鹿らしい。確と自分の出發點を定めてかゝらねば、損である。いつまでも方向に迷つて、長く本當の歌を詠むことが出來ないで濟ますと云ふことがあらう。自分は諸君の爲めに之れを切に言ふものだ。話が前に戻つて、戶外で作歌すると云ふ場合、外の空氣に觸れて出來

たものでなければならぬことは、説明した通りであるが、ツマリ材料を取る點になつて、迷ふことが多からうと思ふ。此の取材と云ふことが難かしいもので、之れに依つて其の作の價値が定まるのだ。事物に對する眼の著けどころ、之れが材料の可否を定める大切の要務である。之れは、作者の天分に俟つ處が多いが、天分にのみ信賴して、努力を怠るやうでは、磨かざる玉となつて埋もれて了はなければならぬ。たまじツかの歌才は却つて作者を累させることが多い。實地に當つて、多くの歌を作つてゐるうちにだん／＼コツが出て來て、自然に然うした妙味が生じて來るものである。怠けなくて、勉めるのが、上達を早めるのは、歌に於いても同じ道理である。たゞ無暗に多く作つてそれで可いと云ふ譯のものぢやない。身にしみて、本當に感じた所を歌つて、それが多數であると云ふなら、洵に祝福すべきことである。諸君の一部には、確かに此の自覺的

態度を以て詠んで居る人を見受けて、私かに慶賀して居るのであるが、自分は何處までも諸君に苦言を呈する。随分世間には雑誌を賣るのが主で、投書家の機嫌を取つて、お世辭を言ふ人もあるやうだが、それは光明ある前途を有する年少者を毒するものである。諸君は飽を舐らされて喜ぶ甘い人々でなく、口に苦い良薬を嘗めて、顔をしかめながら發奮する頼母しい人々であると信ずる。諸君は常に發奮を忘れてはならぬ。刺戟がない人の一生は、獨活の大木と同じで、脆い、果敢ない、あはれむべきものである。小さくもヒリ、ツと辛い山椒たるを願はなければならぬ。一寸外を歩いて、ウツカリして居ると、注意ぶかくして居るとでは、大きな違ひだ。街を歩いて居る時、風が立つて、埃があがるのも、物質的に考へれば、單に困つたものとするのだが、之れを歌の頭になつて

観察すると、其の索漠たる中にも、一道の趣味の漂つてゐるものである。こゝへ自分の作を出すのは、少し異なるものだが、話の序に引用して見ることにする。

君が住む鶴巻町の灯かけ見ゆ埃に白き風のなかより

鶴巻町は牛込のはづれの早稲田に在つて、東京の邊鄙の町である。此頃そこが開けて、商店なども大部出來た。早稲田大學の學生が得意で、學校用具を賣る小問物店の多いこと、ミルクホールや一品料理屋に怪しげな女が居ること、支那人が豚の油だらけになつて安料理店を開いて居ること等が、此の鶴巻町の特色になつて居る。自分の友は斯う云ふ町の空氣の中に棲んで、箇中の味ひを楽しんで居る。で、自分の此の歌は、然うした空氣を出さうとしたもので、埃に白き風の中よりと云ふ四、五句が、彼の町の灯かけを灰色に見せて居るさまを想ひ浮べられやう。其の

埃の色の中には、新開地の特殊な營業から起るさまざまな現象を想ひやることが出来る。

或は又左の如く詠むべき場合もあらう。

春の日にやなぎ並木の青の色おほひて風の白く吹くかな

風白き中に日暮るゝ街上の瓦斯の燈影のそゞろかなしき

塵うけてすさめる如く花つけしひと樹の梅を町なかに見る

など詠みつゞければ、寫生の本當の味ひを發揮したものが出来て來よう。

### (三一) 文章推敲の實例

#### ▲ 漁 村 (某子作)

小さい圓煙突が澤山立つてゐる鹽田を通り抜けると數十軒(ていつ

も)の漁村に出た。

左手の方は一面の青田で、遠く矢作の堤防が見える。木蔭の涼しい處では、眞黒な二三人が、心地よさうに午睡をして居る。

ふと一軒の家を窺視いた。中はからッぽで、誰も居ない。煤けた壁のわきに、鍋釜、土瓶などが置いてある。其の處から少しわきに離れてしちりに小鍋がのせてある。其の鍋に蠅が眞黒にたかつてゐる。土間の方から生臭(腥)い嫌厭な臭ひがして來たので、急いで通り過ぎた。そして濱へ出た。網が高く日に曝されて、小さな魚が一疋からくくに乾されて、はさまつて居る。

砂濱には、小さな蟹の穴が澤山ある。足音がすると小さな蟹が、ちよこちよここと穴へ入つてしま(う)ふ。

水際に(か)つを舟が一艘碇(が)を下ろしてある。(か)つを舟は(の)寄せ來る

波にゆらくと揺ぐさまが、早く秋らしい趣を傳へて居る。

三角な帆をはつた舟が、傳馬を引いて走つて居る。ずつと沖には、昨日半田へ入つた琴平丸が、薄い煙を吐きながら、小山のやうに碇泊して居る。

半田の町が手に取るやうに、高い秋めいた空のもとに、薨を列べて居るのが、瞭り見える。そこには、自分と親しいK君が居るのだ。と思ふと、急に行きたくなる。

半田紡績會社の圓煙突からは、眞黒な煙が出てゐて、長く武豊の方まで尾を引いて居る。

此作者は、未だいかにも初心らしいが、新しい文章を作つて居る。これまで踏襲して來た舊い型と云ふやうなものに、累ひされずに、心持よさうに自分の文を作つて居る所がよい。自分は此作者に對

つて、此の自由な態度をあくまで續けて行くやうにと勸めるものである。此の調子で、素直に進んで行けば、二三年のうちには、見られる文章が出来るやうにならうとまで思つて居る。それから此作の全體に擴つて居る趣味を考へて、作者は俳句を作つて居る人ぢやないかと思はせた。それは作者の觀方に、いかにも俳的な處があつて、全體キビ／＼と引き締つて居るからだ。俳的と言つても、わざとらしいそれでなく、何處か其行き方が一致して居るからだ。大體の批判と云ふやうなものが終つた。左に部分的の評を加へようと思ふ。

先づ「小さい煙突云々」と起したのが可い。いかにもその邊りらしい景色を目に浮べさせる。が「數十軒の漁村」とことわつてあるのは、作者の新に見た村のやうに聞えてよくない。全體から觀て、作者の熟



知して居る地であることは、明かだ。そんなら「數十軒」とことわらずに、「いつもの」と言つて、親しい土地であることを知らせた方が、讀者の感じが深い。なほ「圓突」は宛字だ、「煙突」とあるべきだ。

第二節は簡単な叙述の中に、夏の日の其地方的特色があらはれて居る。眞黒な二三人といふので、日に焼けた眞裸の漁夫が、平和な眞晝の夢に落ちてゐるさまが、活々と見える。

第三節の、とある漁夫の家の中を寫したものは、煤けて暗い光景があらはれて居る。鍋に眞黒に蠅がたかつて居ると云ひ、土間の方から腥い臭ひがして來たと云ひ、いかにも其の邊りらしく描かれて居る。それから濱へ出て、網が高く日に曝されると云ふ景色を出し、「小さな魚が一疋から／＼に乾されて云々」と云ふ細かい觀方を加へてあるのが、非常によい。たゞ網が曝されてゐるばかりの景色で

は當り前で、何の面白味もない。小さな魚がから／＼に乾されてある」と云ふので、作者の凡ならざる著眼を窺ふことが出来るのだ。併し、斯う云ふ細かな觀方は、悪くすると、わざ／＼持つて來て細工したやうになりたがる。が、それは作者の態度一つに依つて、定まるわけだ。此作者の觀方はいかにも眞實である。別に事を構へたのでも、何でもないから、些しもわざとらしいやうな處がない。此叙述の爲めに、却つて其邊りの光景が明かになつて來る。

第四節の「砂濱には小さい蟹の穴が澤山ある」と云ふ景色が面白い。「澤山ある」とあるので面白いのだ。唯「砂濱」に蟹の穴があつて、蟹が出たり入つたりして居ると云ふだけでは、あつけない。あちらにもこちらにも澤山あると云ふので、その場處が生動して來るのだ。斯う云ふ些つとした處に、作者の觀方が活きるか死ぬか定まるのである。

第五節の初めの書き方は、かつを舟と、碇と前後して續き工合がよくない。かつを舟を主にするには前へ出さなければならぬ。それから「ゆら／＼と揺ぐ」だけでは、觀たまゝに過ぎて居る。こゝいらへ一寸作者の感想が出て居つても可からう。早く秋らしい趣を傳へて居ると言へば、其の邊りの空氣がよくあらはれやう。

第六節の「三角な帆を張つた舟云々」は、實景見えるやうだ。次の「琴平丸の碇泊して居るさまを寫して、薄い煙を吐きながら」と云つて居るのも、晴れた日の感じがよく出て居る。

第七節の「半田の町が手に取るやうに見える」とある。手に取るやうには、作者ばかり然う云ふ感じがしてゐて、讀者には分らない。高い秋めいた空のもとに云々とある叙述が加はつて居らないでは、景

色が瞭りと見えて來ない。なほ其の半田の町が、作者の立つてゐる處から觀て、何方へ方つて居るのか、一寸その説明を要する。それからそこにはK君が居るのだ云々とある。K君なるものは、餘りに突如として居る。自分に親しいとか云ふ説明があつて欲しいと思ふ。急に行きたくなる」と云ふ感じは、其時の作者の實感かは知らぬが、たゞK君が居るの丈けて、うつとりと、其方の景色を眺めて居ると云ふ方が趣がある。目中は残暑であついが、何處か空には秋のなぐれが、たゞよひ初めたと云ふ感じをあらはしてよからう。

第八節に紡績會社の煙突の煙が長く尾を引いてゐると云ふ所で、結んであるのは、全體の長閑かな感じを引きしめて、然うして、餘情盡きがたき趣を掬むことが出来る。

いつだつたか、或る初心の人の歌稿を閲してゐると、左の如き作が、ふと目に觸れた。それは、

梅の花鹽漬にせむと思へるを、とくさけよかし待ちてあるなり

と云ふのである。随分思切つて奇抜な作が來るから、驚きはしない筈だが、これには一寸驚かざるを得なかつた。各自の腹に思つて居ることを、飾らないで歌ふようにと云ふ自分の説を守つて詠んだものとするれば、一言辨じなければならぬ。

作者が思ふことを眞直に歌つたものとすれば、その心持はよいが、穿き違へて居る歌は、口腹の慾を満す爲めに詠むべきものでない。鹽漬けにして食べたら味がよいから、咲いて呉れよばよいがと云ふ心持は、歌

に詠まるべき性質のものでない。梅の木未だ花を著けてゐない梢などを見て、とく咲けよと云ふ心持は、美しい花を見たいからだ。花は綺麗であらうが、何うでもよい、鹽漬けにして食べられるからだ。と云ふ考へは、人間の花に對して湧く所の自然の美しい情では無い。然らう云ふ心持を有つて居る人が、歌を詠んで見ようとした心が、わからない。それは無論、歌そのものを解して居つての故では無い。たゞ三十一字列べさへすれば、歌だと云ふ淺慕な考へから、一寸遣つて見たまでであらう。自分分は歌と云ふものを、斯んな風にお話ししなかつた筈である。嘘を言つちやならぬ、自分の考へを、あからさまに言ひ表はして見よと言つたのは、人間自然の感情が、或る物に對して歌つて試ようとする場合、今のやうに物質的の心持が出る筈がないからと信じた故である。

それから、此の著想は果して作者の實感であるか、何うかと云ふ事は、

梅の花を鹽漬けにする例は、聞いたことが無い、櫻の花の間違ではあるまいかと云ふことから、誰れかの言ふのを誤つて小耳に挟んで置いて、それを梅に對して、三十一文字にしたのではなからうか。それが、自分が湯に浸して飲んだ時、うまいと思つて、之れは梅の花の漬けたものだと速断して、彼んな歌を考へたのであらうか。自分の推測では、人の誤り傳へたのを小耳に挟んで置いて、それを詠んだものと想はれる。自分が實際、その鹽漬けを湯にして飲んだものとすれば、そのうまい味が梅に對して浮ぶと云ふやうな、強い味覺を覺えさせる性質のもので無い。淡泊な、可もない不可もないと云ふやうなものを、忘れないで憶えてゐて、それを歌にしようかと云ふ譯がない。人の好みと云ふものは、随分意外な點にあるから、其の作者の趣味性が、花の鹽漬に深く刻まれてあるかも知れぬが、常識から判断して、十人が九人まで、そんな事を考へる譯はある

まい。然うなると、彼の歌も、作者の實感と云ふよりは、小耳に挟んだ事を譯なく歌つて見たまでであらう。それは兎も角もとして、彼あ云ふ事柄は、歌はうとして、胸に浮ぶべきもので無い。諸君の歌稿は、随分澤山見ることが、未だ斯う云ふ著想の作に打つかつたことが無い。併し一寸之れに類した作は、ちよいと見受けられる。注意して置かないと、一部の人が斯う云ふ風に染まらないものでも無い。そこで、冗くも述べ立てたわけである。諸君は此の歌に對し、無暗に笑つちや可けない。此の歌のやうな歌とはまるで掛け離れたことを詠まうとしてはならぬと、相戒めなければならぬ。昔から思慮ある人は、妄りに色に表はさないで、深く自分を省みるものだ。

て、歌に入れるべき材料と、然うでないものとの區別を更にお話する必要があらうと思はれる。併し、その譯は既に分つて居らうと思ふから、

こゝには實例に就いて述べることにする。即ち今の鹽漬けの花の歌も、その材料の取り扱ひやうに依つては、歌にもなるのである。作者がその材料に對する心持如何に依つて、歌にもなり、又ならぬやうにもなる。彼の作者のやうな材料の觀方では、歌になるべき譯がない、根本から間違つて居るから仕方がない。

さう攻撃ばかりしてゐては仕方がないで、彼の歌は何うか直るものなら直したいのだが、添刪すと云ふのは字句の關係である。作者に或る思想があつても、それを言ひあらはすべき文句を知らないで、可惜よい著想も、徹底しないと云ふ場合には、作者の意を酌んで、其の言ひ廻しを直すことが出来るが、肝心の思想が悪いので、それを改造する譯には行かぬ。思想は作者其の人の生命である、其の生命を他で取り換へる譯には行かぬ。短歌は小さい形式だから、何方へ行つてもキツイ違ひはない

といつて、勝手に作者の思想を改める人があつたら、それは、随分無禮な人である。形式が短小だから、ムダな思想を省いて、純な、選り抜きの思想を盛るようにする、そこに短歌の價値がある。小さい形式のものだから、何うでもなると云ふやうに短歌を侮辱して居る手合が、世間には少なくないやうだ。さう云ふ考へを持つて居る人は、短歌の意義を知らないのだ。山椒は小粒でも辛いと云ふ、ピリツとした所がなくてはならぬ。小さい中に千萬無量の味ひが含まれてなければならぬ。それが然うでなく、新體詩の一部分を切り離して見たやうなのや、散文の斷片を持つて來たやうなのや、何れも短歌の獨立を無視したものだ。諸君は少なくとも短歌の獨立と云ふことを腹に入れてある筈だ。

で、自分は諸君の歌に目を通す場合に、成るべく各自の思想を重んじて居る。言ひ廻しのわるいのに筆を入れても、其の思想をまるで直して

了つて、作者自身と云ふことを没しようとはしない。思想そのものは十分に味つて、保護しなければならぬものと信じて居る。此の點から言つて、人一倍諸君の歌を関るのに苦勞して居るのだ。所で、話が前に戻つて、例の鹽漬けの花と同じ材料で、詠みやうに依つては、歌らしくもなることを左に示さうと思ふ。

さくら湯をいだされたりしことおもひ雨よけをせし家わすれ

えず

まげ物の鹽漬けの花、湯にひたし飲めば長夜のつれづれわするなど、幼稚ではあるが、讀んで何等かの趣を覚えよう。前の作と比べて、相違のあるのは、歌らしい思想が、此れに含まれてゐて、彼れに全く缺けてゐるからである。同じ材料でも、その扱ひやうに依つて、格段の差があるのは、之れを見てもわかるであらう。

梅の花小瓶にさゝむ一枝と見つゝ惜まれ手折られもせず  
梅の花一枝つよく折りたるに花みだれちりをかしかりける  
此二つの歌は共に梅の花の一枝を材料としたものだが、扱ひやうに依つて、二者の間に大なる差違を生じて居るのは、一目見て分ることであらう。

### (三三) 思ひついたこと

私の机上は今投書の歌稿で、大部分幅を取つて居る。黄の躑躅を挿した古びた素焼の瓶は片隅へ押し遣られた。瓶の傍にはみ出て居る歌稿の一片を抜き出して見ると、最初に斯う云ふ歌が書きつけられてあるのが目についた。

我死なむ若葉の香り身にしめて五月の今を死なむとぞ思ふ

此の一首の表にも裏にも死なむと云ふ痛切の心持が表はれて居ない。調子は間延びがして居るし、思想は餘りに平安である。毫も死の嚴肅に面接して出来たやうな痕跡を認めない。要するに作者は死を欲ふ模倣觀念に囚はれて、一種の題詠を作為したものである。

あはれ五月新緑の香にうちひたり林の中に死なむとぞおもふと假りに斯う改めたら何うであらう。早晚來るべき死を豫期して、自己の好む五月新緑の森の中で死にたいと云ふ、快感に伴ふ一種の感想として觀れば、そこに餘裕があつて、差迫つて居ないから、彼の如き厭な感じは起るまい。西行の願はくは花の下にて春死なむの、飄逸の中に嚴肅の氣分のあるものとは比べ難いが、前の様な厭味の脱して居るだけでもよい。

がつかりとせし體をば我が室に投げ出せし時時計ぞ鳴れる

「時計ぞ鳴れる」と云ふ結句が態とらしく厭味がある。形式の自由を求めて、斯う云ふ事もなげな言ひ方も悪くはないが、誰も「がつかりばかりして居ては埒が明かぬ。若い身空でさう些つとしても疲れては困つたものだ。作者は流行の疲労病に犯されて居るのである。本當の疲労でない證據には「時計ぞ鳴れる」と茶氣をやつて居るのでも分る。結句夜は來りぬ」と改めれば原句の如き厭味は取れる。

### (三四) 文章の互評

A・B・Cの三人が寄つて、友達のDの文章を互評する。それを自分が批判すると云ふ方法を取つて見よう。其の一文を左に掲げる。

#### ▲夢

今夜に限つて、何うしたのか眠くない。今、時計は一時を打つた。眼は益々冴えて来る。あたりは何の聲もない。森羅萬象は深い眠りに陥つてゐる。ちつと眼を瞑つてゐると、遠い——黄泉の國へでも引き込まれる様な氣がする。次第に意識を遠ざかつて来た。途端、無暗に恐ろしい感じが、細微な神経にまで傳はつて来た。自分は何が恐ろしいのだからかと思つて、原因を探つて見た。鬼でもない、獣でもない、何物でもない。たゞ無暗に恐ろしい、恐ろしいのばかりで、何の姿も見えぬ。自分は益々恐ろしくなつて、聲を限りに叫ぼうとした。聲が出ない。いくら叫んでも喉まで来て消えてしまふ。叫ぼうとするたびに恐ろしさが一層強くなつて、其の都度、姿のない或る物が自分を押しつける。益々叫ぼうとする。益々押しつける。全身恐怖と云ふ分子で造られてあるやうで、足を動かさうとしたが動かない。手を振らうとしたが振れない。

自分は此様にして殺されるのではないかと思つた。

其の時ズドンと谷へでも落ちたやうな心地がした。助けを呼んで見た。聲が出る。手足を動かして見た。動く。家内の者は驚いて、やつて来た。自分は此の夢のことを話した。

父は「何でもない」と笑つてしまふ。

母は「悪魔に襲はれたのだらう」と云ひ、「不吉の前兆だらう」と云ふ。

自分は精神に異状を來たしたのだらうと思つたが、何となく不安である。夢はよく合ふといふから、若しやと思つてゐた。

翌日の晝ごろ、果して從弟が死んだと云つて来た。自分は益々解釋に苦しんだ。

Aは斯う朗讀した。B・Cの二人はそれを聽いて居たが、讀み終つてからAが批評を志初めた。



すら／＼と澁滞なく書かれた手際に服するが、難を言ふと、ちと冗  
い。夢中の處を、もう少し端折つて書いて貰ひたかつた。それから終  
ひの方も幾分引きしめて欲しかつたと思ふ。

BはAの言ふ所を注意して聽いて居たが、

大體に於いて、A君の説に異議がない。初めの出を見ると、もつと面  
白いものが出來さうであつた要するに事柄の簡単な割に、書き方  
が冗過ぎる弊がある。他人のことは言はれぬ、僕にも斯う云ふ弊が  
あつて困る。此文を読んで、切實に冗漫の弊を認める。

と言つて、口を緘ぢた。Cは、二君の説に盡きて居ると言つて、別に言葉を  
挟まない。

總評が終つたので、これから部分々々の批評が初まる。Cは先づ言ひ  
出した。

今B君の言はれたやうに、此の文の書き出しがよい、あたりは何の  
聲もない、迄は無難であるが、次の「森羅萬象」は字面が耳立つて、静か  
な感じを殺がれる。世のものみなとしたら、柔らかに響きがよくは  
あるまいか。次の「ぢつと眼を瞑つて居るとはよいが、黄泉の國」は熟  
して居らぬ。死の國と言つたら可いと思ふ。次第に意識を「の」を自  
他が違つて居る。がと言ふべき所だ。次はA君に譲る。

AはCの言つたことを一々尤もとして、次の批正にかゝる。

「細微な神経にまで傳はつて來た」は細かくてよい。言ひ方も新らし  
い。次の「自分は何が云々」は間延びがして居る。自分はその恐ろしい  
もの、正體を探らうとした」と詰めて言ひたい。鬼でもない云々は  
新らしくないが、まあ無難だ。何物でもない以下は今少し詰めたい。  
「何んだか分らずにたゞ恐ろしい」として、何の姿も見えぬ「までを刪

る。次の「自分は益々恐ろしくなつてから益々叫ばうとする、益々押しつける。まで、其儘で可からう。次の「全身恐怖云々振れない。」は冗い。刪り去つた方が可い。然うして「自分は此様にして云々に續けて了ふ方が賛成だ。次はB君にお頼みする。」

Bは首肯いて、次の如く言つた。

「其の時云々は俄かな變事を示したものとして、ちつとも其心持が出てゐない。ふと谷へなど突き落されて、身は粉微塵になつたと思つた。大きい聲を擧げて、絶望を呼んだところが、誰れかに揺り起されて、目が醒めた。見れば、父君も母君も起きて氣遣はしげに此方を見て居られる。額に出て居る冷汗を拭き、夢の話をした。」と云ふやうに記かなければ、此場合の心持は出まいと思ふ。少し冗いかも知れぬが、こゝは之れ位書いても可からうと思はれる。次はC君の

番だ。

Cは左の如く續けた。

「父は云々、母は云々、こゝの言ひ方がシツクリして居ない。父君はよくあることだと言つて、笑はれたが、母君は谷底へ落ちるなどは、不吉だと言つて、眉を顰められた。」と斯う改めたい。それから、其次の「自分は精神に異状を來したのだらう云々は蛇足である。削つて、斯くて、其の夜は明けた。」と云ふと一行を其代りに加へたい。それから、翌日の晝頃云々の結びは、わざとらしいが、實際斯う云ふ事があつたとすれば、穴勝ち悪くもあるまいが、文句を少し改めたい。夢の事は、すつかり忘れて了つて居つた所へ、電報が來て、從弟の死を報じた。自分は昨夜の夢をひしと感じた。」と改めれば、幾らか自然になつて來る。然うでない、とわざと拵へたやうになつて、よくない。

Bが各自の直したやうに書き改めにかゝる。然うして書き了つてから、自分に見せた。

自分は一通り見て、三人の直し方の穩かでない所を改めて、前記の各々の批評を語つた。三君の言ふ所は、大體に於いて、此の文の病弊を説き得たものである。たゞ夢中の處の描寫だが、作者がいかにも意識して書いたやうで、夢中と云ふ心持が缺けて居る。併し之れは難かしい。之れを作者に求めるのは、無理かも知れない。谷へ落ちた所のB君の改め方は好い。終ひの直し方もよろしい。諸君の中で、斯う云ふ研究の起らんことを希望する。

### (三五) 歳暮と日記文と

年光流るゝが如く過ぎ去つて、今年もはや此の月ひと月となつた。人々は何れも春を迎へる準備に心忙しいことであらう。しかし年が勢ひよく落ち入るやうに暮れ行くのを見ては、誰しも感慨の多いことであらうと想ふ。諸君の多くは田園の人であらうが、年の盡さる夕ぐれなど、忙しいなかから脱れて、枯木のやうに散らばれる家々から、炊煙がゆるく颯つて、遠く横はつて居る山脈に、夕日の名残もなく、黒くのみなつて行く淋しい果敢ない景色に對ふと、心細いことであらう。それが秋の夕暮や、冬のたそがれの如き季節より起る淋しさと違つて、年の暮れと云ふ物の限りの哀感の伴ふそれは一種大なる寂寞を感ずる。都會の歳暮も亦淋しいものである。大晦日の夜など、煩雜な一日の疲れを安める爲めに風呂に行つて、歸つて來る更けた夜の空に、星が滲む様に光つて、風もない静けさは、年の落つる夜の淋しさを覺えさせる。宵の間の賑や

かさは跡なく収まつて、淋しさは一きは強く感じるものだ。

此の淋しい果敢ない、大なる物の落ちゆく哀れは、また追懐のやるせない悔恨の情から唆られる。此の一年中に何事をしてかしたか、一日又一日と要なき日を過して、日曆を徒らに剝ぎ取つたと云ふ丈けては、ただ生きえたと云ふのみである。それでは生の寂寞に堪へない。生の意義をそこに見出したい。と今年の元日の屠蘇に酔つて、誓つたことであつたが、これは一場の放言に過ぎなかつた。過ぎ去つた日の日記を繰つて行つて、餘りに平凡無爲な生活であつたことを残念に思ふ。それでも、何月何日には新しい生活に入らうとして煩悶したことであつたが、心弱い自分は竟にそれを斷行し得なかつた。歸する所は企てない前と異ることがなかつたと悔む。それから又何月何日の條を繰つて見て、人違ひから大なる災難にかゝらうとして免れたことや、その他随分危ない橋

を渡りかけたが皆幸にして自覺し得たことなどを追懐して見る。此の中には自分一箇として、決して無事でなかつた事件もあるが、大なる人生から觀れば、矢張り平凡無爲に過ぎないと考へる。

翻つて又斯う云ふことを思ふ。何月何日の條は、自分としてカナリ大きな事件であつたが、頭がもや／＼して居たので、事件の徑路が少しも順序よく書き表はされて居らぬ。今少し當時に在つて其の場合の氣分を出して書いて置きたかつたと追想する。然して事件の輕重繁簡に依つて筆が書き分けられて居らぬと想ふ。歳暮は其の一年間の事をいろいろに想はせるものであるが、特に日記文は、斯く當時の事柄と、それを叙述する時の心持、延いて、其の書き方の適不適等に迄考へ及ぼさせる。追懐の興味と共に、日記の筆にいよ／＼深く親しませるものは、此の歳暮の特殊な情緒である。

『雪中松』は、宮中當新年の歌御題である。此歌御題が常に近代の風潮とか好尚とか云ふものを離れて、超然として、昔ながらの諷詠を一般民衆に課し給ふと云ふのは、深き御意味のある事と思はれるが、われら近代の風趣に馴らされた者は、思を此の悠揚たる境地に置くことが出来な  
い。此の歌御題は古をしのぶにゆかしい感想を與へしめるのみで、これに對して、詩興の湧くといふことを得ない。われらの頭腦は、餘りに近代的に傾き過ぎたのであらう。

それで、われら新しい若い歌人は、常に詠進を怠つて居るので、折角の御思召に背き奉る罪は、寛大の御處置を願ひたいのである。しかし、此の御題の景趣は、古い回想を覚えしめること二三にとゞまらぬ。自分は

(三六) 『雪中松』に就いて

此の古い回想を語りたいたのである。

自分が七八歳のころ、東京に二尺ばかり雪が降りつもつたことがあつた。こちらにしては大雪である。それがまだ新年の門松の取れないころであつた。門松の緑の隠れるまで降りつもつたが、朝がた輝やかな日の影が、キラ／＼と射して、門松の尖の雪が融けかゝつて、青々とした松の色が眩しさうに日に對つて來た。これが幼時の美感であつた。美感と云ふ意識は確かでないが、唯好ましい景色であると思つたのである。此の單純の美感と云ふものが、今日まで繼續して居つたら、此の歌御題は、自分が喜んで詠進し奉つたに違ひない。自分の頭腦は、不幸にも美を直覺することが出来なくなつた。或る美しい景趣に對しても、自分は、先づ其美しいものか何うかと云ふ疑問の解決を頭腦に訊ねて見て、然らして其の解決を聞かない間は、美しいと定めることが出来なくな

つてた。

松と雪とは附き物である。雪が松に降り積つて、上枝も下枝も見分けがたいまでに白々としてゐるさまは、見事である。松と雪とは、尤も適はしい景物であるだけに、見事であるといふ感じも因襲的、前記幼時の美感と云ふものと同じやうに、極めて単純で、美と感しても、それが永く頭脳に残らない。何回も見ても、見る間には、それが何んとも感じなくなつて来る。却つて一種の月並的臭味を覚えて来るやうになる。

併し、御題の心は、單純に大らかに詠むやうにとの思召であらうが、われらは幼時の美感の如き單純なる景趣に美を直覺することが出来なくなつた。われらはたゞたゞ詠進者が月並的臭味を脱して、おほらかに巧を弄することなく、思邪無からん歌を多々詠進し奉らむことを望んでやまぬのである。細工を生命にして居る所謂宮内省派歌人の弊を襲

踏することなく、すらすらと觀たまゝの景趣を詠ずべしである。

自分の古い回想を、今一つ舉げて見よう。

自分の家に、古くから傳はつて、雪中の松を描いた大幅があつた。筆者は名の知れた人では無いが、餘程古いものらしくあつた。自分の幼時、祖父はその繪を新年毎に床の間に懸けて賞翫せられた。自分は祖父のかたへに在つて、其の繪を眺めては、何んだか大幅に描くほどの圖様では無いと思つた。祖父に此の事を話すと、さうかも知れぬ。とたゞ笑つて、すぐに其の繪を卷いて、梅か何か別の繪と換へられた。それから、その雪の繪は決して床に懸けられなかつたのみか、何處にしまはれたか、分らなくなつた。自分が大きく描き過ぎたと感じたのは、例の幼時の直覺で、決して利いた風な口をきいたのでは無かつた。祖父が笑つて、その繪を卷き去られた心持は何う云ふ譯であつたか、聞いて見なかつたが、子供に然

ういふ感じを持たせる繪を懸けて置いては不可いと云ふので外され  
たものらしい。自分は今その繪を目前に髣髴させようと思つても何う  
してもそれが現はれて來ない。唯、その繪の規模が小さく、大幅に描くべ  
きものでないと云ふ感じは、今でもほのかに残つてゐるが、その畫様は  
既に自分の記憶から消えて居る。

そこで想ふ、小さい景趣は矢張り小さく描くが可い、又小さく歌ふが  
よい。物には調和が大事だ。觀たまゝ感じたまゝを率直に描きもし歌ひ  
もするが可い。ひとり此の雪中の松にのみ就いて言ふのでは無いが、此  
の御題を課し給はられた御心は民衆の誠意から出た歌ごゑを聽かう  
と思し召されたのであらう。何處までも誠實に、率直に、工まず飾らず、觀  
たまゝ感じたまゝの景趣を詠進し奉らなければならぬ。

自分は今幼時の美感と直覺と云ふ如き、單純にして邪なき想念の胸

に宿つて居らぬのを悲しく思ふのである。(明治四十一年一月)

### (三七) 初春の景色の寫し方

今まで冬の硬い荒まじい心に閉ぢられて居た春は幼い温かい息吹  
を吐き出した。土の色を見ると、かつがつながら潤が出て來た。ほかりと  
する日の光りを受けて白けてゐた色が黒くうるんで來た。小さな草が  
芽を吹いて、こゝ彼處にちよつびりした青が目に入つて來た。梅の蕾が  
ふくらんだ。水のせゝらぎが氷つた心の解けたやうに軽くさわやかな  
音を立て、流れる。山がうす霞んで見える。人の顔に餘裕が見出した。  
話し合ふ聲もうつとりと長閑かに聞え出す。遠くて啼く鳥の聲が今ま  
てとは違つて、朗らかに暖かく聞える。空を仰いで見ると、凍つたやうに  
青く透き徹つた色であつたのが柔かい日の光に融け出して、輪廓の固

かつたやうなのが丸く和らいて見える。雲の行くのも、いそがしくなつた。悠々として迫らないさまが見え出して来た。見るもの聞くものにつけて、誰の心にも、あゝ春が来たと自から眩やく時になつた。今まで室内にばかり閉ぢ籠つてゐて、門外に出ることの少なかつた人も、おち／＼静座することが出来なくなつて、郊外へ出かける。霜どけて弱らされた路も、自然に直つて、梅花の匂ひが籬落の間から人の鼻をつく。鳥の聲がする。襦袢を干してある背戸の物干に陽炎がする。一路寂としては居るが、秋や冬の場合とは違つて、その寂とした中に暖かいのびやかな心持を唆らせる氣息が籠つて居る。日向で鶏のなく聲も長く曳いて、春らしい心を催させる。野に出ると枯木の林は、矢張り今迄のやうであるが、その枝々は暖たかい日光の恵みを受けて、今にも芽を吹きさうである。仔細に見たら、芽を吹いてゐるのがあるかも知れない。枯草のあとに残つ

て揃つて生きてゐる小草が、いかにも生々として可憐な趣を示して居る。併し未だその小草の上に寝ようとは思はれない。暖たかいと云つても、如月の風は底に刺すやうな寒さを持つて居る。とある木の根に腰かけて、冬枯の景色と變つた様を見る。この前にこの原に来たのは、未だ一月と經つて居らぬ。木枯しの吹き荒んでゐた寒い日であつた。何か書かうと思つて来てみたのだが、書く所ではない。餘り寒いので、匆々逃げ出したつけが、歸りは寒が降り出して凍えるやうであつた。僅かひと月經つか經たないかに斯うも變るものかと怪しむ。風が寒いと云つても、春はもうすてに來て居るものゝ色、ものゝ音、何れにしても冬と云ふ感じは少なくなつた。春だ、春だ、杖を土に立て、それを持つてゐると、暖かい春の氣が上つて來るやうだ。さう感じた時の心の嬉しさは、譬しへないものがあらう。



以上は春の初めに起る季節の變りめの特殊の感じである。此の感じは誰も起すところの事で、改めて言ふ迄もないが、どうかすると、うつかり看過して、了ふ、冬が過ぎて春が來た當時の感じは、特殊のものである。即ち、あゝ春が來たと云ふ感じは、自然の萬象にあらはれる包み切れぬ喜びの色を見て、人間が深く同感する心持である。人に依つてその心の深い浅いはあるが、何人でも此の著しい變化をボンヤリ看過して仕舞ふ譯はないのである。文章に志し、歌に志し、又繪畫に志さうと云ふ人には、此の自然に對する感じが、特に鋭敏で、深刻でなければならぬ。普通人の一倍も二倍も感じ方が強くあるべきである。然るに、此の大事の約束を無視して、何を見ても之れと云ふ感じを引き起さない人は、感覺の鈍い、粗造な頭腦を持つてゐる人と言はねばならぬ。さう云ふ人に文章は書けぬ、歌は詠めぬ、繪は描けないのである。例の注意力、觀察力と云

ふこと、あれは此の場合更に引用すべき必要がある。此の二つの能力を發揮し得て、始めてものを完全に書くことが出来るのである。文章に肝心かなめなものは思想である。觀察である。然うして、之れは事物に對する注意力の如何に依つて、定まる問題である。諸君は之に向つて深く意を致されたい。

そこで、諸君の或る一人が初春の野に立つて、その景色を寫すと云ふ場合、先づ左の如きスケッチを得たとする。

枯木の林から湯氣のやうなものが立ちのぼる。霜が日光に融けて蒸發するのだ。いかにも暖かさうだ。林の廻りには若草が揃つて青く生えて居る。未だやうと寸許りである。一面に目を浴びて春の初めの快感を喜んでゐるやうだ。じつと之れを見詰めてゐると、眼がだるくなつて來る。

眞にスケッチである。初春の野の一部の景趣は之で窺ひ知られる。唯だ此の文に於いて缺點とする所は、時間が確かならぬことである。午前とは大概想像はつくが、之れを記入しないのは、印象の不明瞭を來す所以である。初めに、

春が來てから未だ間もない。或る一日の午前、私は郊外に出た。見ると彼方の……

と云ふ文句が入ると、時間と場處が確かになつて來る。然うして今少し書き續けて見る。

やがて彼の枯木林を右に見て二三町歩を移すと、彼方に小さな工場が見えて低い煙突から一すぢかるく煙を立てゝ居る。工場の上しろに梅が二三本、すでに白く花を著けたのが、ちら／＼見える。喇叭へ煙管の親爺がやつて來る。全く春の景色になつて居る。郊外は寒

くなるのも早い、が、暖かくなるのも早いものだと思つた。汽車の音がする。地響きして通つたが、それが矢張り春の心の中に入つて、厭な氣持がしない。のどかな、悠々たる趣に同化されるから可笑しい。鳥が二三羽連つて、私の前を通る。チウ／＼と云ふ啼き聲も、すでに春だ。

工場を描き、梅を寫し、喇叭へ煙管の親爺を捉へ來り、更に又汽車を點した。それから二三羽の鳥の人馴れたそぶりも、皆春の景物となつた。小さい工場がゆる／＼一すぢ煙を出してゐるなどは、野趣の多い景物だ。之れを捉へ來つて、初春の氣分を配した所に、作者の觀察の凡ならぬのを見る。此の文では、此の工場が殆んど景色の中心になつて居る。之れが點せられてゐなかつたら、此の文は可笑しなものになつて仕舞はう。之れがあつて本文は始めて活きると云つて可い。然うして之れあるを得たの

は、全く観察力の到つた證據である。事物を求め眼——それが精しく到つて居らなければならぬ。たゞ然う言つても分らないが、常に眼のつけ處を新しくして、物を注意して見ると云ふこと、之れに外ならぬのである。然うして、その中には事物の調和と云ふことをも注意して考へる必要がある。單に新しい物と云つても、それが全體の感じ、即ち初春の氣分に適應しないものであつたら、それは無論その景色の中に加へてはならぬ。特に之れを注意する。

### (三八) 私が歌に志した初め

私が和歌と云ふものを知つて、どうにかかうにか作り始めたのは、まだ辛つと七八歳の頃で、母から教はつたのである。これは嘗て卑著和歌入門の初めにも述べたことである。

私の母は規則立つて研究したと云ふ譯ではなかつたが、幼少から書籍を読むことが大變に好きで、活花の師匠から、國文や和歌の書物を借りて来て、夜更けるまで耽讀したと云ふことである。然うして、いつとなく和歌をならひおぼえて、私の子供の時分には、もう何冊かの詠草が出来て居たのを記憶して居る。さうして、幼ない私に、熱心に口授してくれた。私の最初の和歌の師匠と云ふのは、此のうら若い母であつた。

母は私の十一歳の時に亡くなつて了つた。それからと云ふものは、作つても誰も見てくれる人がないので、しばらく作歌を中止して居た。そして父から漢文の素讀を受けて、漢文くづしのゴツ／＼した文章を作つて、父に見て貰つたりして居た。和歌の最初の師匠は母であつた如く、文章の最初の師匠は父であつた。

それから後の事である。私が祖父母に養はれて神田に住んで居た頃

ある日軒下のきたに一匹の可愛い小犬が、どこからか迷つて來たらしく、悲しげに啼ないて居たが、傍そばへ行つて抱かいてやると、いかにも嬉しうに、尾を掉ふつたり、手などを舐なめたりして喜ぶので、いぢらしくなり、そのまゝ飼つてやることになつた。その頃の歌に

小犬こそ可愛かほゆきものなれわが吹ける口笛おぼえ走り來るよ

と、いかにもまづい幼稚なその當時のこゝろもちを詠んだものがあつたと憶おもえて居る。處が、その犬が翌年どこかへ姿を隠して了つた。大切なお友達か、氣に入りの從者にも別れたかの様に、私はひどく惜しげて、

まめやかに我に仕へし可憐かへんなる小ちさき從者じゆしやはいかゞしにけむ

と、こんな風な歌を、澤山に作つて悲しんだものだ。只悲しいと云ふことを、少しの技巧も加へないで、お話でもする様に綴つたものだ。その時分の私には、いさゝかでも事を構へやうとする腕はなかつた。

かう云ふ風に一時中止して居たのが、好きな事として、又いつからとなく作り初める様になつた。丁度その頃である、彼の落合直文先生が、國文に和歌に腐氣ふき満まん々たるを慨あはせられて、新しい旗幟きしを翻ひへされたのは。

當時私の宅うちの隣りに住んで居た或る會社員から舊派きうはの歌の難むづかしい講義を聽かされたり、祖父から稅所ぜいじよ敦子あつこ女史の歌のありがたみなどを説かれたりして居たが、それがどうも廻まりくどく感心しかねて居る時だつたので、落合先生の作られた、新しい、いかにも生々いきした文章や和歌を見ると、少年の私の心は堪たまらなく、峻とくられて躍つた。どうしても、この先生でなくては、自分の頼みにはならないと、獨ひとりで斷きめて了しまつた。

緋をどしの鎧よろいをつけて太刀たち佩はきて見ばやとぞ思ふ山ざくら花

この先生の作が、當時の私に、どれほど深い感動を與へたであらう。今まで自分の作つて居た、古い、何んの妙味もない歌が、情けなく思はれて來

た。

然うして、とう／＼私は落合先生の許へ手紙を差上げて、私の心のありたけを縷々として述べた。そして、どうか是非とも御門下の末にお加へなすつて戴き度いと云ふことをくれ／＼もお頼みした。けれども、すぐには御返事を下さらない。待ちあぐんで居ると、御返事が来て、夜分はいつても大概家に居るから、るやうに、それに作つてある歌があつたら持つて来て可いとのことであつた。其の時、私は實際躍りあがる程に狂喜した。この時の事は、深く深く私の頭脳に印象されて居る。此の時分の師匠となり弟子となると云ふこと、又兩者の情誼は、今日のやうに軽々しく又疎々しいものではなかつた。

先生から書物の講義を聞いた事は少なく、多く作歌の態度とか、新味ある製作とは何う云ふものかと云つたやうなことを細かに承つたの

である。この時私は始めて新しい歌の意義をおぼろげながら知り得たのであつた。

先生の舍弟の鮎貝槐園氏——今は朝鮮で或る事業をやつて實業の方面で飛躍して居られるが、當時は未だ先生の許にあつて、先生を助けて、新派和歌の鼓吹に努められたものである。新派和歌の今日あるに至つたのは、同氏に負ふところが多い。先生と共に忘れてはならぬ恩人である。私は氏の誘掖を受けることが多かつた。私のその頃の詠草は、日本新聞などへ出して居つたが、記憶に残るやうな作は無かつた。

それから、佐藤橘香君と懇意になつて、同君の經營にかゝる雑誌『新聲』の和歌の選者になつたが、それはまだ十八九歳の頃であつた。青書生の分際で、選者などは生意氣千萬なので、「清原文彦」と云ふ名で、しばらくの間見て居つた。それから私の名を出すやうになつて、同社から『片わ

れ月』と云ふ歌集を出した。

要するに、私が歌を作り初めたのは、母が好きで、教へて呉れたのと、幼少から陰鬱な性質であつたのがその動機をなして居る。それから落合先生の知遇を受けて、先生の深切な指導を受け、新しい歌の曠野に立つことを得るやうになつたのである。

しかし、當時の私は、只夢中で新しい歌を詠みさへすればそれでよかつた。自覺とか何とか云ふやうなことは、無論私の頭にはなかつた。究り新しい技巧で、新しい事實を歌にすると云ふに過ぎなかつたものである。

### (三九) 昔の歌と今の歌

#### 其一

古今集——我が國最初の勅選集で、醍醐天皇の延喜年間に紀貫之・凡河内躬恒等の選して上つたもの——冬の部に讀人不知として、左の如き歌がある。あなたがち此の歌のみを指して言ふのぢやない、本集を開いて丁度此れが目觸れたから、それで引用するに至つたのだ。それは、

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

と云ふ歌である。此の歌の意味は露や霜が降りても松の色が變らなかつたが、いつか變る時があらうと思つてゐたところ、年も暮れようとして雪の降つて來た此の寒さにあつても到頭變色しないと云ふことを知つた。青々した松の色は自然の迫害を受けても、ビクとも爲ないと咏歎したものである。「もみぢぬ」は、もみぢを動詞に使つたもので、「もみぢしない」と云ふ意、即ち色を變へないことである。此四句の「つひにもみぢぬ」といふのが、作者の得意のところであらう、言ひ得たと云ふやうな誇り

の色の頬ほに上のぼつたのが見えるやうだ。

此時代の歌は概して斯う云つた風のものが多い。時にこそとことわつて「つひにもみぢぬ」と云ふやうに、すぐ結果を示す、理窟の勝つた作が多かつた。斯う來ればかうと、呼吸がチャンと定まつて居つた。興じて作ると云ふ風は毛ほどもなくて、たゞ机の上でこね上げるのである。即ち此歌は松に雪がふりかゝつて、雪の色の白いのに松の翠みどりりが明かだと云ふ景色を見て詠んだのではなくて、想像して、こしらへたものだ。何故見たまゝを素直すなはに言はなかつたのだらう。平安朝時代の公卿くわうなどの顔を繪などで見ると、ふつくりと白く膨ふれて、いかにも、のんびりして居る。しかも、その歌を見ると、決してさう云ふ趣がない。巧を弄し奇を求めて自然に遠ざかり人工のあとが、げばくしい迄である。歌人は坐まながら名處を知るものと云ふ法則があつて、見たまゝを詠むと云ふやうな事

は幼稚に思つてゐた。出来るだけ想像を逞たくましうして細工をすると云ふ事が、自己の技能ぎぎを發揮するものと合點して、益々その方に心を傾けたのだ。古今集一卷此の作り歌細工さいく歌で満ちて居ると言つて可よい。此歌を假りに見たまゝを詠んだものとして考へて見たら何うであらう。

年くれてさむきゆふべにふりかゝる雪こそ見ゆれ門の松が枝と詠んで見る。しかし、これだけでは餘り平凡であつけない。觀たまゝと言つても、これでは幼稚と云ふ評を甘んじて受ねねばなるまい。これを最初の試作しさくとして、だんくに改めて見ることにする。

年こゝに暮れむとすなる夕ぐれの寒しとおもへば松に雪あり  
斯う詠み更へて見る。松に雪ありと云ふのが、五句につめられて大事の主眼しゆげん點が隅の方に壓おしつけられた傾きがある。窮屈である。間に合せてある。そんなら、何う改めたら可よいかと云ふことになつて來た。初句から

四句までが、ダラ／＼と、いかにもタルんで聞える。それを直さなければならぬ。

松見れば翠りの色はいやませり年くれがたの雪しろくして

句の配置はよく行つたが、ことばの整へ方は未だしい。なほ考へて見る。

雪ふれば松のみどりのいとしくさやかにこそは眼にうつり

けれ

と詠んで見る。四、五句が間延びがしていやだが、大體から言つて、然ら見られぬものぢやない。まあ素直に出来た方だ。古人は何故斯う云ふ風に飾らない。ありのまゝの趣を詠み得なかつたであらう。幼稚だとか平凡だとかけなしつけて了つて、一步一步と自然に遠ざからうとしたのである。例の「つひにもみぢぬ」など、いかにもわざとらしく事を構へたあとが、あり／＼と見えるては無いか。わざと驚いたやうな風に見せて、その

實は、ちつとも驚かない。机上の出来ばえを見てくれと云ふやなさまが、歌人らしいゆたかな心持ちを缺いて居る。彼の歌と此の試作の後に得た作を比べて、どちらが優れて居るかと云ふ際どい批判的の見方を離れて、どちらが自然に近いかと言へば、無論後者を推さねばなるまい。萬事鷹揚な昔の時代にせよ、こましい歌の風が行はれて、萬づ煩雜な今の代の作に、後者の如きゆつたりした趣のものを見ると云ふのは、いかにも不思議な現象では無いか。古人と言へば、すぐ古今集時代の人を指すばかりのやうに想つてゐては、可けないが、少くも古歌を議するには此の時代の作が主になるべき筈だから、勢ひ此の時代の人を擧ぐるに至つたのである。そこで今人は素直ばかりに詠んで、作に變化のないものとのみ想つては、間違ひだ、素直と云ふのは、眞實なもので、飾らない本統の趣を出すのにある。一本調子で、平凡なものやうに想ふのは、その皮



相をのみ見た所の事である。素直の範圍は廣い、自分のこゝに言ふそれは自然のものを指すのだ。人間の要らぬ細工の入らない天真のまゝを露出したものに言ふのである。今人の歌の境は、そこにある。今人の立場はそこだ。幼稚だとか平凡だとか想つて居る人があれば、それは舊思想を脱することの出來ない、あはれむべき人だ。所謂舊派の歌を作つて居る人はそれだ。今の代の新しい日の光りに觸れない人であると云ふ事を心から氣の毒とも慙れとも思ふのである。

素直と云ふことを、たゞ見たまゝばかりで一本調子であると誤解して居る人に、彼の作の變化縦横であることを示さう。

雪の日の山松に見るその色のふかきみどりの好ましきかな

雪すこしかゝりてはれぬ軒の端の松のいろはもいや青く見ゆ

松の雪朝日さすまゝしづれてはみどりの色のうるほひのよき

雪白く積れるはしに松の葉のはづか青さが生き生きとせり

松ばやし風はげしきにふる雪のたまりたまらず青き葉の上

など、自然にちかい観かたは、細工を用ゐずして、多様の變化を示すのである。更に松ばかりを詠むとしても、古人は常磐の松の深みどり深さを人の心ともがななど自然と人とを接觸したがる。自然を背景にして、人物をあらはすと言ふならよいが、然うでない。突然人事に言ひ及んできはめて淺薄な寓意を籠むるなどは、イヤミである。間に合せてある。眞に感じた作ではない。口から出任せてある。歌の眞味と云ふものをまるで離れた作である。

そこで、今人なら何んなに觀察して詠むかといふに、

冬がれの木原の中に一もとの松の青きを見たるよろこび

百舌なける松高々と門の邊に夕日を浴びて立ちてありけり

松の葉を見れば君よりおこせたる茸の香しのび秋をおもひぬ  
など、いくらでも詠み得られるのである。

斯く古人と今人とは歌の觀方と云ふものが根本から違つて居る。修辭の上から言へば、古人にかなはない點もあらうが、思想はたしかに生き／＼したものがあつた。温い血が通つて居る。殊には立派に今人である以上、死物を取り扱ふやうな冷やかな事をせずと、少なくとも生きて居ると云ふ事を證明するだけの作がなければならぬ。之が常に忘れてはならぬ所のことだ。まかし、どうかすると、自分の今人であること、又は生きて居ると云ふことを忘れた作を出して、恥ぢない人の多くを見受ける。これはいかにも残念な次第だ。

新しい時代に交渉のない老人連が、舊思想を歌つて、新しい派の歌を呪ふやうな事は寧ろ氣の毒にも、痛ましくも感ぜられるが、若い人たち

の間にまだ陳腐な思想を喜び、自分と云ふものを没した歌を詠んで居る人を見るのは眉をひそめずに居られない。例へば

さびしさに門に立ち出でゝながむれば秋はさびしきものにぞ  
ありける

初しものおきまどはせるしらぎくの花はいかにもさむげなり  
けり

の二首を抜き出して見て、古人の作に類似のものがあるか何うかと云ふ迄もなく、前の方のには「さびしさに宿を立ちいでゝ眺むればいづこも同じ秋の夕ぐれ」と云ふ古歌がある。又後の方のにも「矢張り心あてに折らばや折らむ初霜のおきまどはせる白菊の花」と云ふ古歌のあることが容易に記憶をついて出て來るでは無いか。かう似寄つて居つては、丁度一から十まで、主人の命令を聞かなければならぬ召使が、主人の口

眞似をしたやうで聞き苦しい。

それでは、自己の観方、感じ方を出すには、何ういふ方法を以てすべきかと云ふにもつと深く自然に接觸して、窺ひえた自然の匂ひや色を出すべきである。古人の口眞似などして、自分を蔽ひ隠すやうな事は忍びないところではないか。若やかに華やぐ心から何故自分をあらはさうとはしない。

ところで若し、自分をあらはすとしたら何ういふものを得るであらうか。左にそが試作を示すことにする。

夕さればわきてもさびし大空をわたれる雲のさまなど見つ、  
秋の日の次第に暗くくれてゆくそのありさまの哀しかりけれ  
菊のいろさむげにも見ゆ霜いまだおくとも見えぬこのあかつ  
きに

白ぎくの白さをながめわれあれば沁々と眼のいたさを覺ゆ

など新しい観方で然う骨折らずにすぐ出来ようと想ふ。古人をたよりにして、それより一步も出まいとする氣の小さい弱い人には、こんな自由な作は出来ない。ウマクもマツクも作者自身の心持を言ひあらはす處に、自由の情緒が閃めいて居る。かう云ふ風な所からだんく詠み初めて、新しい効果をあらはさうと努めなければならぬ。

古人と今人との間には打ち消しがたい形界線が引かれてあるのだ。古人も當時の人でその時代の心持を歌つたのであるから我々も此の今の時代の心持を詠むやうにしなければならぬ。

## 其二

で、今度は藤原俊成と云ふ人の作を引用する。此人は鎌倉時代では一流の歌人で、勅を奉じて新古今集を選したりなどした。小倉百人一首を

選んだ定家は此人の子で、代々和歌の名流を出して居る。先づ左の如き例が目についた。

夕されば野邊の秋かぜ身に沁みてうづらなくなり深草の里  
 夕方になると野を吹きわたる秋かぜが身にしみくと感じて鶉が何  
 處かで啼いてゐるのが聞えると云ふので、深草の里山城の夕ぐれの心  
 持を言ひあらはしたものである。これは前回に挙げたものゝやうに理  
 窟の分子が加はつて居らないで、秋風の薄寒さ鶉のこゑ、その邊りの光  
 景をしのばせるものがある。鶉が詠へ向きなのは、此時代の通弊で、尤  
 め立てするのが野暮であらう。若しこれを今の人が詠んだとすれば、何  
 んなものが出るだらう。

夕されば野を吹きわたる秋風にうすき衣のさむきをおぼゆ  
 と云ふやうに、作者と景色とをくつつけて、つとめて實際を歌はうとす

るであらうが、こゝに挙げた歌はホンの一例としてのみである。もつと  
 切實のところが無くてはならぬ。

秋の日は暮るゝに近しはるばるに風野を吹きて寒くありけり

斯う詠めば野の秋夕の感じは切實にあらはれて來やう。彼の俊成卿  
 の歌の詠へ向きな景色を歌つたものに比して、此方が確かに生氣が  
 あらう。野に立つて秋夕の感じを切に味はつた者でなければ、此の心持  
 を言ひあらはすことは出來まい。古歌の大部分は机の上の遊戯に過ぎ  
 ない。彼の俊成卿の歌は比較素直に景色を寫して居るやうで、矢張り根  
 柢から誤つた當時の思潮に囚はれて居るから仕方がない。たゞ外面の  
 いゝやうに體裁よくこしらへ上げさへすれば、それで可いと想つて居  
 るから困るのだ。

今人は少なくとも此の誤解が解けてゐなければならぬ筈だのに、新し

い派を標榜する作者の中にも自分の本統の感じを蔽うて、生地をあらはすまいと焦つてゐる人も見掛ける。然う云ふ人は根柢から其の間違つた考へを取り去つて仕舞はなければならぬ。

古人の短所を襲うて行く位ゐなら、何も焦ることはない。一から十まで手本通りやつて行けば、文句はないのだ。まかしそれでは今人の立場が無い。今日の空気を吸うて新しい機運の中に立つて居るとは言へまい。今人は今人だけの十分な覺悟がなければならぬ。何か時代に伴つた新しい心持をあらはさなければならぬ。それには、自分と云ふのを明かにあらはした作でなければ可かぬ。さあ、然うなると、勢ひ一生懸命にならなければならぬやうになつて来る。誰れの作にても共通するものでなくて、これは自分が感じて、自分が詠んだものだと言ふ信念のこもつた作でなければならぬ。

で彼の俊成卿の歌を假りに今の人が、

夕されば衣手さむし秋風の吹きわたる野にうづらなくなり

と詠みかへたら何うであらう。これは彼の歌を焼き直したものだ。然うでなく斯う云ふ觀方をして詠んだものがあつたから何うだらう。先づ一言にけなしつけるのは、こんな陳腐な事を言つて居る時代ではないと云ふことである。鶉を點したのが、いかにもわざとらしく、間にはせてはないか。然うして本當に鶉のなくのは聞いたのでなくて五句につまつて、一寸挿入したばかりであらう。自分が本統に聞いたのならもつと切實なところがあるべき筈だ。これでは鶉が浮ついてゐるぢやないか。鶉のこゑが、一首に響きわたつて居らぬ。尻尾の方へ行つて一寸聞えるやでは随分心細い譯だ。

作者が本當に鶉をきいて詠んだとすれば、何ういふものが出來やう。

と云ふとになつて來た。有名な契沖阿闍梨と云ふ坊さんで、國に精通してゐた人(徳川時代の半過ぎに出た人)の鶉を詠んだ歌をふと憶ひ出した。それは、

いそのかみふる里寒き秋かぜに道芝がくれうづらなくなり

と云ふ歌である。いそのかみはふる里のふると言はむ爲めの枕詞で意味がない。秋風のふく故郷へ歸つて來て、さびしい畔路あせみちなどを歩いてゐると、ふと道ばたに生えて居る芝にかくれて鶉の啼いてゐるのを聞いたと云ふのである。これは、いかにも鶉がないたと云ふ景色である。鶉がちつとも不自然でない、さびしいふる里の夕ぐれの空氣をそよ／＼動かして啼いてゐる聲が、いかにも聞えるやうである。秋風一路さみしき夕ぐれの氣を受けて、一人しよぼ／＼と行く作者のうしろ姿が見えるやうではないか。

此の歌などは餘程、今めいた詠みぶりである。確かに實景を歌つたも

のである。いそのかみと云ふ枕詞を使つて、ふるさとに古色を帯びさせるところなど、感じをあらはすことにつとめて居る。此時代の作として新しきがあるものに違ひない。それから名を忘れたが、矢張徳川時代の歌人で、契沖けいうちよりは、ずつと後れて、同じく鶉うらぎを詠んだものに、

山畑やまばたに色づく粟のほろほろとちる秋風にうづらなくなり

と云ふ歌のあるのを記憶する。

これは山中の畑に粟が植つて居ては、や色づいた粒が、ほろ／＼と秋風にあたるあたりに鶉が啼いてゐると云ふのである。感じはよいが、道具立がうるさい。粟粒あはつぶがほろ／＼と秋風にあると云ふだけで、一首にした方がよかつた。鶉は此の場合餘計ものである。

道具立の多いと云ふことは、内容を豊かにしようとしたもて、目的は悪くはないが、一首の統一を缺いて、感じが諸方の道具にこん／＼、いかつ

てよくない。和歌の内容の分量は短かい形に伴ふコンデンスしたものを以てせねばならぬ。小さな中にこて／＼詰め込んで溢れ出て居るやうては決して見ともよいとは言へぬ。物にはほど／＼がある、その程を越えて豊富ならしめようとするのは間違である、無識をあらはして居るのだ。今の新しい派の作者の中には、材料の充實を計つて無暗に詰込まうとする弊がある。だから出来あがつたものは、自分だけ分つて、他人には何の事だか分らぬ謎のやうなものになつて了ふ。

所で、翻つて古歌を見ると、内容が三十一字に足らぬものが多い。詞でスラ／＼と延ばして居るものが多い。その詞も大概は有り來りのもので、作者特有の感じのあらはれた用語などを使つて居るものは少ない。思想があつて詠むのでなくて、詞を按排するに止まつて居るのだ。だから作者の特色の著しくあらはれて居るものが少ない。今の人は思想が

勝つて詞が負けて居る。考へが先づ前きに立つて、それをあらはす文字が後になて来る。事件の複雑を欲して、之れを形の中に盛る工夫が足りない。それだから變なものになる。

所が、今日ではもう新しい派の歌も大分形式が整つて來た。思想と修辭とがシツクリ合つて來て、讀みづらいものも譯の分らぬものも大分減つて來たと云ふ有様である。話が少し飛んだが、例の鶉の歌に返つて、今少しお話ししようと思ふ。

俊成卿の娘は矢張り歌が上手であつた。繊細な優しい作が多かつたが、その鶉を詠んだものに、

うら枯れて下葉色づく秋萩の露ちる風にうづらなくなり

と云ふ歌がある。女だけに言ひ廻しがいかにも優しく、又細かい處がある。一首の意は萩の下葉が枯れかゝつて色づいて來た、それへ置いてあ

る露が、はら／＼と風にちることであるが、その邊りに鶉が啼いて居ると云ふ意だ。素直な女らしい歌である。綺麗に出来て居る。然う云ふ點から觀て、此の歌の價値を認めることが出来る。併し此の作者が今生き返つて來て、然うした景色を眺めて詠んで見たとすれば、何う云ふ歌が出来てあらう。

野に近く結べる萩の垣に來てこの夕ぐれもうづらのなくよと云ふ風に自然に詠み下すであらう。殊更に下葉色づくと言ひ、露ちる風になど言つて、つとめて美しくしがらせうとはしましい。鶉をわざ／＼持つて來て啼かすといふやうな不自然な遣り方はしましい。

舊派の繪に此の歌をつくりの趣のものを見るとが多い。因襲の久しきなほ斯う云ふ趣の繪を描いて満足して居る人の心を氣の毒に思ふのである。それから不思議でならぬ事は、上に擧げた古人の歌の何れも

が鶉なくなりと云ふ句を四句に置いてあるか、五句に置いてあるか、ある。鶉を詠むには屹度鶉なくなりと云はねばならぬものゝやうに心得てゐたのである。それを證據立てる爲めに、なほ記憶して居る古人の歌を擧ぐれば、

秋山の裾野のすゝさうち靡さくれゆく風にうづらなくなり

(家 隆)

秋風到下葉や寒くなりぬらむ小萩が原にうづらなくなり

(通 宗)

難波江のあしが花ちる秋風に床さへあれてうづらなくなり

(直 好)

など結句がみな鶉なくなりになつて居るのが可笑しいでは無いか、形式が斯う云ふ風に變化がないやうに、觀方なども大方似たり寄つたり



である。前記の契沖けいちゆうの作が幾分その趣おもむきを異にしてゐるだけで、他は結句が同じ様に矢張りその内容も同じ型かたの中に囚とらはれて自由の天地に遊ぶことが出来ない。誰れか一人位うづらなくと初句に置いて詠んだものはなからうかと、いろく考へて見たが、何うも浮んで来ない。古い歌に作者の特色の表はれたの、少ないのは畢竟ひつきやう斯う云ふ弊から来て居るのだ。そこで、古い形に囚とらはれずに、自由な形式で詠むと云ふ作を左に試みて見ることにする。

うづらなく夕野の中にわれいつか来りて秋の風に吹かれぬ

秋風を寒しとおももゆふべより野べのうづらは聲立てつなり

籠こに飼へるうづらこのごろ啼かずあり病めるやいかに覗のぞひて

見みひ

山中やまなかの畑はたけの粟生あまなまに網かけて待てどもうづらつひに來らず

遠野とほのよりほそぼそなけるうづらの音つたへ來くるなり夕秋風ゆふあきかぜはなど何うにでも變化を見ることが出来る。今の人である我々は仕合せだ。自分の觀たり考へたりすることを、何等の制限なくして自由に言ひ表はすことが出来る。

—— 文話歌話了 ——

## ▼文章月令

## 其一

○寒は今最中なり。空晴れて風なく、日は晃らかに照れども、外氣凍りて、觸るゝところ、刀の如く人を刺す。深沈として動かざるものあり、人の腸を寒うし又清うせしむ。晶然と咲き出づる白梅は、寒の生める花なり。一朶の花、庭の冬枯を領して、地上の權威なり。

○梅の面白味は孤高なる所にあり、その一木の離れたる所にあり。之を聚めて林をなし、園をなして、所謂風流人の翫賞に供するに至れば、此の花の生地は奪はれたるなり。冬ざれの野を行きて、果てしなきその荒寥に倦める時、一木の瘦梅、白く香を吐きて、ゆくりなく人に迫るを見れば、

心寒うして往く。森かげの土藏の邊り、かじけながら花を著けて清香を送れるは、繪の如き快感を覺えしむ。お詠へ向きの景色の中に、篋めて愛づる風流人に依つて、此の花久しく俗化せられたり。

○空碧く瑠璃色に晴れわたりて、地上は風強く吹き、家々の瓦の屋根より屋根に、白き埃の飛ぶを見るは、哀しき對象なり。汚れたる硝子の窓越しに眺めて、眼痛き心地す。隙間も、埃の風時に火鉢の灰を起たしめ、讀みさしの書の頁を翻へす。

○温室咲きの菜の花、瓶に挿したるまゝ、幾日をか経けむ。火の氣少なきも、室内は室内なり。花ほらけ、葉は黄に枯れたれど、尚ほ温かき春色を殘せり。自然の春未だ來らずして、室内の春は、開れむとす。

○福は内、鬼は外、柵の葉に寒氣を逐ひやりて、立春來る。青く透き徹れるが如き空の色、やゝ和みて、眼自から高さに親しむ。晴つゞきて、草ほのか

に萌ゆる状を面影にすれば、忽ちにして雷鳴り、寒來り、春寒肌に砒す。雪白く積みて春の行き互らむとする道に塞がる。春の光を浴びて、色々に飾られむとする市街美は唯だ一色の白さに劃られぬ。

○しかも春は既に至れるなり。地の底より上らむとする一道の温氣は、淡く雪を敷かして、やがて溶かし行く。雪解のあとの木の根などに萌え出でし露の臺、青く鮮やかに見ゆ。喘息に惱みし祖母の爲めに、残雪を分けて漁りたりし幼なき日を想ふ。

○二月は風の月なり。ホネムーンの夢さめやらざるに、夫の遠く出で行くべき船を送りて、埠頭に立てる新妻の手帕に海の風荒く吹きて、船旅の心もとなさを想はしむ。動搖せる人生を先づ覺えしむる二月の風よ。

○紀元節の日、早春の景氣、天地の間に満つ。午後の日に、遠き夢を想はしむるが如き陽炎燃え、一碧の空に輪をえかく鴉の舞のどかなり。人は皆

上代の空氣の中に立ちて、大いなる日の光りを吸ふ。

○二月十五日は西行忌なり。如月の望月のころ、花の下に死なむと詠ぜし歌の心の如く、彼は、此の日を以て寂しけるなり。彼が行脚の一生に、最も適はしき結末を與へたる歌の韻に護られて、永き眠りに就きしその夜、月薄く、安らかなりしを想ふ。陽曆の今は未だ天寒うして、月冴ゆ。花なき、寒き月夜に、詩僧の清癯なる面影を浮べ、一炷の香を煙らす風流を近代人に勧めむ。

○紅梅の花の色は温かうして親しむべし。さはれ、春や昔の名残りを留めて今めかず、新人の背景に副はぬ色香なるべき。洛外などのとある築土の壞れに、薄き日の光りを受けて、行人の思ひを惹く如き所にこそ、此の花の興あるべけれ。

○草青く萌えて、水日毎に温む。野に佇みて杖を立つるに、春の氣の地の

底より傳はり來るを覺ゆ。柔らかく暖かき思ひは、この刹那人の胸に運ばる。

○桃の節句に近く、各地に雛市開かる。東京の十軒店は古くより聞ゆ。雛の如く美しくしき兒の目につくは此の頃なり。人形天皇の御宇の華やかさは、漸やく表はれ來れるなり。日麗らかにして、大路の青柳の絲、次第に伸ぶ。(一月二十一日—二月二十日)

## 其 二

○春寒尙打續きて、二月の風砂を捲く路上に、矢の如く電車の馳せちがふを見るは、荒まじき景色なり。日の色に春らしき暖かみを呈しながら、白けしやうなる空に雲の走ること忙がはし。來れる春は、そも何處にか往かむとする。

○青みわたりし本草の芽の、荒まじき自然の威に怖ぢて、伸びもえざるあはれさは、はかなき籬落の間にも見ゆめり。青黒き常磐木の葉がくれにうち竦みて、いぢけたる音に啼く小鳥の聲々。

○土をあげて萌え出づる露のわか葉の緑なるは、眼に快き眺めなり。春寒く、顔ふやうなる日の影に、此の緑の色の新しく力あるかな。残れる雪の傍、霜に凍てしあとの土に、指もて點せるやうなる青を、此處彼處に見て、心いさゝか和く。

○八つ手の青葉の、高く聚りて、早春の空氣の中に立てるは、仰ぎ視て心晴れゆくやうなり。鶉などの來りて、朝を啼く高音よ。宛として春草氏が畫中の趣あり。

○風なき日の午に近き程は、さすがに暖かく、うらゝかなる光浴びたる草木の芽は、見る／＼寸許り伸びゆく心地す。そことしもなく上れる水

蒸氣の、うち煙りて、立てる人の背の邊り、じめじめと汗ばめるも、心悪しからず。

○土手の柳青く芽ぐみて、ちら／＼と春の日を受けたり。しばし打向へば、霞める眼、次第に塞りゆく。早春の晝ころの日光は、風なければ、長閑なり。細長さ白塗りの交番の硝子戸に、陽炎もえて、橋畔の柳のかげは、實に晝くが如し。

○夕暮より風出で、北を吹く寒さ面を向くべくもなし。店先きの硝子蓋せる箱に、埃白う見えて、瓦斯の燈かけしづ心なく瞬たく。店番の小僧の黄なる顔の粟立てるあはれさ。

○晴れたる夕、若草萌ゆる丘の上に立ちて、遠き國境の山を見るに、雪半ば残りて、すでに消えたる處は、僅かに青き色を萌せり。落つる日のくれなるを受けて、雪の白さと草の青さと照りあへるは美しくし。

○早春の日の入りし後の空氣は、しばしが程なれど、いと明るし。屋根の色、草木の色、人の顔の色、透き徹るやうに明るきものなり。晩秋ごろの展けたるやうに明るきとは異なり、一と所に物を集めて透明ならしむ。晩秋の明るさには暖かみあり、早春には寒く白けて人を刺す所あり。

○散りぎはの梅、雨に褪せて、黄いろく梢にのこる花を照らせる日は、漸やく暖かし。桃は咲かず、櫻は咲かず、雨膏の如く降りて、伸びゆく木の芽、草の芽。

○海邊の白き沙を踏みて、沖をゆく一帆の影霞めるを見れば、久しく寒さに閉ぢられし胸の、やゝ開けたる思ひす。青潮の音を聞きて、巖かげに憩へば、鳥朗らかに啼く。顧みれば、後ろの砂山の青葉こもれる椿の一もと、所々赤き花を著けたり。

○雛の節句の朝、春の雪うすく積みて霽れたるは、時に適へる美しくしさ

なり。母の雛の、火の災に罹りて、俗人のみ一つ残れるを、我が物書く机の上  
 上に据えて、折柄の供御参らするに、笑まひの淋しさ、さはれ、心足らへる  
 やらなり。今日一日は、美しき小さき俗人の前に幼かりし母の昔を想は  
 む。

○電車の音の微かに轍のあとに残りて、やがて消えゆくを見守れる春  
 の夜の一時きこそ、何か艶めかしきものなれ。おぼろに更けゆく街の色  
 の、靄立てるやうに水気あるは、更に艶めかし。

○春の彼岸來る。寺々の供養の鐘の音、明るくのどかなり。六阿彌陀詣で  
 の善男善女、甲斐々々しき脚絆仕立ての、こゝかしこに群れをなして都  
 大路をねり歩くは、昔も今も變りなき、長閑なる俳畫なり。

○一重の櫻、季節に促されて、やゝ氣色立つ。縁日の露店に人集りて、夜歩  
 きのよき頃となれり。植木店のカンテラの火に、遊蝶花、ヒヤシンス、アネ

モネなどの西洋花の適はしからぬも、見慣れては可笑しからず。(二月二  
 十一日—三月二十日)

## 其 三

○櫻花、地に遍ねき頃となれり。野に山に、或は水の畔、街の頭、行く所とし  
 て、此の花を見ざるはなし。爛漫として華麗の趣を盡し了れば、飄々とし  
 て風に翻り、满地白雪を布く。花なき枝に若葉青く見えて、鳥語閑なり。日  
 の光り薄くして、春くれ方の寂しさ、そこともなく人に迫る。

○櫻の花は一重なるがよし。八重の、赤味ありて姿重苦しき牡丹櫻とい  
 へるは、美しくしけれど、此の花の特別の趣を缺く。色褪せて枝頭を去らず、  
 雨みどりに降りそゞくを見るは、一味の哀愁を惹く。鬱金櫻はその色の  
 寂しさ、物にも似ずとある籬の畔に咲き残りて、晩春の日を受けたるは

適はしけれど、時めける人の門などの、大きやかなる一樹に此の花の咲き満てるを見るは、痛々しき心地す。はかなきは人の好事なる哉。なべて變り種は見て快きものにあらず。鬱金櫻のあはれに奇らしげなるも、山櫻の素直に、すが／＼しきには若くべくもあらず。

○林檎の花、巴旦杏の花は、その色に姿に西の國の趣を傳へたり。林の中に白壁の家見えて、滑らかなる小鳥の囀り、織手奏づる樂の音は、マンドリンとや。うす紅ゐの小さき花、永き日に倦みて、ちら／＼と動きちる。嘗て抱月氏が物せる「沙翁の墓に詣づるの記」の中に巴旦杏の花を描ける一節あり。此の花を見る毎に彼の文を想はしむ。

○櫻草は楚々として、微かながら人を魅せしむる力あり。暖かき日を浴びて、川邊に簇り咲ける此の花の美しくしさは、自然にして態とらしからず。遠くより望むも、近くより見るも、とり／＼に趣あり。西洋種の青ざめ

し色に咲けるは、寒く春の意なし。赤く華やかなる荒川堤に咲く我が國の種こそ、此の花の負へる名にふさはしけれ。

○暮春のもの静かなる日に、花散りし木の陰を歩めば、寂しさ、他の國を行けるやうなり。白き犬の我が前を行けるも、眼に舊きが如くにして、新しき眺めなり。色彩を去り、外觀を離れたる自然の、しばし虚しさが中に呼吸して、我が若さの衰へを感ずる時、夏を呼ぶ鳥が音、雲白き彼方より聞ゆ。眼に若葉の緑を見て人は自覺の境に入る。

○連翹の黄、山吹の黄、いづれも物寂し。前なるは佛くさく、寺院の垣のくづれ、墓のほとり、人ばなれせる邊りに咲く。山吹の一重なるが、花なき閑寂の庭に一もと咲きて立てるも、特に際々しからず、黄の色はなべてうら淋し。

○夜ふけて、遠く犬の吠ゆるを聞く。晝見し野べの寂しさを想ふ、眠るこ

と能はず。

○一夜風烈しく起りて、心俄かにあわたゞし。裏の森古葉落つること急に覺まされし鳥切りに驚きの音を立つ。しばらくして、もとの静けさに歸れば、蛙聲徐ろに起る。子守唄に眠る小兒の如くに、寝ね難かりし眼次第に塞り行く。

○卯の花の白さに雨ふり濺ぐは、陳套の景色ながら、自から初夏の感じなり。暮れ行きて、室の障子に燈影映れば、その光延いて濡れたる花の白さに及ぶ。春逝きて間もなき頃の趣なり。

○眼を擧ぐれば、新緑やうやく鬱として、頭に迫り來る。青き一色に限られたる如き野原の小高き處、躑躅の花一むら紫の色に咲く。行人稀れにして、日の光りやうやく熱し。

○日曜の午後、日比谷公園の躑躅の中を行く紺傘の、白鳥の如くうち續

けるは、爽やかに涼しさものなり。静かに明るき初夏の情趣は、人事の美を發きて、快感を與へしめずむばやまず。

○劇場の外を飾る電燈の華やかなるも、初夏の夜の情調にふさへり。場内は今幕開きたりと覺しく、樂の音切りに聞ゆ。濕へる如き夜の空に月薄く匂へり。過ぎがてに看板繪見る男女。(三月二十一日—四月二十日)

#### 其 四

○新緑の陰、漸やく濃かになり行く。輕き風あり、若葉の香を傳へ來りて青き眞晝の空氣を搖かす。深院人なくして、そこもとも知らずものゝ顫へ動くを聽く。五月の風は、靜思するに可し。

○楓の花の、青葉がくれにそよめくは、一味の詩情を惹く。あるかなさかの淡く赤き花も聚まれる緑の中に交りては、紅一點の鮮かさはなくも



眼に受くる色の印象は、小やかに胸を動かす。

○罌粟の花の紅なるは初夏の青き天地に目ざましき色の反映を興へしむ。妖艶にして魅力多く、凝視久しければ、心之れに奪はるゝが如し。漱石氏の「虞美人草」は縁日より買ひ來りたる一鉢の花に對して彼の長篇のヒントを得たるものなりと傳ふ。淡く瀟洒なる初夏の景物の中に飛び離れたる味ひある花なるかな。

○暮春より咲きつゞきて、牡丹の花は初夏に豊満の趣を呈す。此の花一輪咲けば一草なき満庭も、之れが爲めに賑はふ。さはれ、豊満に過ぎて、其の何處よりか一點の寂しみの湧き來るを覺ゆ。暮春の薄日を受けて立てるを見る時、此の哀れを感ぜしむ。又想ふ、唐代の榮華の様を髣髴せしむるは此の花なり、寵衰へたる美姬の嘆きを、目前に見るが如きも、此の花なりと。

○古池の水乏しきあたり、花菖蒲五六本紫の色に出づ。水湛へたる處には、ほてい草と云ふが、去年の漂へる古根より青き圓葉を出して浮べり。濁れる水の底に、ほのかに紅き金魚の鰭動く、濁れるなりに澄める水に、新に生れたる目高の如き鯉も見ゆめり。小やかながら、自から水國の趣を成せり。

○覆盆子の走り、町の果物店に出づ。船に乗れる胡瓜、茄子の群れは、久しく沈滞し來れる青物店に一味の新を寄せたり。

○緑陰垂釣と云へば、事古りたる趣ながら、繁れる青葉を描くに、粗く點打ちたる如くし、施せる緑の色際々しからず、釣を垂るゝは、今様の支那人也。之を寺崎廣業氏の繪に見る。陳腐の題材も、畫家の新しき感味と新しき描法とに依つて生動す。

○初夏の日の光線は、明るさ中に濕ひあり。晝會などに靜かに繪を見る

に適へる時なり。作者の情調は濃やかに表はれて畫面を透せる懐かしみを受けしむ。

○市中より脱れたる山の手は夏來ること早く、新樹の緑、漸やく深からむとし、雨催ひなどのいぶせき薄暮に今年の蚊の音なひをきく。足のべて、庭の木立を見てある時、來りて痒からざる程に刺すは、にくからず、軒ちかく蝙蝠飛びかふ。

○室には電燈點れど、庭の新樹に暮色未だ深からず。燈影に背きて靜かに闇に吸はれゆく初夏の景趣を味ふに、心や、寂しけれど、滅入らず。全く暮れたれど、一道の燈の光り、淡く闇に及ぶ。寢につきたる鳥、茂り葉の中に羽ばたきて、ゆくりなき光を窺へる如し。

○雨霽れし朝、電車の窓より、郊外の新樹を眺む、緑に圍まれたる小高き丘の家の物干に、白き衣、翻々と翻り、林を隔て、小學の校舍見え隠れす。

○栗の花ちる水の畔の澁谷を朝明けに逍遙ひ歩くに、しめやがながら明るき情趣を覺えしむ。東京の郊外の味は、尤も初夏に豊かなり。

○新笋、こゝろよく肥えて、竹むらに鳴る風の音、夏らしき涼味を呼ぶ。

○木賊の緑、雨に飽きて、手洗鉢に水溢れたり。雨蛙濡れ縁を跳びて閉せる障子は、うすくしとれり。人なきが如くなる室内に、折々物の動く音す。○いち早く開かれし氷屋の店先さに、一鉢の鐵線の花、色や、褪せたるが置かれたり。時偶ま出て入れる麥藁帽の學生。

○梅雨は早二旬の後に迫れり。清明の空、近く此の陰鬱の氣色に閉さるべくも見えず。青く晴れて、快く囀る小禽の聲々。(四月二十一日—五月二十日)

### 其五

○空飽くまで蒼く、地上の萬物、皆初夏の爽かなる色に歡び生く、青葉に

輝く日の光り漸々強し。

○巢立ちして間もなき翼弱く、嘴黄なる鳥の雛、新緑の陰に覺束なくも餌を漁る。

○初雷を聴く。昨年に比して早きこと十日。

○早起して庭前に立てば、桐の花頻りに散りて、黒き地に紫の印せるを見る。

○窓外に幽かなる蟲の音を聞く。初夏の哀れなり。

○雨霽りの日、種物、苗物賣りの聲を聞く。舊江戸の聲は此の細く曲節ある老人の音に哀しく残れり。

○稲苗二寸餘、田植の時期近きにあり。益兒、新桑の味に耽らむとす。

○新緑漸く深く、蛙聲老ゆ。山の手の家々は既に蚊帳を吊れり。

○水菓子屋の店頭を飾るものは、苺、夏蜜柑、ネーブルス、枇杷、さくらんぼ、

グースベリー等。

○豌豆蠶豆漸く盛りに、新芋、さげなど、亦市に見ゆ。胡瓜は延びて二寸に餘れるものあり。

○鮎釣りの好季。新茶出づ。空を渡る日、雲のたゞずまひ、水繪の如き清明の色。

○新装せる浴衣の裾軽く、薄暮打水に涼しき小路をそゞろ歩く人、ぼつぼつ見ゆ。

○氷屋は開かれて、硝子の簾、眞晝の風に鳴る、路行く人、額の汗を拭へどなほ他に見て過ぐ。

○草花には、チキタリス、カーネーション、夏菊、フランネル草、撫子の類。

○新茄子始めて食膳に上る。夜、螢の飛ぶを見る。

○郊外の散歩。麥、半ば黄に色付きたり。いち早く既に刈りたるもあり。

- 白き日の光りの下に甘く眠れる如き栗の花の盛りなるを見る。
- 夜の露店に、新ぼらうづきを鬻ぐ。
- 入梅晴天なるも空氣重くまとりて、風肌かみに快からず。午後三時の暖氣
- 華氏八十三度を示す。路傍ちばたにアイスクリームを商へるを見る。
- 瓜哇ハワイの新バナ、を味ふ。匂におひ芳烈ほうれつにして、滋味じみ舌したに豊かなり。
- 愈、梅雨らしき雨、しとくと歌みては降る。紺この香かほひゆたかなる新し
- き半被はんびを著きたる花賣はなうりの菖蒲あやめに露美しく光る。
- 雨の中に漬梅賣つひうめうりの聲悲し。
- 蟲賣り出づ。鈴蟲の淋しき聲を聞く。その音未だ熟せず。
- 降り續く雨に家の中夜なかよの如く暗く、手に觸さわるもの皆濕うるはふ。町はづれの
- 家に焚たく蒼朮そうじゆつの匂におひ胸苦むねくるし。
- 梅の實、枇杷の實、黃熟わうじゆくす。薄暗く奥まりたる家の、庭の枇杷の樹高くし

- て、女主人おんなあにの口惜くちせしく眺めて過ぐす日の多からむなど想ふ。更に又雨降
- る七日、庭上ていじやう、黄きにうみて崩くつれ落つるもの無數なるを想ふ。
- 梅雨つゆ霽はれの朝、今年ことしの初蟬はつせみをさく。
- 石榴ざくろの花落ちて青葉あかの中の紅あかき色彩しきさいを失へり。朝の目路めぢは寂しくな
- れり。
- 屋敷町やしきまちの新しく清げに張り出したる窓より、金魚賣きんぎようりを呼びてぎやま、
- んの鉢はちを出せる白しろき手の少しく窶やつれたり。
- 試験しけんを前に控ひかふる學生がくせいの青あおき顔かほ、街上かみじやうに見え來る。髪かみのびて窪める眼、
- 鈍く光れり。
- 洋畫やうがの會、邦畫ぱんがの會、同時に上野じやうのに開かるゝことあり。油繪あぶらえの具ぐの匂におひ
- と表具ひょうぐの糊かほの匂におひと、奇あざしく鼻はなを打つ。出づれば青葉あやめの上野じやうのの外光げいこうは、青
- く明るし。

○川岸の酒樓の燈影涼しく水に映じて、絃歌の聲未だ聞えず、欄干に凭りて、對岸の電車を見る女の顔の白きが薄き夕闇に淋し。(五月二十一日—六月二十日)

## 其六

○梅雨の天冥濛として、日光を見ざることに久し。食うて寝て、胃を損じ腸を害し、若き人脚氣を患ふ。一閑張の卓の上、微雨せし如く、濕ひて手觸快からず。取り出す書架の洋書青く黴びて、翻すページの高く低き様に志とりたる、ひと目にいぶせくぞ覺ゆる。

○薄暮、西天ほのかに明りて、午後より歇みたる長雨の霽れ際、快よく眺めらる。羽蟻の如く喜べる勤め人、縁日商人の顔。

○霽れたる後の熱さは鐵火の迸るが如く、弱れる人の頭腦を刺戟す。腦

貧血に犯されて、街の並木の梢に手を掛け、衰へし神経を養へる人を見る。

○アイスクリームの怪しげなるを呼び賣れるも、此の並木の蔭なり。新聞の賣子、富山の藥賣などの憇へるも、此の木蔭なり。

○地震ひ、雷鳴る、梅雨の霽りしは、確實となれり。

○七夕の星祭り今は廢れたり。笹の高きに五色の紙を下げて、屋上高く樹てたりしもの、今見るべからず。維新前の今日、九段坂の上より江戸の街々を望めば、花の如く翻れる色紙の目もあやなりしと云ふ。近代人に此の餘裕を求むべからず、風雅の道廢れること久し。

○十二日、草市此處彼處に開かる。人群れ集へど喧しからず。ひそくと來りひそくと去る。夜に入つて點せるカンテラの灯、青き草物に映りて、青き光を放つ、人の顔も青し。

○十三日、盆は今日よりなり。夕門前に苧殻を焚いて、血縁の死者を招く。其の明りを尋ねて死者は來るとなす。佛壇を飾れる青き草物の中より燈明明かにもる。壇上俄かに賑はしくなれり。

○寂しき中に色めける盆の街路を柵經に行く。車上の緇衣の影旁午す。盆は僧侶の晴れの正月なり。

○十五日夜、送り火を焚く。雨蕭やかに降り來るは時に適へり。十六日朝お迎ひひくと呼び來る。佛壇の青き裝飾は一切此のお迎ひの肩に擔がれて行く。賑ひしもの頓に舊の寂しさに歸る。

○藪入の男女の雇はれ人の顔に、自由の影はほのめく。放たれたる鳥の如くに、活動寫真に入り、芝居に入り、汁粉屋に入り、鮎屋に入る。

○二十日、土用に入る。之れより極熱の天地に入る。歸省する學生の麥藁帽停車場の内外に群る。

○土用の丑の日に鰻を食へば、暑氣の障りなしと稱せらる。蒲燒の匂ひ貧しき鼻を打つ。行路病者多し。

○月見草微かなる音して、夕闇に黄なる匂ひを漂はす。川原の夕べ、遠く此の花の簇り咲くを見れば、神往く。

○夜は十二時過ぎ、雨白く至る。涼味ふところに入りて寝ぬるを忘る。

○深き夜の空に天の川灰かに見え來る。秋に知られぬ趣あり。

○四萬六千日には淺草の觀音堂の前終日人の山を築き、お賽錢の降ること急霰の如し。此の日に一日に參詣する功德は四萬六千日のそれに向ふとぞ傳ふる。短かき人生は愈々短くなれり。

○朝顔の花を賣り歩く聲、日毎の朝に加はり行く。水色の太輪の花とある小路の革屋の店先きに置かれたるは哀れなり。

○雨霽れて熱火降りそぐ眞晝の街上を高足駄の音カタくと歸り

行く腰辨こしべんの日に焼けし頸筋くびすぢに、玉なす汗の流れたる、黒白こくびやくのけぢめ、憐れに覺ゆ。

○秋海棠しゅうかいだう、鳳仙花ほうせんくわなど、秋の花早またきに咲く。一簾れんの透影すゐかげに見て美しくしきは紅あかきかんななり、唐たうあやめなり。午後の日の光なり。

○大川端おほがはたに汽船の笛の涼しさを聴くは夕暮の程なり。暮靄ぼあい遠く河上かじやうより籠こめ來りて、對岸たいがんの酒樓しゆろう、青き簾はたくと微風びふうに鳴る。夏は夕べ川端かはたの住居すまひこそ嬉しけれ。

○縁日の夜の人多ひとてきは暑苦あつくるし。蓄音機ちくおんきの含み聲こゑに何事か眩つよやける、更に煩わづらはし。(六月二十一日—七月二十日)

## 其 七

○此の頃の空、藍色あゐいろに輝きわたりて、觸さらば指の焼け爛たれむ心地す。所在しよざい

なき身を籐椅子とういすに凭たせて、見るともなしに見る眼の、偶ふと湧き出てし雲の峰に行けば、白き光り瞳めを射る。一團だんの森、其の下もとに鬱うつとして、綠葉みどりばのかがやき、空の藍あゐ雲の白しろに反映はんえいす。天地風全く死して、萬象ばんしやう聲を收とむ。

○誰の心にも旅を思はぬはなし。山路やまぢの清水を想ひ、暮れゆく海の白帆しろはを懷おもふ。故郷ある者は幸さいはひなり、競うて都會を去る新しき夏帽なつぼうの影、停車場に浮動ひうどうす。中に廂髪ひさしがみの白きリボンのそよげるは、流石りうせきに女らしき一味の優やさしみを點せり。

○停車場に可憐こゝろの少女花束はなたばを賣る。白衣はくゐ綠髮りよくはつ、楚々として人を動かす。一束の花、紅あかきあり、紫むらさなるあり、黄きなるあり、淡たんき夏の香かを吐はきて、旅を思ふ心の慌あわだしさを和なましむ。西洋花せいやうばなの名の、耳みみに柔ならかく涼しさを歌ふが如く、低く唱へて、場内の蒸むせたる空氣を搖ゆる。

○並木なみきの柳街やなぎまちの埃ほこりを受けて、白く萎なえたる銀座通りぎんざどおりに、電車の行き交へ

るを見るは、さまで暑苦しからず。外濠を走れるは、晝もなほ涼しげなり。乗客の白き浴衣の翻へれるは、扇使ふほどの風を覺えしむ。更に甲武線のその疾風の如く馳せちがふは、極めて快きわざなり。好事の都人は之れに涼を納るめり。

○八月初め、天地蕭寂として秋に入る。庭樹を鳴らす風ざわ／＼と自から秋の聲あり。白露やうやく草に満ちて、萩咲き、芙蓉咲き、蟲聲起る。

○夏の末より秋にかけて、蝸啼く。一聯の珠玉相觸れて鳴るが如き清き響、曉の松林より起れるは、寢ざめ涼しきものなり。歌などに夕暮の景物に加へて、偏に寂しきものにのみ詠み來れるは、例の消極的なる觀方なり。其の清く爽やかなる曉の音聲こそ、初秋の心を歌ひ出でたるものなれ。

○残る暑さは、中々に堪へ難きものなり。秋とは名のみ、焼き盡さずむば

止まじとする日の光り肌はだに沁しみて痛いたし。炒りつく如き蟬の聲、亡びゆく前の勢を集めて、秋の熱さに競ふ。

○兩國橋の川開きは、江戸名所圖繪の昔より都の名物の一に數へらる。打ちあぐる花火の、空中に飛花落葉のあはれを盡して、橋上人の山を築き、遊船、川に満つ。

○植物園は納涼に適せる處なり。綠陰幽草、地に敷きて、池廣く、水に睡蓮の花の白きを浮べたり。丘の上、水のほとり、憩ふに亭あり、ベンチあり、木洩日微かにこぼれ來て、女の頸脚の白きに落つ。その女、一心にツルゲ、ネフの黄なる表紙の短篇を讀みて、折々翻す頁に、白き指の動けるを見る。一鳥幽かに啼きて、暑けれど秋は既に空に搖げり。

○天竺牡丹の花多きは王子の康樂園、柏木の華洲園なり。花豊麗にして、各種の色彩に富む。大輪なるも牡丹の如く妖艶ならず、柔らかく暖かさ



中に、自みづから秋のこゝろを含む。

○茄子なす紫むらさ深くして、青あおき刀豆なたまめの漬つけけたると共に朝の膳ぜんに上る。齒はを當あつる刀豆なたまめの堅かたきに、秋の味あじを感じしむ。玉蜀黍とうもろこし實みりて、附燒つけやきの匂におひ、暗くらき夜の町まちの角かどなどより來る。カンテラの灯影あかりかげに、兒こを負おへる若わかき妻つまの生活せいかつとせるを見るは、慘いたましき心地こころす。

○曉あかつき闇やみに蚊帳かや釣草つりくさのそよぎて、螢火へいくわ一點いっけん、さびしく浮うび出でづ、鷄にほとりの啼なく聲こゑす。

○支那人しやなじんの宿やどの門口かどぐちに、百日紅ひやくじつこうの花はな咲さけるを見、洋食店やうしょくてんの二階にがいの窓際まどぎはに、夾竹桃けふちうとうの花はな盛もりなるを見るは、配と合あわざとらしからず。

○青山せいざんより玉川電車たまがわでんしゃに乗りて、二子ふたこに至いたり、川邊かはべの砂利じやりの冷ひやえたるを踏ふみて、暮色ぼしやく遠とほき山影さんかげを罩こむるを眺ながめ、近ちかき清流せいりうのやうく、白しろく光あれるを見るは、秋の涼すずしさを覺おぼゆるわざなり。疲つかれるれば、邊あたりの旗亭はたてに入りて、鮎あし

の肥あえたるに、麥酒まいしゆの冷ひやたきを味あじふは、清せい淡たんの趣おもむき、棄あて難たがきものあるべし。見上みあぐれば、空そらには、七なな日にちばかりの月つきあり、初はめて雁かりが音ねを聽きく。(七月二十一日—八月二十日)

## 其 八

○雨戸あまどの隙ひまを洩もりて、銀箭ぎんせん流ながるゝが如ごとく枕頭ちんとうに入り來る。寢覺ねがめて耳みみを、欵こぼつれば、戸外水こゝろみづよりも輕かろきもの浮動うきどうす。霧きりやうやく罩こめ來るなるべし。○朝冷あさひややかにして、朝あの啼なく、寢返ねがりて窓まどの硝子戸がらすどを見れば、雫しづ頻しきりに流ながれて、雨降あめふるに似にたり。

○銀製ぎんせいの洋燈やうとうに、白しろき冷ひやかなる氣きの觸ふれて、昨夜こゝろの火あは、尙あ赤黒あかぐろく點とれり。縁えんの邊あたり、芒すす長ながく延のびて、吹ふくともなき朝風あさかぜにそよぐ。

○夏の金魚きんぎょは、早はやう秋の寒ふさを知る。ほてい草ほていそうの陰甕かげかめの底そこひに隠かくれて、油あぶら

水の面に泛び來らず。日高うして風暖かなれば、漸やく出で、唸喘す。長き尻尾をさばきて、優遊するは實に心ゆく眺めなり。

○天地寥廓として人と自然と冥合するは此の時なり。遠山の上に雲あり、白うして動かず。雁聲時に遠きより來る。

○足もとに白く光るものを見れば、草間を行くさゝ流れなり。蓼の花紅く咲きて、水縷々として盡きず。暇ある者は、近郊に出て、慰樂を自然に求む。

○多摩の河原に立ちて、心なく水の流るゝを見る。水車の廻れるは静かなり、かけすの啼くを聴くは消魂まし。

○山路を行きて、淺茅生に龍膽の咲けるを見るは、憐れなり。樹影なくして、あらはに秋の強き日を受く。

○燈火やうやく親むべし。薄暮の室に火を點ずれば、明るく物に沁み入

るを覺ゆ。夜長うして眼涙ゆ。

○木槿の花の白さを、とある裏町の軒かげに見て、涙せし記憶はなほ新なり。其の半窓より首さし出し、長き女の顔の、病身らしかりしが、今も心傷ましむ。

○風邪聲に語り交はせるうら若き女に、下町の艶めかしき小路の夕ぐれを想はしむ。御神燈の火未だ入らず、雁々三つ口と呼べる小兒の聲、清く徹れり。

○二百十日、雲のけはひ、流石に穩かならず、日影熱く輝きて、風樹梢に鳴る。吹かれながら法師蟬の啼き立つは危し。夕暮より夜に互りて、風雨となれり。青柿の池に落ちて、音をなせるが、際立ちて耳に入る。

○明くれは、空さりげなく收まりて、秋早りに濡れたる地の静かに乾き行くを見る。楓をめぐりて、頬白の飛び交ふ。

○二百二十日は事なし、米價やうやく下りて、米屋町を行きかふ人の面に暗き色あり、稻花、快く熟せむとす。

○雨降ること多し、二日三日にして霽れず、風荒く加はれば、所々に出水の報を傳ふ、鐘太鼓の音凄まじく、半夜の耳を劈く、堤切れて濁流、屋を侵せば、人は身を以て免る、家財を流し、骨肉を失ひ、慘禍極まる所を知らず。

○水の退きたるあとの川端に、柳青黒く濕りて、秋の薄き日に蕭條たるは、うら淋しき景色なり、岸の土深く洗はれて、石の露出せるあたり、蟋蟀の匍ひ行くを見て、此の小動物の哀れに、幸ある生命を想ふ。

○秋の月は皎々として、光被する所際涯なし、殊更樹影の暗さを行きて、時にうなだれし眼を放つに、清光蟲語、滋き草を照らし、遠く來る人の眉目を明かならしむ。

○仲秋月無きは、淋しくいたましさものなり、雨降り出で、簷の點滴を

聞くは、別きても佗し、高樓酒を置いて、侍らす美姫の横顔、しめれる燈影に、薄曇る夜のさまを、繪を見たる後の幻影を、趁ふ如くに考ふ。

○木の葉いつとはなく、黄を帯びて、照らせる日の光りも、黄なり、秋の自然は、斯くて次第に、黄に移り行く。

○栗市に出で、夜は長くなれり、松茸の香、厨に動きて、野に行樂の人多し、路傍の雜草に、まじりて、白き小菊の花、咲く。

○彼岸に入る。(八月二十一日—九月二十日)

## 其 九

○晩秋の空高く晴れて、濃き藍色の底深く見ゆ、木の葉黄に染みて、黙して鳥の翔り行くあり、原上人稀にして、天地廣漠たり、空を仰いで呼吸すれば、神思濶くして達す。

○一路香かに晴れて、打續く黄葉のもと、草の實の赤き白き、自然の色の配合は、此の時極めて静かなり。

○林間に入れば、雑木の葉等しく黄に浸りて、目色明らかなり。心は常に目覺めて冥想すること能はず。

○獵期に入りて、遠き銃聲のこだまを聞く。鳥影地に低く、草の實を啄む。小さき獸あり、軽く音を潜めて草間を跳る。

○狐色せる草原のはてに家二三連る邊り、晝の炊烟白く颯る。朝暮に見出し難き閑情をおぼゆ。悠々たる人生の一日。

○橙黄色の大なる入目を眺めつくして、路傍の草に水蒸氣のまつはる頃ほひ、歩を移す家路の空に、後の月白く輝き出づ。滴らむとする水氣に木々の黄葉は、白金の色を浮べたり。

○大豆の新豆を煮て月前に供ふる舊慣は、堅苦しき田舎人のすさびと

なれり。豆名月の名、歳事記にのみや残らむ。

○こすもすの花、だりやの花、秋の晩の明らかなる空氣に、清楚なる色彩を漂はせり。東京の西郊大久保村は、近くこすもすの花に著はる。破れたる垣根を越して、青き莖のなよなよとせるに、白き紅き花を著けたるは、新しき鄙めさなり。淺く、含蓄なけれど、輕薄ならず。

○だりやの花は其の類ひ多く、色彩はた豊かなり。花の容圓く足らひて、飢ゑたる思を満さしむ。ものなべて瘦せたる秋に、此の花の豊滿なるを見るは、自然の人に與ふる美しくしき慰藉なり。

○鵲の聲、静寂なる天地の思を破りて、消魂しく響く。晩秋の響なり。草の實の撥ぬる音も亦晩秋の小さき響たるを失はず。閑寂の庭に、突如として鳳仙花の實の破るゝを聽け。

○黄葉せる木の間を飛び交ふ瑠璃鳥の圓く滑らかなる聲に、秋思輕く

搖く。此の鳥頭と背は青く、頬より胸にかけて黒く、腹は白し。菱田春草氏が嘗て「落葉」の中に描きたるは此の鳥なり。

○紅葉は俗臭あり、黄葉は雅味あり。紅葉の錦など言ひ來れるは、想うても悪感を催さしむ。青葉を形容して青地の錦と言へるは、同じ觀方なれど、眼に浮ぶる快感は、前と同じからず。

○水ばたを行きて、龜朶の間に頬赤の群れ遊べるを見るは、畫味あり。形雀に似て、稍々小さく、頬赤く胸白し。

○晴れたる夜、星華高く輝きて、風寒からず。街上人の往きかひ繁く、兩側の商店の燈影、明るく澄めり。車の響、人の足音頻りにて、騒がしからず。秋氣は、喧しき中に一道の淋しみを通はせたり。

○夜の露店に金魚賣の炒豆を嚮けるを見るは、季節のあはれの著しく、人事に及ぼせる一例なり。

○無花果の實熟れて落つ。赤く裂けたるが、紫を帯びて、壞れたる寂しさは、遠く無人の境に彷徨ひ來れる心地す。

○十月半ばより文部省の美術展覽會は開かる。藝術家が一年毎の晴れの舞臺なり。新意ありて、輕薄ならざる作品の、精選せられて場に上るは、快心の業なり。藝術の野は、廣く拓かれて、隠れたる才は、擧げらる。慶ぶべき現象なり。

○窮まれるが如き日本畫の運命に、新興の活氣を賦與したるは、此の展覽會のなせる顯著なる事業なり。

○秋の終りに近くして、空やうやく白く、ざれ來らむとす。雨多く、蟲聲老ゆ。

○郊外の庭畠などに菊集まり咲く。國技館にては、電気仕掛けにて菊人形を見すと云ふ。

○乾きたる空気を濕らして、枇杷の花白く夕ぐれの土にちる。其の芭蕉の葉にかゝれるは、いと哀れなり。(九月二十一日—十月二十日)

## 其十

○この頃の日射長閑にして春の如し。季は既に小春に入れるなり。午前十一時頃の日光を受けて、縁先などより、遠き山影を望むに、打ち煙れる如し。眼霞みて、翔り行く鳥の翼夢に見るに似たり。

○返り咲く花の多さが中に、林檎の薄紅なるが、秋の寂しさに慣れたる眼に懐かしき慰藉の如く映れり。櫻の花、李の花、何れか可憐の姿ならざる。

○荒涼寂寞の自然は、隣に潜めり。風は木枯となり、雨は時雨となり、更に、霜、雪、霰、霰、隙なく襲ひ來れる冬の凄まじさの、しばし羽を歛めて、最後の

慰安に酔、る果敢なき人間を、高さ山の上などより見下ろせるが如し。有爲轉變の激しさを此の小春の隣に見むとは、誰も想ひ及ばざるべし。○さるにても、小春日の下の世界の悠々として、長閑なること哉。萬木黄に染み盡して、空の色は藍碧愈々深し。雲あれば白く、ゆるう徂徠す。黄葉の眺め美はしきは、信濃の山々なるべし。平原に打ち續く黄一色の限りなき眺めも妙なれど、山間霜深くして、直黄の眼に快きに若かざるべし。晩秋の旅の面白味は、山の高さに攀ちて、黄葉の色に飽くあり。黄なる葉に圍まれたる高原の小春日に寝て、淺間の噴煙を望み見る、輕井澤邊りの此の頃ぞ偲ばるし。

○黄落してあらはなる樹々の間に、獸の遊べるを見るは、暖かき眺めなり。天地森閑として、日の光たゞ極みなし。

○造りたる菊の花の輪大なるは、風情なし。山に生ふる菊、野に匂ふ菊、人

の手の加はらざる自然の味ひを好む。山菊のうす紫に夜のほのくくと  
明けゆくは、自然の無技巧の却つて技巧を示せる所なり。

○枇杷の花、寒き薄日に咲きてより、淋しき、花の香を求めて、目白頬白な  
どの群、聚まり来る。ちいと啼く低き聲も、群りては、冬の日の眠るが如き  
静けさを動かして、閑居の旦暮も寂々しからず。

○木斛の實の暖かき日射に裂けて、露出せる赤き色の葉の深緑と相映  
じて、工まざる配合に、小やかなる自然の匂ひを覺ゆ。常磐樹の緑濃く、鬱  
として冬枯の淋しき中に立ちたる此の一樹の心強く思はる。

○郊外は冬來ること早く、門の内に焚火する人の面都近き邊りとは思  
へぬ迄に可笑しく鄙びたり。人の訪ひ來れば、挨拶は後にして先づ煖ま  
れよと言ふ。大久保に村居せし頃の桂月氏に此の鄙びの適應ひたりし  
ことよ。

○菊花の瓶、天長の佳節に新しく匂ひて、朝づく日暖から朗かなり。路行  
く人の面に和氣溢れ、小春日の光行く處に照りわたる。人の心改まりて、  
歡樂に酔へるが如きは、年立つ日と今日となり。勳章と絹帽と街の美觀  
を織り出せるを見よ。

○酉の市は十一月のその日に東京淺草の大鷲神社前に開かる。此の市  
にて賣れるは熊手なり、之れは熊手にて福を搔込むと云ふ縁喜より起  
れり。慾深き市人の迷信はさること乍ら、程近き廓の歌舞の菩薩にも隨  
喜して、財布の底はたきても、來年の福に有りつかむとする志こそ殊勝  
なれ。

○此の月初め、靖國神社の大祭は開かる。老いたる父母の、わが子の忠魂  
をも弔ふと云ふ晴れの祭りの嬉しさに、遙々上り來れるらしきが此處  
彼處に見ゆ。胸の邊りに附けたる徽章を失はじとする心構へに、涙そ

るに催さる。

○水菓子屋の店先さ、林檎の匂ひ寒く香りて、柿、蜜柑等、冬らしき色彩の眼に沁み來る。縁日の植木屋の群り咲ける小菊の鉢に水を打てるが、カシテラの灯影に寒く見えて、花に痛々しき心地す、夜の空氣は全く冬となれり。

○吐き出す氣息、白くあざやかに見え來る。人しげき朝の巷を籠めむばかりなる白き息の透き徹れる冬の氣に抗しあへて、忽ちにして消え行く。(十月二十一日—十一月二十日)

其十一

○屋根の霜白々として、手洗鉢の残れる水、落葉をまぜて薄く氷れり。山の手の冬は下町に比べて寒さ來ること早く、凍れる如く静まり返れる

朝の空氣に、一樣に戸を鎖して、人の夢いと穩やかなり。牛乳配達ゴウの車、獨り動きて、凍てたる路を輾り行く。

○枯木の枝にひたと附きて啼かぬ小鳥のあはれさ、蓆などに蓋されて日の眼見ざる池の金魚の無爲にして年を越さむ淋しさも想はる。冬に弱き木の敢なくも蓆に包まれたる、そこに生くべく餘義なくせられたる哀しみも見ゆ。木の葉の衣振ひ落されて、赤裸々たる木々の立てるに霜白く置けるは、慘ましき中の快感なり。

○冬の自然の壓迫に抗して、若々しき元氣を失はざる雀の群れの快き哉、彼等は小さき健兒なり。霜白き枯木の間を渡り、雪深き中に餌を漁りて疲るゝ色なし。木枯に吹かれ、寒に逢うて、蠻氣ばんき更に加はる。彼等を見る毎に小さき勝利者を想ふ。

○小菊の葉の霜に紅むの潮せるは美しくし。花の色黄なるが多く、配色の



上に、自然の加へたる小なる技巧を懐かしむ。水仙の態とらくして寒げなるよりも、此の花の自からなる趣を愛づ。

○此の頃の晴れたる午前の日の色は何か心より親しまる。書窓の障子、透き徹る様に明るく、明け放せば、枯木の枝薄く湿へるが如く打ち煙れり。

○椿の葉がぐれに花の色 of 白きを見出せるは、饑えたる心の慰まるゝものなり。青木の果の赤きが、遠來の客の如く珍らしく目に入るも、此の頃の樂みなり。一色に劃られたる如き自然の荒廢したる中に力強き色なるかな。

○山の手より郊外にかけて霜どけの煩ひ多きは苦痛なり。此の邊りに家居せる者、足一步を出づれば、下駄の泥重くして、脚疾を患へる如くに自由ならず。寒きよりも何よりも惱ましさは之れなり。

○静かに暮れ行く裏町などを歩みて、淋しさに堪へ難く、袂搔い探りて得たる一本の煙草に、燐寸の火を擦るに、心聊か和む。更に煙ふかしつゝ、その一縷の頻りに揺けるを見るも、果敢なき慰藉なり。

○電燈の明り薄く濁りて、戶外風ある氣色なり。夕刊を配り歩く脚夫の足の冷たさを切りに想ふ。

○年の市、十二月の半より開き初む。市負けたの賣聲、年々に寂びれ行く。神田の明神の坂の兩側に、羽子板賣る店並びて、押繪細工の派手やかなるが燭光に映じて、仰ぎ見る娘子供の黒き瞳に輝ける美觀は、今電車往きかへる荒まじさに搔き消されて亦見るべからず。神社の境内に僅かに其の名残りを留むるも哀れなり。秋祭りに花車の高さを誇りとせしも、電線の爲めに遮られ、明神の市の賑ひは電車に阻まる。神田てふ著しき印象は文化に浸蝕せられぬ。

○街の家々の前に松立つる人々の様を見るは、歳暮らしき感じを起さしむるものなり。生活に追はれて、月の末に晦日あるを恐れ來れる者は、愕然としてこゝに年の終りの近づけるを知る。年内餘す所幾日、願れば心の寒さを覺ゆ。

○歳暮の街に満つる人々の心の慌だしさは、他の季節に又と見出し難き所なり。大賣出の店先きに、廣目屋の樂隊鳴り、三越の自働車、お誂への春著を載せて誰々の邸宅にか行く。道草せる小僧も、さすがに忙中の閑をもとめ難く、そゝくさとして小刻みに行く。人力車、自轉車、箱車、右往左往に馳せ違ふ、憐れなる人生の戰場なり。

○冬至に近くして、晷益々短かし。明け遅くして、暮れ早く、永き日の陽なほ高き頃に燈火既に點せられて、夜業せる職工の青白き顔、露はに明け放ちたる工場の所狭く集へり。殊に新年の刷物に一分一秒を争へる印

刷所のはためきの中に、黒く煤けて目のみ光れる活字拾ひの、二階の窓よりふと顔差出して、暮れたる町の燈影を眺むる眼の、どんよりせる中に何か求むる所ありげなる哀れさ。(十一月二十一日—十二月二十日)

## 其 十 二

○歳暮るゝに近くして、空青う晴れ續く、青けれど澄まず、底に灰色の濁れるを混へたらむが如し。風なく麗らかなれど、裡にもものゝ終りの寂しみを含む。諦視すれば、身内の疲れを覺ゆ。働らく丈け働らきて、尙ほ爲すべき事は残れり。心に不安を懷きて、霎時此の青き晴れ空に對するに、うつら／＼と双の臉の塞がるを覺えず、今日は冬に稀れる日和なり。

○一とせの暮、美濃の山を攀ちて、巖角に福壽草の花の聚まり咲けるを見。月並視來りし此の花の愛すべき趣を眺めて、摘みし一輪の黄なる

を賞てたりしを記憶す。今はしなく其の記憶を呼んで、寒かりし山越えの霜に黄なる匂ひを點せし此の花の趣あるを想ふ。時と處とに依りて花の生命に死活あり。

○場末の街も松飾りして新年の装ひ成れば、賣出し福引と客を呼ぶ用意をさく、怠りなし。暮の暇賜はりて所在なき小役人などの妻をつれ子を伴れて、日中よりぶらぶら、せるもの相踵ぐは、此の邊りの町の特殊の光景なり。さんく、歩いて歸るさは、母に引かるゝ女の子の手に羽子板あり、寝たる男の兒を抱ける父の背に金太郎の凧はたくと動けり。正月は何時にても來よ、太平の象なるかな。

○郊外の歳暮は静かなるものなり。殆んど年の來るを知らざるものゝ如く、縁の日向、炬燵の中、人はたゞ暖かきに就く。霜枯れし籬落時に冬椿の白さを見、寒紅梅の紅なるを賭る、鳥聲閑なり。霜柱くづして訪ふ人

稀れに、若うして籠り居の徒然なるが多し。植木屋が得意先きに歳暮に廻るとして、梅の盆栽など載せたる車を挽き行く音、時にゆるやかに聞ゆ。○餅搗きは歳暮の特殊の景物なり。町家の若者の搗くは元氣よく賑ははしきものなれど、郊外の林の中の家などにて搗くは、寂しく陰氣なり。大久保に村居せし頃、夜更けて此の餅搗の音を聞き、心うち沈みたりき。搗きながら歌ふ節の陰に籠りて、少し隔たりたればにや、皸枯れしやうなる聲の、絶えく、に聞ゆ。木枯し吹き絶えて、林に聲なき夜なりき。○湯につかりて遠く市のどよみを聴き、誰彼の生の苦闘を想ふに、うら安き身の早く老ゆるが如き哀しみを生ず。落葉の音一しきり、遅れて來る夕刊の鈴の音、奈何なる新聲をか齎らせる。さても、郊外の歳暮の夜の静かなるかな。

○年こゝに盡くる大晦日の夜の星光を仰ぎ、まみじみとせる哀感を味

はふ間もなく、百八の鐘の聲は起れり。一杵又一杵、ふる年を葬る音の次第に極まり行けば、夜はほのくくと明く。

○二階の籐椅子に凭りて、煙草吹かしつゝ、今年の初空を望む。蒼天拭ふが如くに晴れて、渡り行く日輪の歩みいと快げなり。屠蘇香ひ、凧なり。羽子飛び、平凡なる正月の幕開かざる此の霎時の間こそ、却つて新なる年の平和と愉悦とを味はふべけれ。

○元旦の朝早く乗合なき初電車に乗りて、濠端を一周し、深き緑の松の梢に、初日の影の漂へるを見れば、静寧なる年の初めの感じを覺ゆべし。此の景色、見やうに依りては、月並の臭味あるべきも、ゆたかに静かなる新年の象は、之に見得らるべし。

○二日の初荷は、江戸時代の市街美を感ぜしむ。美装せられし馬の初嘶きの、いかに八百八街に響きしかを想見せしむ。六日の夕べに門松取ら

れたる寂しさは、明くる七草の薺を叩く粗板の音に搔き消されしも、今は此の音、家毎の厨に聞かれずなりぬ。

○初春の棚引く薄霞は、今の一月に見るべくもあらず。五日より寒に入りて、水道の鐵管凍りつく朝多し。無爲の富豪の子、争うて初獵に出づ。罪なき雉子、山鳥、鶉、鴉などの群、彼等の兇手に落つ。

○寒詣りの白衣を夜の街に見るは、一種の哀愁を惹く。鳴らし行く鈴の音の何ぞ滞れるや。

○初芝居の重なるは、月の半より開かる。悠々として東風に鳴れる初轍の音に早く春色の動くを見る。(十二月二十一日—一月二十日)

文章月令了

明治四十四年十一月一日印刷  
明治四十四年十一月五日發行

文話歌話

定價金五拾錢

著 者

金子雄太郎

發 行 者

東京市神田區表神保町四番地  
坂 本 眞 三

印 刷 者

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
青 木 弘

印 刷 所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地  
秀英舍第一工場



發行元

東京市神田區表神保町四番地  
振替貯金口座東京八七二番

大 同 館

大賣捌所

神田區表神保町四番地  
日本橋 林 平

名古屋 川 瀨 野

大阪 吉岡寶文館

久留米 菊 竹 書店  
熊本 長 崎

大同館發兌目錄

東京青山學院 儀著 ○最新日本地理資料 全壹冊 定價壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢

尾上柴舟著 ○頭源氏物語大意 全壹冊 定價壹圓四拾錢 郵稅八錢

文學士高木武著 ○受驗參考新撰漢文要義 全壹冊 定價五拾五錢 郵稅六錢

金子薰園著 ○文話歌話 全一冊 定價五拾錢 郵稅六錢

東京青山學院 儀著 ○德川幕府史 全壹冊 近刊

▲薰園著作目錄

◎片われ月	歌集	明治三十四年一月	新聲社發行
◎小詩	歌集	明治三十八年三月	新潮社發行
◎伶人	歌集	明治三十九年四月	博報堂發行
◎わがおもひ	歌集	明治四十年三月	弘成館發行
◎覺めたる歌	歌集	明治四十三年三月	春陽堂發行
◎青き山河	歌集	明治四十四年十一月	新潮社發行
◎和歌入門		明治三十九年十二月	新潮社發行
◎和歌新辭典		明治四十二年三月	同社發行
◎新書簡文		明治四十二年九月	同社發行
◎書簡文捷徑		明治四十三年五月	同社發行
◎文話歌話		明治四十四年十月	大同館發行

金子園主幹

唯一の

和歌通信教授

(會規要郵券二錢)

明治卅八年創立

短歌研究會

東京牛込甲良町廿

150.-